

IS—インフィニット・ストラトス— 欠けた歯車

生そば

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISが開発されてから50年後の世界から40年前に時を遡ってきた傭兵、アニエス・アロン。彼女がいた時代ではISによる戦争が起きており、タイムスリップしたアニエスは未来を変えるために過去で奮闘する。

Episode. 0に主人公の挿絵を添付。

Episode. 19, 33に挿絵を添付。

E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e. ★	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e. ★	
2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7	1 6	1 5	1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
121	116	111	106	100	96	92	89	84	78	73	68	63	58	53	47	42	37	32	25	19	13	5	1

目次

E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e. ★	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e. ★	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	E p i s o d e.	
4 5	4 4	4 3	4 2	4 1 ★	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3 ★	3 2	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4
249	244	239	231	225	217	212	205	200	196	190	186	181	176	170	165	160	151	145	138	133	127

Episode. 0 ★

史上最強の兵器『インフィニット・ストラトス』——略称：IS——
が開発されて50年の月日が経った。

当初はパワードスーツとしてスポーツに使用されていたISは、現在では完全に『兵器』へと認識を変えられた。

「こちら、コードAダブルエースA。応答を願う」

戦火の中を必死で逃げながら彼女は通信で呼び掛けるも、電波が届かないのか潰されているのか返事はない。

愛機は既にエネルギーが底をつき、ISによる戦闘になれば彼女の命は一瞬で吹き飛んでしまう。

「見つけたぞ」

背後で声がして、振り返る。

「傭兵風情が、よくも手こずらせてくれたな」

目の前で浮かぶISが彼女へと銃口を向ける。

(ここで死ぬのか……オレは)

思えば短くつまらない人生だったと彼女は嘆いた。

両親共に傭兵だったため、生まれてすぐに傭兵として教育されISにも乗った。

数十年前ならばアスリートになるために頑張るものだが、今の時代では『殺すため』の技術でしかなかった。

彼女は今年で16歳。普通なら高校生として青春を謳歌しても良い年齢だ。

(もし、生まれ変わるなら。せめて戦争のない世界に——)

瞬間、視界が光で埋め尽くされ、彼女の意識は途切れた。

「ん……」

体が重い。でも暖かい。

涅槃とはこんな所なのだろうか。

「いや、これはないな」

しかし目を開けると白い天井があった。

周りを白いカーテンで覆われて外が見えない。

体には包帯がグルグル巻きされており、しつかりと治療されているらしい。

最後に残る記憶は敵のISに銃口を向けられている光景。

あのISはブラジル製の物だった。

通信手段は今の所は無いと踏んでいいだろう。

捕虜を収容するための、ここはその医療区画と言っても内線以外は特殊なパスワードが無くては使えなまい。

「起きたか」

「っ!？」

カーテンが開けられ、身を強張らせる。

抵抗する必要も、抵抗することもできない。

麻酔でも打たれたかのように、オレの体は動かない。

「誰だ？」

「私は織斑千冬。ここはIS学園の保健室だ」

「IS学園だと……?」

いや、その前になんと言った？ 織斑千冬？

IS学園は数年前に閉鎖された筈だ。

そして織斑千冬は『初代ブリュンヒルデ』の称号を持つ最強のIS操縦者。

目の前にいる女は確かに織斑千冬に似ている。

確か既に60歳を越えているはずだが、若かりし頃の顔を見たことがある。新聞でだが。

「今日は何年の何月だろうか」

「今日は20XX年の三月だが。それよりも、お前の名前を聞こうか」
「……アニエス・アロンだ。オレはどうしてここに？」

「三日前の夜。大雨の中、お前が校庭内で倒れているのを巡回の職員が発見した。うちの生徒ではないが、重症だったから治療してやったという訳だ」

オレは捕虜になった訳でもなく、そしてオレがいた時代から数十年前の過去に来て、ISに撃たれて死んでもいない。

これが夢だというならそれまでだが、現実と受け止めるのなら……
(願いが叶ったのかもしれないな)

この時代ではまだISがスポーツ扱いされていた筈だ。

今ほど神に感謝したことはない。

と言ってもオレは無信仰者だったな。

「ところで、お前のことについて説明してほしいのだが」

「ああ、そうだったな。と言っても、信じてもらえるとは思えないが」
「言ってみたまえ」

「私は今から40年後、つまりISが開発されてから50年後から来た傭兵。……どうだ、信じられるか？」

「証明できるならな」

「それは……。いや？」

オレが持っていたISがあれば証明できるはず。

「オレの荷物や着ていた服や荷物はあるか？」

「ああ、これだな」

千冬から受け取ったのは、オレが着ていた服とポーチだけだった。通信機や当時の技術を示せるものはない。

オレの愛機『ラファール・リヴァイヴアル・AAカスタム』の待機状態は腕輪だったが、今は持っていない。

「ん、これでどうだ？」

千冬に向かって10円玉を突きつける。

オレは傭兵として色々な国へ飛ぶことがあったため、少ないながらも数々の国の通貨を持っている。

「この10円玉に書かれているのは、この時代から20年先の年号。

「偽物ではないようだ。では、本当に？」

「私は敵に撃たれて死んだ……筈だったんだがな」

「そうか」

「で、これからの私の処遇はどうなる？」

「それについてはこれから決まるだろう。これから私はお前が未来から来たと言わなければならぬ」

「バカにされないように気を付けるんだな」

「誰のせいだ、馬鹿者め。……まあ、そういうことだ。お前はそれまで治療に専念しているがいい」

「礼を言う。織斑千冬」

「安心するのは早いぞ」

「そう言い残して千冬は保健室の外へ出ていく。

「オレは荷物を握りしめながら、この先のことを考える。

「自分の処遇についてではなく、未来についてだ。

「これから起こるであろうISを使った戦争を、未来を知るオレなら止められるかもしれないというこの状況。

「オレのすべき事は、もしかしたらそういう事かもしれない。

「オレの今後にもよるが、もしこの学園に留まれるなら、まずはイレギュラーであるあの男に接触しよう。」

Episode. 1

オレ『アニエス・アロン』はIS学園の一生徒として入学した。

退院してからすぐIS学園の上層部と面会し、40年後の未来から来たという事を信じてもらい、傭兵で培われたISの操縦技術で卒業後にはIS学園で働くという未来も保証された。

そして今日は四月一日。既に放課後。

世界で唯一ISを操縦できる男イレギュラー『織斑一夏』と同じ教室かつ右隣の席となったのはいいものの、その様子を観察したところのオレの評価は『期待はずれ』という物だった。

授業にはついて行けず、挑発にすぐに乗る。

一体なぜこんな奴に女は惹かれるのだろうかと思わされるほどだった。

オレは絶対に惹かれないと断言しよう。

「あ、えつと……そこの赤毛の女子！」

後方から織斑の声が近付いてくる。

オレの前方に赤毛はおらず、その赤毛とは確実にオレだ。

「オレに何か用か？」

「お、オレ？ まあ、いいや」

どうやら一人称を不思議に思っている様だが、女が『オレ』を使つてはいけないという事はない筈だ。

これはオレが傭兵仲間から舐められないように背伸びをした結果、染み付いてしまったものなのだが。

「えつと、俺たちって前に何処かで会ったことある？」

「何だ？ 随分と古典的なナンパじゃないか」

「な、ナンパじゃねえよ。そうじゃなくて、授業中とかずっと俺のこと見てただろ？ だからどこかで会ったことがあったんじゃないかなって」

「いや、初対面だ」

正確に言くと『これから会う』だからな。

オレが初めて『織斑一夏』にあつたのは傭兵仲間と共に日本に滞在

した時だったが、今する話でもないので割愛する。

「第一、お前のことを見ていたやつはオレだけじゃないだろう？ 篠ノ之箒然り、セシリア・オルコット然り、あのクラス全員がお前を見ていた」

自己紹介の時など、特に熱い視線が一夏に向けられていた。

オレは『織斑一夏』という人間を観察していたに過ぎないのだが。

「このI.S学園で男が珍しいのはわかるんだけど……」

「オレは『織斑一夏』という存在が珍しいから見ていた訳ではないぞ？」

「えっ、それってどういうことだ？」

「興味以上の対象だということさ」

興味以上だが、それは恋愛感情ではなく尊敬に値するという意味だ。

面と向かってそう言えないのはきつと、オレの事情のせいだ。きつとそうに違いない。

「あ……えつと……？」

「ん、どうした？」

織斑が何やら困っているようだ。

「ごめん。名前を教えてくださいると助かる」

……何故聞いていない？

自己紹介が始まって始めにやったというのに。

「アニエス・アロンだ。アニエスでいい」

「じゃあ、俺も一夏でいいぜ」

「いや、織斑と呼ばせてもらおう」

「ええ？ なんでだよ」

「特に深い意味は無い」

今は同じ年齢でも、オレが知っている『織斑一夏』は60近い年齢だった。

そんな人物を簡単に名前呼び捨てられる筈がない。

これでも自然に振る舞っているつもりだが、不意に敬語になってしまわないか心配な部分もある。

「ん、どうして笑ってるんだ？」

「さあ、何故かな」

昔も今も……いや、未来も今も変わらないのか。

織斑さんという人は。

一年の寮棟。1035号室。

さて、ここがオレの部屋のようなのだが……

「何故、鍵が閉まっている？」

IS学園は全寮制で、生徒は殆どが相部屋。

鍵は普通どちらにも渡されるのだが、この部屋の鍵だけは予備すら忘れる生徒が去年まで使っていたらしく鍵がひとつしかないのだとか。

実はもうひとりの生徒に既に鍵が渡されているらしく、夕食の時間はまだなので部屋にいるはずだが。

コンコン……

扉を叩いてみても返事はない。

「シャワーでも浴びているのだろうか……」

「あれ、アニりんだー。かんちゃんに何か用？」

時間を開けて出直そうとした時、黄色い着ぐるみのような物を着た女子が現れた。

「だ、誰だ……？」

「私は、布仏本音だよー」

ゆったりとした雰囲気の子だ。

どうやらこの部屋の主のことを知っているらしい。

そう言えば、本音も一組だったか。

「かんちゃん、とは？」

「更識簪。だから『かんちゃん』なんだよー」

ふむ、更識家と言われれば聞いた事がある。というより、実際に更識家の者を見たこともあるし、傭兵として更識家から依頼されたこともあった。

代々の当主は『楯無』という名前を受け継いでいるらしいが、オレの相部屋となる彼女はそうではないのか。

「オレはこの部屋に住むことになったんだが、シャワーでも浴びてるのか呼んでも返事が無くてな」

「なら、私の部屋に来る？ お菓子あるよ〜？」

「ではしばらくお邪魔させてもらおう」

とととて、と歩きにくそうな服装のせいか歩行速度が極端に遅い。

数分かけて漸く本音の部屋の前にたどり着くが、既に簪とやらはシャワーを浴び終えているんじゃないかと思う。

「さ、入って入ってー」

「失礼する」

部屋に入るが、本音のルームメイトの姿は無かった。

しかも綺麗好きなのか、きちんと整理整頓もされている。

「本音はひとりなのか？」

「お姉ちゃんがいるんだけど、今は生徒会の仕事だと思うよ」

では整理されている理由はその姉がいるせいか。

「はい、アニりん。たくさんお菓子あるよー」

バスケットごと出されたお菓子をオレは少しだけ唾を飲んだ。

今までお菓子なんて食べたこと無かったからな。

「ん、何だこれは？」

細長くてチョコレートが塗られたお菓子を摘まんでみる。

「え、ポッキー知らないのー!？」

「ポッキーと言うのか。……頂きます」

ひとくち食べるとチョコの味わいと、スナックの食感が合わさった癖になるお菓子だった。

「旨い……」

「好評価だねー。やったー!」

本音は更に幾つかのお菓子を紹介してくれた。

ポッキーから始まり、ポテトチップス、カントリーマーム、じゃがりこetc. ……。

戦争中には中々食べられない代物で、オレは本音とともに食べまくってしまった。

今更だが、太らないか心配になってきた。

本音といると傭兵だった自分を忘れるようで、大変心地がいいようだ。

「アニりんって自分のこと『オレ』って言うけど、珍しいねー」

『オレ』という一人称は別に男の特権って訳ではなからう。オレのいた環境では女である故に下に見られることが多かったからな」

「アニりんってどこから来た人だっけー?」

「オレはフランスから来た。ISが開発される前は男が上に立っていたからな」

未来から来たとは言えないので、嘘と本当を織り混ぜて話しておく。

すまないな、本音。

「でもー、おしとやかなアニりんも見てみたいかもー」

「そ、それは遠慮しておく」

「えー。似合うと思うんだけどなあー」

コンコン……。

と、本音とそんなやり取りをしていた時にノックの音がする。

『本音。いる?』

「あ、かんちゃんだー」

「更識簪か」

本音が扉を開ける。

すると、その向こうにいた簪と目があった。

「その人、誰？」

「アニリんだよー」

「お前が更識簪だな」

「う、うん……」

簪はオレを見るなり本音の背後に隠れてしまう。

人見知りという奴だろうか。

「アニりんはかんちゃんのルームメイトなんだけど……」

「扉が開かなくてな。シャワーでも浴びているのかと、偶々出会った本音の部屋にお邪魔したという訳さ」

「あの扉、立て付けが悪いみたいで。別に鍵をかけてた訳じゃない」

「そうだったのか」

それならさつさと修理しないといけないだろう、IS学園よ。

鍵の数も同様に。

「かんちゃんはどうしたのー？」

「シャワー浴びてた時に、誰か来たんだけど本音だったのかなって思ってた」

「それがアニリんだったってことかー」

「まあ、そういう事なら仕方がないだろう」

「そうだねー。あ、かんちゃんもお菓子食べるー？」

「ううん、いらない」

簪はお菓子が好きではないのか？

結構ハマる食べ物だと思うぞ、お菓子というものは。

特にアレ……えっと、ポッキーとか。

「では、オレも戻るとしよう」

「うん。じゃあねー、アニりんく。かんちゃんく」

「またな、本音」

「じゃあね、本音」

本音の部屋を出て、自分たちの部屋へ。

今度はなんだか早く着いたように感じる、

やはり本音の歩行速度は遅い。

「ふむ、本当に立て付けが悪いな」

少し力を入れなければ開かなくなってしまっている。

これは早々に付け変えた方がいいな。

「明日にでも申請しておくとし——」

ズドン……………!

「何の音だ?」

「さあ……………?」

ズドン、ズドン、ズドン、ズドン!

廊下の向こうから突然の物音。

しかも立て続けに何度も聞こえてくる。

ただ事ではないと簪と共に音のする方へ行く。

すると他の女子たちもその音に気がついたようで、瞬く間に謎の音に対する野次馬が集まってきた。

「あー、織斑くんだ」

誰かがそう言った。

「箒? いや、箒さん? 不味いことになるんで?。特に俺が!」

織斑が必死に扉を叩いているのだが、何故その扉に穴が幾つも開いているのだろうか。

先ほどの物音の回数と一致しているから、何か関係があるのだろうか……………。

「……………入れ」

扉が開き、中から出てきた篠ノ之箒が織斑を中へ連れていった。

どうやら織斑は箒と相部屋らしい。

若い男女が同じ部屋というのはどうかとは思いますが、あの二人なら大丈夫だろう。

二人は幼馴染みらしいし、その上男の方はあの『織斑一夏』キング・オブ・唐宴木なのだから。

「帰る」

「そうだな」

ところで、簪は音の原因が織斑だと知ってから不機嫌になった。

気になって訪ねてみたのだが……………、

「貴女には関係無いから」

「と言って、理由を教えてくださいなかつた。
深くは追求しないでおこう。今はまだ。」

Episode. 2

翌日、簪と共に学食へ向かうが、箒と一緒に食事を摂っている織斑の姿を見て足早に去っていった。

何があったのか、その様子からはさっぱり読み取れない。

簪の事でわかった事と言えば、一晩中ひとりでカタカタしていた事だろう。

何をしているのか教えてもらえず、仕方なくそのカタカタ音を危聞きながら眠りについたのだが。

「……………」

それにしても、今日は部屋を出てから妙に視線を感じる。

辺りを見回すも、それらしい人物はいない。

すると、感じていた視線がわからなくなった。

「気のせいだろうか？」

この学園内でオレを監視する人物などいるはずがない。

未来人とは言え、オレが無闇に歴史を変えてしまつてはオレという存在が危ういかもれないのだ。

誰もオレがそんなことを考えてるとは思わないだろう。

あくまで目立たずに過ごすというのが一番だと思うが、生憎オレは戦争が起ると分かかっていて放っておける性格ではないのだ。

「このBセットを貰おう」

カウンターにBセットの札を出す。

メインディッシュがアジの開きという和食のセットだ。

トレイを受け取り、空いてる席を探していると……

「おーい、アニエス！」

織斑だ。しかもその側には箒が。

「おはよう、織斑」

「おう。おはよう」

……座つてもいいのか？ と箒の方へ視線を投げると、なに食わぬ顔で朝食を食べている。

なに食わぬ顔で、食べているのだ。

「ふむ」

「ん、どうかしたか？」

「いや、なんでもない。ではお邪魔するでしょう」

少し遅れてしまったので、朝食を早く食べなければ授業に遅刻してしまう。

箒には悪いが座らせて貰おう。

「箒、昨日話したアニエス・アロンだ」

「よろしく、箒」

「で、こっちが篠ノ之箒。俺の幼馴染みだ」

「……………」

幼馴染み、か。これまた定番だな。

さつきから箒がオレのことをチラチラ睨んでいるのは、オレが恋敵とでも思っているからなのだろうか。

「昨日から不機嫌だな。すまん、アニエス」

「ふむ……。箒？」

「……………」

「オレはお前の敵ではない。協力できることがあれば協力しよう」
「……………そうか」

ほっ。どうやらこちらの意図が伝わったらしい。

しかし、協力とは具体的にどんなことをするのだろうか。

色恋沙汰は経験皆無なのでさっぱりわからん。

放課後、剣道場。

織斑が箒と剣道で勝負していたのだが試合開始から10分もせず
に織斑があっさりと負けた。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強してたから、かな？」

「中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「ここでひとつ、未来情報。」

歴史が動き出すのは、世界で唯一ISを動かすことのできる男が出現した所からだ。

織斑一夏は周りに沢山の専用機持ちを侍らせていた為、裏の世界では『織斑勢力』などと言われていた。

例としてはオレのルームメイトもそのひとりだったのを思い出した。

そして裏では有名な亡国企業ファントム・タスクはIS学園に攻撃を仕掛けていた。
しかも一度ならず何度もだ。

初めはIS学園の専用機持ちの中で最も弱い織斑を狙ってISのコアを奪取しようとしたが先手を打たれ、ならば機体ごと奪ってしまおうとしたがこれも失敗。

そして次に思い付いたのは織斑を殺して奪い取る事だ。

しかしどれもこれも織斑勢力のメンバーの手によって妨げられる。
ところが遂に織斑の白式のデータが奪われるといった事態に陥る。

白式の武装『雪片式型』の構造が第四世代の物であったこともあって、亡国企業はその技術を予めどこからか建設されていた『黒騎士』というISに導入し、その見せしめながら勢力を強めていくという。

亡国企業がどのようなようにして白式のデータを奪うことができたのかは知らないが、この原因は織斑の力不足にある。

オレの目的の為に織斑には強くなってもらわなければならない。

「織斑くんてさあ」

「結構弱い?」

「ISほんとに動かせるのかなー」

ひそひそと聞こえるギャラリーの落胆した声。

結構弱い、なんて物ではない。

今の織斑が戦場に立ったら五分と持たない。

対する箒は稽古を積んできたようで、剣の腕は立つようだ。

初期の白式の武器は雪片ひと振りだけだったらしいから、彼女との稽古は有意義な物だろう。

が、しかしひとりだけと稽古をしても意味はない。

箒には悪いが、オレの目的の為にここは一肌脱いでみようか。

「織斑、肩の力を抜け」

「え、アニエス？」

「お前は剣道を久しぶりにやるから緊張しているだけだ。体に染み込んだ技術は感覚こそ薄れても動きだけは忘れないもの。体が覚えているとはそういう物だろう」

周りからの女子（特に箒）の視線が少し痛い、お構い無しにオレは言葉が続ける——しかし、箒がそれを許さなかった。

「な、何なのだお前は。私と一夏は幼馴染みで同門だ。故にこいつの剣道は私が見る。お前には関係がないだろう！」

「そうか？ オレはお前や織斑と同じクラスだし、……そうだな。昨日織斑にはナンパされた身でもある」

「なっ!？」

『えっ!？』

この場にいる全員がオレの言葉に反応した。

「あ、アニエス。だからアレはナンパじゃなくて——」

「たしか……『俺たちって前に何処かで会ったことある?』だったか?」

あんなことを平気で言える所が、唐変木である織斑一夏たる所だろうか。

「い、一夏あ……貴様あ！」

「ま、待て箒っ。誤解だ！」

「問答無用！」

箒は昔はこんな性格だったと『未来の織斑さん』からの情報。ばつちり狙い通りだ。

「ほら織斑、打ち返して見せろっ！」

「えっ、えっ!?!」

箒の怒りに任せた一撃。

確かに速いが直線的で避けやすい。

ブンツ!

風切り音のする振り下ろしを一夏は見事に躲して見せる。

そして次の瞬間――

バシイイン!

一夏の竹刀が箒の面を叩いた。

「……………なっ」

箒が面を打たれて正気に戻ると同時に驚きの声をあげた。

ギャラリ―たちは声もあげられない様子。

「危なかった……………って、アニエス！」

「許せ。だが、感覚を少しでも思い出せたんじゃないか？」

「ん？ ああ……………」

どうやら成果はあったらしい。

こちらとしてもひと肌脱いだ甲斐があったというもの。

と、次の瞬間拍手の音が湧いた。

「すごい、織斑くん！」

「アロンさん、お姉さんみたいだった！」

そんな言葉が飛んでくる。

失礼な。オレはお前たちと同じ高校一年生だぞ。

「ほら、いつまで惚けている。まだ稽古を続けるんだろ、箒」

「あ、ああ。勿論だ」

箒、そして織斑にも同じように促す。

そして三時間ほど経った頃。

ようやく稽古が終わった。

「ふう……………つつかれたあ〜」

終わりを告げると、織斑は防具を外すとそのまま床に倒れる。

因みにギャラリ―は一人もいなくなっている。

オレの何が良くて『お姉さま』と呼ぶのか知らないが、それはつまりこのオレが実年齢よりも老けて見えると。そういうことか？

「このくらいで根を上げるなんて、やはり鍛え直さなくてはならんな」「これから放課後は毎日。時間は……今回と同じ三時間ほどでいいか」

「え、ふたりとも？ それは長過ぎ、っていうかこのペースで毎日流石にキツイ――」

「問答無用だ」

「お前らいつの間に仲良くなったんだよ！」

はて、何時からだろうか。覚えてないな。

そして今日の事をどこかで知ったのか、簪は一言も口を聞いてくれず、オレは妙に大きなカタカタ音を聞きながら眠りについた。

Episode. 3

織斑の放課後稽古が始まってから二日後、オレは織斑勢力の一角『セシリア・オルコット』に接触を試みた。

それは以外と簡単だった。

何故なら同じ一組で、その上向こうからも話し掛けてきたからだ。

時刻は昼休み、セシリアと共に食事を取りながら話をする。

「織斑さんの稽古に付き合っていると聞きましたわ」

「織斑には強くなってもらいたいからな」

「貴女も彼にご執心ですか?」

「オレは色恋で心揺らぐ程、乙女ではないのでね」

「そういう事にしておきますわ」

オレが織斑を好いていると誤解させて奥のもひとつの手かもしれない。

そうすれば自然と織斑勢力のメンバー全員に接触できるからな。

案外この間の道場での出来事で筈にはそう思わせられたかもしれない。

「ところで、貴女は何か武道の経験がおりなのですか?」

「? なぜそんなことを?」

「先日、篠ノ之さんと織斑さんが稽古をしていた時のことを聞いたのですわ。その時のアロンさんの教え方が適切だったと。実は剣道部だったことが?」

「竹刀は握ったことすらないが、ナイフならある」

「ナイフ? サークスでもやっていたんですの?」

「まあ、そんな所かな」

サーカスなんて見たことすらない。

オレがやっていたのはサーカスなんて見せ物ではなく、

Close Quarters Combat

C Q C ……つまり近接格闘術だ。

「では、今度はこちらから質問をさせてもらおうか?」

「どうぞ。よろしくてよ」

「代表候補生なのだから、セシリアも毎日訓練をしているのだろうか？」

少し間があつて。

「……も、もちろんですわ！」

こいつ、嘘だ。

「顔に書いてあるぞセシリア。そうだな、お前もこれから放課後は毎日訓練をするといい。射撃能力やビット制御だけでなく、近接格闘戦における技術も磨くべきだ。オレも付き合つてやる」

セシリアは近接格闘戦に弱かったと『未来の織斑さん』からの情報である。

「し、素人の貴女に言われる筋合いはありませんわ！」

「近接格闘戦においては知つての通りだし、実は射撃にも覚えがあるのでな。それにオレはお前にも強くなつてほしい」

「私が弱いとでも？」

セシリアにはオレの言葉が挑発に聞こえたのか、眉をつり上げる。

「そうは言つてない。ただ、油断しているようでは織斑に出し抜かれるぞと言いたいのだ」

「ふんっ。素人に出し抜かれる程弱くはなかつてよ」

「ほら、それが油断だというのだ」

「むっ。いいでしょう。では訓練に付き合つていただきましょう。そこで貴女の手など借りる必要のないことを証明して差し上げますわ！」

場所は第三アリーナ。放課後。

「ところで、よかつたんですの？ 貴女は織斑さんの稽古につきあっていたのでは？」

オレは訓練機の使用許可を貰い、ラファール・リヴァイヴを纏っている。

「織斑には毎日稽古をしろと言ったが、オレは毎日稽古に付き合うとは言っていない。クラス代表決定戦までは一日置きにふたりともの訓練に参加するつもりだ。心配するな。最前なんてするつもりはない」「貴女にはそれで何のメリットが？」

「代表候補生の技術を目の前で見るからとでも思っていて良いさ。さて、始めるか」

アリーナの反対側に的が出現する。

「まずセシリアの技術が見たい。次々と出現する적을撃ち続けてくれ」

「そんなこといいんですの？」

そう言って専用機ブルー・ティアーズを纏うセシリアはスナイパーライフルのスコープを覗き込む。

だが、甘く見てはいけない。

この射撃訓練は、的を撃ち続けていくと的が動きがす仕組みになっている。

しかも的には番号が書かれていて、その数が大きくなるほど狙いにくくなっていくのだ。

遠距離射撃型のブルー・ティアーズと、その操縦者セシリア・オルコットで、果たして何処までクリアできるだろうか？

「こんな楽勝ですわ」「むっ、なかなか……」「ちよつとキツイですわ」「ああ、もうっ。ちよこまかとー！」「そんなのありですの!?!」

と、こんな風にセシリアのイライラゲージは溜まっていった。

記録は『56』。この射撃訓練システムは命中率が三割を切った所で強制的に終了させられる。

声からも分かる通り、初めは簡単でも難易度が上がっていくにつれ

て命中率が下がっていったのだ。

「射撃特化型にしては低めの成績だな」

「うるさいですわっ。50番目から急に難しくなるんですもの！」

まあ、候補生にしては優秀な方か。

では次に近接格闘術だ。

「セシリア、近接武器を展開しろ」

「えっ、……むむっ」

「……………」

セシリアが近接格闘戦が苦手だった理由は、近接格闘用の武器を即座に展開出来ないからか。

「まだか？」

「うるさいですわっ。ええいつ、インターセプター！」

セシリアは武器の名前を呼んで強引に展開する。

展開に時間がかかりすぎだ。

せめて一秒台にまでは縮めたいものだ。

「では、これから近接武器だけを使って模擬戦をしよう」

「き、近接武器だけですか？」

「織斑のISが近接戦闘型だったらどうする？ 残念だが接近された

らお前は逃げるしかないぞ」

「そんなもの。懐に飛び込ませないようにすればいいのですわ」

「では、それをオレで試してみろっ」

オレはリヴァイヴのスラスターを吹かし、セシリアに斬りかかる。

予め近接武器を展開させておいた為防がれてしまうが、候補生ならそれくらいでなくてはならない。

「いきなりではありませんの!？」

「実践では意表を突かれるのは珍しくないだろ」

セシリアは距離を取り、近接武器を解いてライフルを構える。

「では、行くぞっ」「いきますわっ」

オレが地面を蹴ると同時にセシリアが射撃を開始する。

それを地表近くで躲しながら、機会を伺う。

「セシリア、お前の射撃能力は確かに高い。だが、それ故に読みやすい

！」

一射ごとの間は極短いが、セシリアの苦手な動きは先程の射撃訓練で見ている。

「これは、先程の——っ!?!」

気付いたらしいが、さてどう対応する?!

「行きなさい、ティアーズ!」

背部の装甲から、ブルー・ティアーズの名前の由来にもなったピット兵器が飛び出す。

その数、四。

こちらも訓練機、オレが未来で使っていた愛機の先代機であるが行けるか?!

いや、——

「そうする必要があると見た!」

そのレーザーの量はまるで弾雨。

それを掻い潜って、セシリアに近づこうと試みる。

「本当に近接武器だけで戦うつもりですの!?!」

「当然だ」

ブルー・ティアーズのエネルギーが切れ、本体へ戻ろうとする瞬間に合わせて、イクニッション・ブースト瞬時加速を使ってセシリアの懐に飛び込む。

一気に最高速まで加速したりヴァイヴの装甲を叩き付けて、セシリアの姿勢を崩す。

さらにそこへブレードで斬りつけ、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーを削り取る。

セシリアはそのまま地面に落下する。

ISがあるから怪我はあるまい。

「ブルー・ティアーズを撃っている時もそうだが、撃ち終わった後、本体に戻ろうとする時にも動けないのが難点だな。近接格闘型のIS乗りなら今のような戦法はすぐに考え付く」

地面に落ちたセシリアのもとへ、ゆっくりと滑降する、

「貴女、本当に一般生徒ですの?」

「もちろんだ。少し優秀なのは認めよう」

「少しどころではありませんわ」

「そう言えばセシリアは『女子の中だけでは』首席入学だと言っていたな。」

「オレが試験を受けた時期が遅かったからな。」

そして今日も簪のカタカタ音を聞きながら——と、その前にココアを差し入れた。

すると少しカタカタ音が小さくなった気がした。

Episode. 4

織斑とセシリアのクラス代表決定戦当日。

問題がひとつ発生している。

白式がまだ届いていないのだ。

おかしい。未来の織斑さんは、セシリアとはじめて戦ったときは白式で戦ったと言っていたのに。

「とりあえず訓練機の準備はしておこうか」

「うーん。間に合わなかったなら仕方がないよな」

念のために近接戦闘用の装備を持たせた訓練機を用意しておいてよかった。と、訓練機をひっぱり出そうとしたその瞬間、オレたちがいるピットに山田先生と織斑先生が入ってきた。

「アロン、訓練機の準備は必要ない。専用機が届いた」

「え、今ですか？」

随分と遅い到着じゃないか。

「はい。織斑君の専用機、その名も『白式』です！」

ゴゴゴゴ……、と重たい音が響いて大きな扉が開く。

まず第一印象は白。

その名の通り、白いISが飾られた鎧のように鎮座していた。

まだ初期化と最適化処理フォーマット
フィッティングが終わった姿ではないが、オレの知っている白式その物だ。

「急げ、織斑。早速準備だ」

こんな状態で、いいところまで持ち込めるだろうか。

いや、むしろオレがいなかったらそうなっていたのかもしれない。

セシリアはオレが言わなかったら戦うまで織斑に対して油断を抱いていただろうし、オレがいなくても織斑の稽古は筈がつけてくれただろう。

それでも、オレがいなかった時に比べてふたりのレベルが上がっているならそれでいい。

「アーリーナを使用できる時間は限られている。ぶっつけ本番で物にし

ろ」

「え、マジかよ」

目の前でそんなやりとりをするふたりは、教師と生徒ではなく、完全に姉と弟のようだった。

「箒」

「な、なんだ」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

今まで膨れっ面だった箒が笑みを溢した。

「アニエスも」

「頑張れ、織斑」

「おう！」

織斑は元気良く返事をしてピットを飛び出していった。

「こうして見ているだけでは詰まらん。どれ、アロンの意見を聞かせてもらおうか」

「意見、ですか？」

織斑とセシリアが試合を開始して間もなく、織斑先生が口を開く。「意見と言われても、オレは生徒に過ぎないのですが？」

「ふん。私がお前が二人の稽古に付き合っていたことを知らないのも？」

「なにっ。アニエス、それは本当か？」

織斑先生の言葉を聞いてオレが織斑を裏切ったとでも思ったのか、
箒が掴みかかってくる。

「落ち着け、箒。オレが織斑の稽古に付き合っていたのは、オレが織斑
に力をつけてほしいと思っていたからだ」

「ど、どういふことだ？」

オレが別に裏切ったのではないと知り、箒がオレから手を話す。

そしてその様子を横で見ていた織斑先生と山田先生が興味深そう
にする。

「勝負事は常に勝った時よりも、負けた時の方が得る物が多い。オレ
は織斑に強くなってもraithたくて稽古に参加した。だが、それだけで
はダメだ。相手を油断させて攻撃するのは戦争であって、決闘ではな
い」

そこまで言って、目の前の三人は何も言わずに頷いた。

「オレからすれば経験を積めるなら、クラス代表の座なんてどうでも
いい。オレのせいで代表になれなかったというなら、その分戦える場
面を作ってやるさ」

「そこまでして、お前は何がしたいんだ？」

「さっきも言っただろう。織斑に強くなってほしい。その為には自分
の持てる力の全てを出しきって尚勝てない相手と対峙するのが一番
だ。そういつた敗北は自然と向上心を生み、戦っている間にも相手に
勝とうと思いを巡らせる。そんな経験が大切なのだ」

箒と山田先生は哑然とし、織斑先生は口元をつり上げる。

「勝ち負けは重要ではない。むしろ中身にこそ、美味しい身が詰まっ
ている。その為には相手に油断していたセシリアを本気にさせ、織斑
にはできる限りの近接格闘術を教えた」

セシリアの専用機は世界に知られている物だから、正当な事前調査
で得た資料によって機体の性能やその生かし方を織斑に教え、セシリ
アには近接戦闘における対処法を身に付けさせた。

「なっ……、そんな事したら一夏に勝ち目は——」

「いや、あるぞ」

オレがリアルタイムモニターの画面に視線を移すと、ちょうどブ

ルー・テイアーズのミサイルが織斑に直撃した所だった。

「一夏っ！」

織斑を心配して箒が声をあげる。

オレが話をしている間に、織斑は相当ダメージを受けていたようだが、まだ試合終了のアナウンスは流れない。

それはつまり、ミサイルの爆発で巻き起こった煙の中で、白式はまだ動いているということだ。

「機体に救われたか、馬鹿者め」

織斑先生がそう言うと、煙の中の白式の影が見えてくる。やがて煙が晴れ、そこにいた白式に誰もが目を丸くした。

純白の装甲に包まれ、一振りの剣を握る自分の力を手に入れた織斑一夏の姿。

そしてその剣の名前は、

『雪片型式』……」

山田先生が表示された白式の唯一の武器の情報を見て呟く。

『雪片』それは織斑千冬が自身のIS『暮桜』に乗っていた時に持っていた剣だ。

その能力は自分のシールドエネルギーを刃にして攻撃に転用する物で、エネルギーを無効化し、ほぼ一撃で敵を屠る威力を持つ。

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ』

そう言ったモニターの向こうの一夏は笑っていた。

「これが一夏の勝ち目、なのか？」

「そうだ。しかし、そんなに上手く行かせないようにオレはセシリアを鍛えた」

オレは今、とても悪い顔をしていることだろう。

雪片は強力だが、だからといってそれで勝負が決まるとは限らない。

セシリアー sideー

試合開始から30分。

(まさか、アロンさんの予想がここまでの中ずるとは思っていませんでしたわ)

織斑は今まで射撃武器を一切使わず、近接武器だけで戦っている。素人が玄人相手に出し惜しみするとは考えにくい。

アロンはセシリアの訓練中にこんなことを言っていた。

『織斑が近接武器主体のISに乗っていたら?』

(まさか、白式のことを知っていた?)

しかしそんなことがある訳がないと首を振った。

開発中のISの情報は嚴重なセキュリティで秘匿されている。

そう簡単に情報を得られるほど、日本のセキュリティは軽くないだろう。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

そして今しがた五、六基目のブルー・ティアーズが直撃して爆発した煙の中から織斑の声が聞こえた。

そして煙が晴れたその場所にいたのは、試合開始直後の白式ではなかった。

「まさか、ファーストシフト一次移行!? 貴方、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?!」

初期設定のままのISの操縦は、下手をすれば訓練機の操縦よりも難しい。

訓練機は誰でも使えるように調整されたものである。

それに対し白式は織斑一夏のために作られたISだが、急ピッチで用意された物なので調整する時間があったとは考えにくい。

そして織斑はその状態で、代表候補生との決闘に三〇分近く耐えていたということになる。

その事実気づいてから、セシリアの中でまたもや訓練中のアロンの言葉が蘇ってきた。

『強者の敗因の殆どは傲りと油断だ』

訓練中、アロンに相手をしてもらう内にセシリアの中には傲りという物は消え去っていた。それはつまり、

「油断していた、という事ですね……。ですが！」

セシリアがミサイル型のブルー・ティアーズを射出。

しかし織斑は、それを手にした一振りの剣で切り裂いて見せた。

その芸当に驚き、セシリアの反応がワンテンポ遅れる。

「まずは、千冬姉の名前を守るっ！」

その隙を突いて、白式の光刃がブルー・ティアーズのシールドエネルギーを削る――

――前に白式のシールドエネルギーが尽きた。

《試合終了——勝者、セシリア・オルコット——》

「はっ。」

二人を含め、決闘を見ていた誰もがそんな声をあげた。

織斑の攻撃がセシリアに当たる瞬間、前触れもなく突然織斑の負けになったのだ。

Episode. 5

「なあ、アニエス」

「なんだ、織斑」

「どうしてこうなった？」

「知らん」

(祝) 織斑一夏クラス代表就任パーティー

一年の食堂に掲げられた垂れ幕には、デカデカとそう書かれていた。

……意味が分からん。

クラス代表決定戦で勝った方が代表になるはずだった。

しかし昨日それに勝ったのはセシリアだった。

それが何故、織斑一夏クラス代表就任パーティーを開いているのだろう。

「つたく、セシリアという奴は……」

今朝のHRで山田先生が織斑がクラス代表に就任したと報告。

当然織斑は訊ねるが、セシリアから「辞退した」と言われたのだった。

何が「IS操縦には実践が何よりの糧」だ。お前が織斑に惚れただけだろう。

いつの間にか織斑のことを名前で呼んでいたし、午後のIS実習ではよく心配するし。

ちよろい。ちよろすぎるぞ、セシリア。それでいいのか？

「なあ、アニエス」

「なんだ、乳揉み師織斑」

「なっ!? あれは事故だつて!」

ほう、事故で山田先生の胸を鷲掴みか。

男だったら大変羨ましいラッキースケベだ。

「で、なんだ？」

「いや、な? これからセシリアも放課後の訓練に手を貸してくれる

そうなんだが、アニエスもまだ参加してくれるのか？」

「勿論、そのつもりだが。嫌なら止めようか」

「嫌なんて訳ないよ。アニエスの教え方って、すっごい分かりやすいし。そのまま教師やってても別におかしくないくらいだ」

「褒めても揉ませないぞ？」

「だから誤解だつて！」

しばらくはこのネタで弄れそうな気がする。

織斑の周りには胸が大きい女が多いことだしな。

箒然り、セシリア然り、織斑千冬、山田先生など。

オレは……「B」って所か。

「織斑……」

「ん、なんだ？」

ふと、オレは箒の方を向いて言う。

「箒の胸も揉んだのか？」

「揉まないってえの！」

「——と、言うわけだ」

夜、1035号室。

オレは簪に一応、遅くなった理由を話した。

簪はそんなことには興味ないらしかったが、ココアを要求してきた。

何でも大変美味しかったとのこと。

「そんなにオレの入れたココアは美味しいか？」

「うん」

別に特別なことはしたつもりはないのだが。

強いて言うなら、少し甘めにしてあるくらいか。

「で、前から気になっていたんだが。簪は毎晩何をしているんだ？」

オレの話聞いていたのかそうでなかったのか、簪はオレがクラス代表就任パーティーのことを話しているときもパソコンでカタカタしていた。

「ん、これはISか？」

「うん、そう」

ディスプレイを覗き込むと『打鉄式』という文字。

しかしこの画面……ISのシステム面を一から作っているのか？

「ひとりで大変じゃないのか？」

「あの人はやってたから……」

「あの人？」

もしかして、更識楯無の事だろうか。

簪が楯無の血縁者であるのは間違いないだろうから、簪と楯無は姉妹。

しかしISをひとりで完成させるなんて、そんな事をやってのける人はあの『篠ノ之束』しか知らないぞ。

この時代の楯無のIS……たしか、名前は『ミステリアス・レディ』だったか？

あれは元のISを楯無用にカスタムしただけで、楯無ひとりで作り上げた訳ではなからうに。

もしかしたら、その事実が振れて簪の中では『楯無がひとりでISを作った』ということになっているのかもしれない。

「……どうしたものか」

とは考えてみるものの、それをオレから伝えてしまったら「何故、アニエスが楯無のISのことについて知っているのか？」という話になってしまう。

この場に置いて、それだけは絶対に避けなければならない。

「どうしたの?」

「いや、何かできることがあつたら言ってくれ。力になるぞ」

「……考えておく」

初日に比べれば心を開いてくれたと思う。

もう少し踏み込んでもいいのかもしれないが、慎重になるに越したことはない。

「ところで、なに食べてるの?」

「ん、ポツキーだが?」

「……好きなの?」

「うむ」

とある放課後。

織斑たちは先にアリーナへ向かい、オレは少し遅れて足早にそこへ向かっていた。

「ねえ、ちよつとそこのアンタ」

「ん、オレか?」

小柄なツインテールの少女。

見た目や言語の特徴に中国あたりの雰囲気を感じられた。

「アンタ、ここの生徒よね?」

「うむ、そうだが」

ツインテールの少女はIS学園の制服を肩が出るように改造してある。

IS学園は制服の改造を許可されていて、少し裁縫が得意な人なら殆どの人が改造している。

また、そういう人たちに頼んで作ってもらう人もいるとか。

そんな訳で、ISそのものだけでなく制服の自由度などが、IS学園が人気な理由である。

「何か用か？」

「総合受け付けってどこ？」

転入生か何かだろうか。

はて、この時期の転入となると……。

「ん、どうかした？」

まさか、コイツが『凰鈴音』か？

中国辺りの特有の雰囲気、コイツが中国の代表候補生だというなら、入試よりも難しい転入試験を突破してもおかしくはない。

「まあいいか。ついてこい、案内する」

「ねえ、そう言えば。織斑一夏って何組？」

「一組だ。知り合いか？」

「うん、幼馴染みなんだよね」

「そうか」

織斑よ。幼馴染みの女子が二人など聞いてないぞ。

こつちが訊ねた事もないが、これを知ったら箒が怒るだろうな。対抗意識や何やらと。

それにしても鈴音……

「Aか……」

「ん、何が？」

「なんでもない」

最近よく胸のことを考えるようになった。

織斑が山田先生の胸を鷲掴みしたあたりから。

それが原因か、もしくはオレがこの時代の女子に馴染んできたとか。

おそらくは前者だ。そうに違いない。

Episode. 6

鈴音を受付へ案内した翌日の事である。

オレは簪と朝食を取り、その後別れてそれぞれの教室を向かった。そしてオレは一組の教室の前で鈴音に出会った。

「あれ、アンタ……」

「凰鈴音か」

「ん、私の名前言ったっけ？」

「お前は代表候補生だろう」

「あ、そっか。で、アンタは？」

「アニエス・アロンだ。アニエスでいいぞ」

「じゃあ私も鈴でいいわ」

うむ、明るい奴だ。猫のように自由気ままな印象を受ける。

高貴なイメージのあるセシリアとは対照的な存在だ。

織斑勢力の一角、凰鈴音。

織斑の二人目の幼馴染みで、色々と慎ましやかな見た目に反して少し粗暴な性格だとか。

「鈴は織斑に用か？」

「うん。アイツとは久しぶりに会うんだけど、何て言ったらいいか……。そうだ、ついでだからアンタも考えてよ」

幼馴染みに久しぶりに会ったときの台詞か。

そんなことに迷うなんて、案外いじらしい所もあるじゃないか。

「どうせなら、前より変わった私を見て貰いたいしね」

「では、思いきって堂々と登場するのはどうだろう」

「堂々って何よ」

「うむ……宣戦布告？」

「なんで疑問系なのよ」

「恋敵的な意味でかな」

「恋？ 何、一夏って誰かと付き合ってるの!？」

そんなバカな。

「恋人はいないが、想いを寄せている奴ならいる」

織斑一夏乳揉み事件の時は完全に箒とセシリアの戦いだったからな。

ここに鈴が入ってくるとなると、修羅場が更に増える訳だ。

織斑からしてみれば大変なことになるのは間違いなし。

「よし、今すぐ行ってくるわ」

「あ、ちよっ——」

行ってしまった。が、まあいいか。

「ん、アロン。ここで何をしている？」

「おはようございます、織斑先生。今さつき転入生と話していたんですが」

「ああ、鳳の事か」

「織斑一夏にまたもや修羅場の予感です」

「アイツは将来、ちゃんとやれていたのか？」

「さあ、織斑さんには昔話をされたくらいしか面識が無いので。色恋のことについては自分自身、興味がありませんでしたし」

指輪は……してたような。してなかったような。

どちらにしろ、オレがこの時代に来て色々としてしまっているのだから、どうなるかわからないのだが。

「今はお前のいた戦乱の時代ではないのだし、普通の女子として振る舞ってもいいんじゃないか？」

「それができるほど、器用じゃないんです」

「っと、話し込むところだった。もうHRの時間だ。行くぞ」

「はい」

その後、まだ一組の教室にいた二組の鈴が織斑先生お得意の”出席簿スマッシュ”を受けたことは言うまでもない。

時間は飛んで翌日の放課後。

昨日の出来事と言えば、鈴が箒やセシリアを互いに恋敵だと認識した上で握手を交わしていた。

その瞬間火花が散ったような気がしたが、泥沼にならなかつただけよしとする。

因みに鈴は二組のクラス代表になつたらしく、今どのクラス對抗戦では敵同士になつたわけだ。

そしてこれは織斑に今朝相談されて聞いた話だが、どうやら昨日の夜に鈴を起こらせてしまったらしい。

なにやら昔、鈴と約束をしていたのだが、その約束が違うらしく言い争いになり、つい「貧乳」と言ってしまったのだとか。

この年頃の女子は胸の話には敏感になるものだ。

特に小さい奴などはコンプレックスに感じている奴もいるらしい。

ま、こればかりは織斑が悪い。

「さて、そろそろ始めるか」

場所は第三アリーナ。

昨日は箒とセシリアの二人が暴走し、訓練にならなかつた。

ただ二人で織斑を袋叩きにしただけだ。

「今回は昨日のようにはならないようにな、二人とも」

「ご、ごめんなさい」

最近の練習内容は、箒が近接格闘戦の訓練。

セシリアが遠距離射撃に対応するための訓練だ。

オレは織斑の様子を見ながら、それぞれにアドバイスをしたり課題を出したりしている。

「えー。昨日の鈴が部分展開したIS『シエンロン甲龍』は近・中距離両用型で間違いない。調べた所、こいつも第三世代型で空間圧作用兵器『衝撃

砲』が最も注意すべき点だ」

「衝撃砲?」

「中国の第三世代型兵器ですわ。PICを応用したもので、一種の重力操作装置を使用していますの」

「これは空間圧によって空中に砲身を作り出し、その反作用で砲身内に溜まった衝撃を放出する兵器だ。しかも、空間に圧をかけているだけなので砲身はもちろん、砲弾も透明で、基本的には不可視の射撃武器だ」

「不可視の兵器か。中々に厄介な相手だ」

箒の言う通り、見えないということは視覚に頼ることができないので、相当厄介な相手だ。

「ちなみに威力調節もできるらしく、最高出力では単発でも、威力や射程を下げればマシンガンのように連射も可能だ」

よってブルー・ティーズとは愛称の悪い甲龍だが、対抗戦に出場するのは白式だ。

しかし、だからといって勝てない相手ではない。

「何か策はありますか?」

「甲龍は近・中距離両用型で、白式は近接格闘型。故に鈴はある程度の距離を保って衝撃砲による弾幕勝負に出ると思う」

雪片の情報は鈴にも届いているはずだからな。

一撃の威力が高い攻撃は一度たりとも当たる訳にはいかない。

「だからこそ、付け入る隙がある」

「隙?」

「鈴は衝撃砲をばら蒔いて一夏を近づけまいと必死になるだろう。だからこそ、懐に入られた時のショックは大きい。それはセシリアもわかるだろう?」

「そうですわね。急迫は相手を怯ませる技のひとつですわ」

織斑は一太刀浴びせてしまえば勝負は決まるほどの威力を持っている。

その代わり射撃武器はひとつも持っていないので、それを生かした戦い方にせざるを得ない。

「でも、中距離をそう簡単に詰められるとは思えないんだが」

「それは普通にスラスターを使っている時だ」

スラスターの使い方は様々だ。

ISのモンド・グロツソでも、総合格闘部門だけでなく、射撃部門や格闘部門、機動部門などがある。

その中でも比較的簡単———イグニッション・ブーストな瞬間加速という技だ。

これは一度スラスターの外にエネルギーを放出し、再度吸収して圧縮、再び放出することで爆発的な加速力を得るといふものだ。

「なるほど、これなら代表候補生が相手でも付け入ることができまわ」

「だが、決められるのは最初の一度だけだ。その後は相手が警戒してしまうからな」

だからこそ、雪片の能力の意味が大きいのだ。

かつて織斑千冬が優勝できたのも、雪片の一撃で相手を沈められたからだ。

「さっそく織斑は瞬時加速の練習だ。二人も覚えておいて損はないぞ。はい、始めっ」

『ほ、はいー』

Episode. 7

クラス対抗戦当日。

オレは今日になって、優勝したクラス全員に学食の食券が配られるのだと聞いた。

うむ、織斑には是非とも優勝してもらいたいものだ。

「とはいえ、そう簡単にもいかないだろうがな」

無人IS事件のひとつ、それが今日なのだ。

クラス対抗戦の第一戦目、織斑と鈴の試合で織斑が瞬時加速で鈴に迫った時、無人のISが乱入。

織斑と鈴でこれを撃破したが、いったいどこの国が作ったのかは謎のままとされたらしい。

未来では対IS用兵器『オートマトン』の原型となっているが、始めに無人ISを作ったのは誰だかわかっていない。

まあどの国も第三世代型ISの開発に手を焼いている中でそんなことができたのは、篠ノ之束しかいないとオレは予想しているのだが。

なにせ証拠がないのではどうにもならん。

「あら、アニエスさん。こんな所にいらっしやったの？」

「セシリアか。もうすぐ試合が始まるぞ？」

「そうなのですけれど、織斑先生が箒さんとわたくし、そしてアニエスさんの三人は特別に管制室で観戦させて下さるそうなので」

「いや、オレはここにいく」

「そうですの？」

セシリアは少し残念そうに去っていった。

これから事件が起こると分かっているながら、何もできない所に行くのは嫌だ。

せめて無人機が乱入してきた時の誘導くらいはするつもりだ。

それに、万が一ということもある。

「ん、アロンはどうした？」

「お呼びしたのですけれど、自分はいいと仰られたので」

「そうか」

セシリアの言葉に少しだけ不安を覚える千冬だった。

なにせアニエスは未来から来た人物だからであり、観客席から見た方がアニエスには意味があると言ってしまえばそれで終わりだが、それだけではないと思うのだった。

『それでは両者、試合を開始してください』

アナウンスが鳴り終わると、さっそく鈴が動く。

甲龍の非固定武装アンロックユニットから不可視の砲弾が織斑を襲う。

不可視の砲弾に咄嗟に反応できず、一夏は初手を諸に食らってしま
う。

「——っ。本当に見えないんだな、衝撃砲ってのは」
発射の瞬間、一瞬だけ光が見えたが次の瞬間には衝撃が襲った。
「そうよ。これが中国の第三世代兵器『衝撃砲』！どこまで避けられるかしら！」

次の瞬間、不可視の砲弾が連続掃射される。

一夏は距離を取って、それを躲す。

別に見えていた訳ではなく、動きを止めたら直後に衝撃砲の餌食になるからだ。

「くそっ。あんなにばら蒔かれてちゃ、近づけないっ」

一夏が避けた後、アリーナの壁や地面に砂煙が立ち籠る。

鈴は近接武器の双天牙月を手に持っているが、アニエスの予想通り衝撃砲をばら蒔いて近接戦闘を避けている。

「へえ、中々躲すじやない」

「こつちだつて訓練は積んでるんだぜ」

と言うものの、代表候補生相手では比べるまでもない。

それでも、一夏にはファースト幼馴染みとイギリスの代表候補生、そしてアニエスという仲間がいる。

箒は完全に感覚派で、セシリアは具体的過ぎてよく分からなかったが、遠近どちらも訓練することができた。

そして一夏たちを支えてくれたアニエスが、勝つための作戦を考えてくれた。

(訓練の時、アニエスは何て言ってたっけ?)

一夏は鈴が中々隙を見せない時の行動を指示してくれた。

それは訓練機でもできる敵を翻弄させるための動き。とアニエスは言っていた。

「くそっ、やるしかないのか!?!」

しかし、代表候補生相手に通じるのは一度のみ。

瞬時加速による強襲も一度だけのチャンスだということ、一夏がすぐに習得できそうなものを選んだためだ。

「うおおおおお!!」

「なっ——!?!」

鈴の衝撃砲を掻い潜り、訓練で覚えた瞬時加速を使って鈴に急迫する。

(これで、決める！)

一夏が勝利を確信し、雪片の光刃が鈴を捉えた瞬間。それを上空からの高出力ビームが遮った。

ドガァン！

二人の間をビームと共に何かが通り過ぎていった。

その何かはビームが地面に当たった時に巻き上げた砂煙の中に突っ込む。

「……な、何？」

鈴は鈴で啞然としていた。

一夏の雪片を躲せずに、敗北が頭を過った瞬間に今の攻撃である。それはまるで二人の決着を邪魔するように飛び込んできた。

「なんだ、あれ……？」

乱入してきた物はどうやらISらしい。と二人のISが告げている。

しかし、そのISが異形だった。

深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。

しかも首というものがなく、肩と頭が一体化しているような形をしている。

そしてその巨体もまた、普通のISではないことを物語っていた。腕を入れると二メートルを超える巨体は、姿勢を維持するためのなか全身にスラスターク口が見て取れる。

頭部には剥き出しのセンサーレンズが不規則に並び、腕にはビーム砲口が左右合計四つあった。

——未確認IS、二機を確認しました。

「二機？」

ISからの情報に辺りを見回すと、二人の遙か上空に停滞する乱入してきたISと同じ色をした別のISを見つけた。

そのISには乱入してきた物と比べると幾らか小さく見えた。

その代わり、背部に背負ったものがおおきく、スラスタ―にも見えるそれから光が漏れていた。

『織斑、凰。試合は中止だ。そっちの敵は任せたぞ!』

「え、アニエス!？」

二機のISにどうするか迷っていた所に、オープンチャンネルからアニエスの声が聞こえた。

すると、アリーナの外から訓練機ラファール・リヴァイヴを纏ったアニエスが上空のISに向かって見えた。

「アニエス、何をする気!？」

そのことに鈴までもが声をあげた。

『遮断シールドがレベル4に設定され、全ての扉がロックされて開かない。この状況を作り出したのは、あのISだ!』

アニエスが珍しく焦っている。

いつも毅然としている彼女がここまで必死になっているのは、誰もが始めて見る光景だった。

「でも、訓練機で挑むなんて危険だ。逃げろ、アニエス!」

『こちらはシールドの外だ。すぐに教師陣が援軍を送ってくれるさ。』

『それが待てないと言うなら、目の前の敵を倒してから助けに来い』

「そ、そんなっ」

『お前たちならできるはずだ』

その言葉には妙に自信が満ちていた。

まるで二人が勝つのを知っているかのように。

Episode. 8

『あ、アロンさん！ 何をしているんですか！』

真耶がオープンチャンネルで通信してくるが、アニエスはさも当然だというふうに戻事をする。

「加勢ですが」

『アロン、今すぐに戻ってこい。すぐに教師陣が向かう』

すぐに落ち着いた千冬の声が聞こえてくるが、アニエスは止まるつもりは無かった。

「いや、これはオレがやりますよ。何せこれは予想だにしなかったことですから」

予想だにしなかったこと。

一緒にいる真耶には当然のこのように聞こえるが、千冬にとっては違う。

今回の事件の事は観客の目があったということ、公開されるだろう。

故にこの事件のことを未来人のアニエスが知らない筈がない。

ならば何故予め知らせておかなかったのかと千冬は思ったが、それはアニエスが放った言葉で解決した。

『アロン、注意をお前に引き付けるだけでいい』

『織斑先生!?!』

アニエスは予想していたのだ。

自分が過去に来ること、未来の出来事が少なからず変わってしまうことを。

今回の場合、乱入してくるISは元々一機で、アニエスが来たことよって二機に増えているということだ。

それはつまり、ISを送り込んできた何者かがアニエスに注目しているということにもなる。

「そうですか」

『アロンさ——』

アニエスは真耶の言葉を聞かずに通信を切った。

「勝負といこうか。存在しなかった筈の無人機よ！」

無人機が近接ブレードを突き出して突進するアニエスの存在に気が付き、回避行動を取る。

『敵機出現。ハッキング機能ヲ一部停止、戦闘モードへ移行シマス』

機械音声に反応して、無人機の両腕の装甲から銃口が現れる。

それは次の瞬間、細かなエネルギー弾をバルカンのように連射し始めた。

「オレの知っている無人機と比べると大きいが、性能は十分か」

アニエスは無人機の攻撃を躲しながら冷静に敵を観察する。

アニエスの傭兵としてのスキルは未来ではひとり働いていけるには十分すぎるものだった。

得た敵の情報から対抗策を立て、行動に移す能力は仲間の傭兵からは頭ひとつ抜けていた。

「狙い撃つー」

スナイパーライフルによる狙撃、しかもそれは敵の弾幕の中で行われた。

それも一度だけではなく、二射目、三射目と次々に狙撃していく。

その間、無人機の攻撃はまったく当たらないのに対し、アニエスの攻撃だけは的確にヒットしていた。

が、それだけだった。

「ちっ。細い腕の割りに頑丈な作りでできてるのか」

実弾による攻撃は無人機の装甲を僅かに凹ませるだけ。

そんな装甲を絶対防御ごと突き破るには、それこそ雪片程の攻撃力がなければ駄目だ。

「ならばっー」

なにも一撃で倒せるとはアニエスも思っていない。

絶対防御があるならそのエネルギーを尽きさせればいいだけのこと。

こちらは実弾兵器しかなくエネルギー効率に関してはスラスター関連以外に問題は殆どない。

「まずはその固い体を切り刻む！」

近接ブレードを右手に、ショットガンを左手に展開する。

ブレードを振りかぶり、敵のビームバルカンの弾を躲しながらショットガンを撃つ。

大量の散弾を受け、無人機の姿勢が一瞬崩れる。

無人機はすぐさま身体中のスラストで姿勢を整えるが、その時には既にアニエスが刃を振り下ろしていた。

絶対防御が刃が装甲に届くのを阻み、次の瞬間アニエスに無人機の拳が迫る。

しかしアニエスはいとも簡単にそれを躲してみせ、お返しと言わんばかりにショットガンを撃つ。

攻撃と回避。それを一連の流れとして戦闘術に組み込む。

ここでもやはり傭兵としてのキャリアが生きてくる。

シールドエネルギーの節約の為に、ダメージは最小限に抑えたいという考えが、アニエスの戦い方をヒット・アンド・アウェイのような物に育てていったのだ。

「やはり反応が鈍い」

ここまで十分な程の動きをしてくれたリヴァイヴに、アニエスは少しだけ不満を持った。

まるで処理落ちしがちなパソコンを扱っているような感覚だった。

「織斑たちは……？」

アリーナへ視線を落とすと、一夏と鈴はまだ手こずっているようだった。

もう目の前の敵が無人機であると勘づいているころだろう。

もっと早く知っていれば、さっさと雪片で決着がついていただろう。

それを伝えられないアニエスは歯痒い思いから舌打ちする。

「そろそろ終わりにするか」

時間をかけると教師たちが駆けつけてくる。

それはアニエスにとって不完全燃焼のようなものだった。

ここまで追い詰めた敵を他人に勝利をかつ拐われるのは、アニエス

にとって気分が良いものではない。

「おとなしく沈んでもらおう！」

掛け声と共にスラストを吹かし、瞬時加速で無人機に急迫する。無人機も拳を突き出しバルカンを撃ってくるが、アニエスはそれを寸での所で躲し、灰色の懐にブレードを叩き込む。

勢いに乗って下方へ落下し、やがてアリーナの遮断シールドにぶつかりそうになった所で、二つの爆発音が重なった。

「丁度、終わったらしいな」

ひとつはアニエスが斬った無人機が起こしたもので、もうひとつは一夏たちが倒した無人機が起こしたものだだった。

アリーナの隅でセシリアがライフルを構えている。

最後はセシリアの狙撃がトドメをさしたらしい。

「怪我人は無しか。よかったな、織斑」

しかし、皆が終わったと思った瞬間だった。

突然、鈴の叫び声が響いた。

「一夏！ まだソイツ動いてるっ！」

体と右腕だけが残った無人機が、最後の抵抗とばかりに一夏に砲口を向けていた。

一夏は反射的に瞬時加速と零落白夜を発動して、高出力ビームが発射されると同時に無人機を切り裂く。

そしてまた爆発が起こったのだった。

「失礼する」

織斑先生と無人機のコアのことで話をしていた為少しだけ遅く
なってしまうたが、織斑はまだ起きているだろうか。

「ん、今度はアニエスカ」

「その口振りだと、色んな人が見舞いに来たようだな」

時刻は午後7頃。

織斑先生が一夏の見舞いから戻ってから2時間程たってのこと
だった。

西の空では茜色が紺色に呑み込まれそうになっている。

「体の具合はどうだ？」

オレが側の椅子に座って訊ねると、織斑はニカツと笑って言う。

「どこも問題ねえよ」

問題ない訳がない。

しかし、それでもそう言うのは男としての意地だろう。

「……アニエス。お前は今回の件について何か知ってたのか？」

しばらくして、織斑が唐突に訪ねてきた。

「オレが知るわけないだろう」

「そうだよな。変なこと聞いて悪い」

いったい何処でどんな思考をしたら、そんな結論に至るのだろう。

オレが未来から来たと知っていなければ、オレがこの事件を起こし
た犯人の関係者ということになる。

織斑にそんな疑問を抱かれるほど、オレは挙動不審であったら
か。

過去を振り返ってみても、思い当たる節がない。

「ふむ……話しは変わるが、鈴とはどうなった？」

「え？ ああ、一応仲直り(?)は出来たと思う。でもいまだに『料理
が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる?』にタダメシ以外
の意味があるような気がしてさ」

それはアレじゃないだろうか。

味噌汁の酢豚版。しかも言う立場が逆だ。

「それはオレに聞くことじゃない。直接本人に聞くか、自分で解決す

るしかない」

「うー。女子の考えってまったく理解できねえ！」

織斑がそんなふう to 頭を抱える様は少しだけ面白かった。

Episode 9

今日は休日。

珍しく織斑が学園の外へ出掛けていった。

オレは別にすることが無いので、簪の様子でも見に行こうかと整備室へ向かおうとしていた。

「ちよつといいかしら」

「ん？」

その途中、簪によく似た人物に話しかけられた。

扇子を片手に持っていて、『遭遇』と書かれている。

オレにはこの人物に見覚えがある。

「更識……刀奈……？」

「ごめんなさい。今の私の名前は楯無なのよね」

「そうか。すまない」

楯無という名前は更識家の当主となった者に与えられる名前である。
る。

オレの時代では、すでに刀奈は楯無の名を受け継がせていた。

「……未来人っていうのは本当みたいね」

「さすが更識家。情報を掴むのが早い」

「お家柄、色んな情報が入ってくるだけで、あなたを調べたかった訳じゃないのよ」

この学園には何人の更識家、もしくはその関係者が在籍しているの
だろう。

今まで知ったのは、簪と本音、そしてその姉である虚といったよう
に、楯無を含めて四人もいる。

「で、なんの用だ？」

「そうね。簪ちゃんの様子はどう？」

あ、そう言えばこの姉妹、うまくいっていないなかったか。

「どう、と言われても。今は整備室にいる筈だが」

「そういうことじゃなくてね……」

「ぶつちやけた話、姉に対する対抗心はいつも通りだ」

「……そう」

出会った直後の勢いはどこへやら。

今のオレの言葉で一瞬で変貌してしまった。

寂しそうな顔をしたり、遠い目をしたり、ちよつと笑ってみたり。

何を考えているのか、コロコロと表情が変わっていった。

「以外と純情なんだな、楯無は」

「え？ そ、そんなことはないわよ」

妹の様子を聞いて百面相を始めるのは、どこから見ても妹思いな姉である。

「ごほん。えつと、じゃあ……」

「やはり妹と仲良くしたいよな」

「う、うん。……もう、何で先回りしちゃうかなあ」

考えていることが丸分かりだからである。

「力になれるかどうかは保証しかねるが、やれることはやってやろう」

「ほ、本当!？」

楯無の表情が一気に明るくなる。

「か、過度な期待は御免被る」

保証しかねると言った筈だが。

「あ、そうだ」

と、楯無は思い出したように言い出した。

「シャルル・デュノアって知ってる？」

「デュノア？」

デュノアの名前は当然知っている。

未来でオレが使っていたラファール・リヴァイヴアルはリヴァイヴの後継機だ。

それに訓練機として優秀なリヴァイヴを作った会社としてデュノア社の名前は有名である。

たしかこの時代では、デュノア社はまだ第三世代型ISの開発発途中で、いまだに発表できずにいるはずだ。

「明日、デュノア家のご子息が転入してくることになってるのよ」

「ご子息……男？」

それはあり得ない。

織斑以外で男がISを操縦したという話は、実のところ今から20年後のこと。

それもその男は国籍は日本。

デュノア家はフランスの家系だ。

「二人目の男性IS操縦者だから、私の家にも情報が来たんだけど。どうも、デュノア家に息子は居ないようなのよ」

織斑勢力のひとりにシャルロット・デュノアという女がいる。

シャルロットが女であることを偽っているのなら、シャルルと偽るのも自然と言える。

しかしいったい何故？

「しかもその子はフランスの代表候補生でね」

つまり国家レベルで偽っていると言うことに？

「いや、わからない」

「わからない。っていうことは心当たりはあるのね？」

「うむ。しかし確かとは言えない」

「それなら仕方がないわね」

「すまない。せめて仲直りの件では尽力する」

「ん、ありがと」

その後の簪へのアプローチだが、ココアから始まる会話を試みるこ

とにした。

まずはオレ自身が簪との距離を詰めなければ。

「ん、アレは織斑先生……と、誰だ？」

夕食を終えた後、寮に戻ろうとしていた時。

同じく寮へ向かっている織斑先生と銀髪の少女を見つけた。

こちらが近付いていくと、向こうもこちらに気付いた。

「アロンか丁度お前の話をしていた」

「オレの、ですか？」

「コイツはラウラ・ボーデヴィツヒ。明日、転入する事になっている」

「ボーデヴィツヒ……。ああ、黒兎隊の」

ドイツ軍シュヴァルツハーゼ隊。

IS操縦者の本格的な育成を表向きに掲げた、条約違反ギリギリの部隊だ。

そしてラウラ・ボーデヴィツヒはその隊長。

ドイツの冷水と呼ばれる程の実力者で、コイツもまた織斑勢力のひとりだ。

「貴様は一年の中では相当腕が立つらしいな」

「いや、オレは只の一般生徒だ」

「ボーデヴィツヒ。コイツはこの間の二機の無人機のうち片方をひとりで撃破した実力者だ」

「織斑先生!?!」

「事実じゃないか。私はお前たちは相性が良いと見ているんだが」

オレは元傭兵で、ラウラは軍人だ。

確かに傭兵として軍から依頼を受けるなどしていたが、それはあくまで商売としての間柄であって、軍属は基本的に傭兵を見下すし、そのせいか傭兵も軍属を軽蔑する奴が多い。

オレは別に軽蔑するつもりは無いが、見下してくる奴に好感が持てる筈がない。

ラウラがどんな人物か詳しくは知らないが、いかにも軍人ですという雰囲気は漂ってくる。

織斑先生が軍人と傭兵の関係を知らない筈がないだろうに。どういふつもりなのか。

「ま、まあ。IS学園の生徒としてよろしく。ラウラ」

「……………」

「ボーデヴィツヒ」

「よろしく」

やはり仲良くやっていせる気がしない。

Episode. 10

○月×日。

シャルル・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ転入。

しかし、転入初日——それも朝のHRの時間にその事件は起こった。

ラウラは織斑を嫌っているようで、顔を見た瞬間に織斑の顔をひっぱたいた。

「あれはどういう事だ、ラウラ?」

「どういう事とは?」

一時限目『IS実習』の途中にラウラと先程の行為について話す。

織斑先生に言われたからなのか、そうじゃないのか。

ラウラは一応オレとは普通(?)に話してくれる。

「織斑のことを認めないと言ったことだ」

「言葉通りの意味だ。私は織斑一夏を織斑教官の弟とは認めない」

そうか。織斑先生は以前ドイツ軍に教官として所属していたのだったか。

織斑一夏の誘拐事件。

二連覇目前だった織斑千冬は弟を助けに行って棄権してしまった。

あの時織斑を誘拐したのは傭兵だった。

傭兵は原則としてクライアントの情報を流さない秘匿主義だ。

オレはあの事件の犯人はドイツ軍なんじゃないかと思っっている。

ひとつ。織斑千冬の対戦相手がドイツ代表でなかったこと。

ドイツ代表が優勝したら、そのために織斑千冬を棄権させたと思われるからだ。

ふたつ。ドイツ軍の織斑千冬への情報のリークが早すぎたこと。

傭兵はバカには務まらない。

ドイツ軍が傭兵を雇い、その合流場所を伝えればどの国よりも早く織斑千冬に借りを作らせることができる。

と、オレの推測はこんな感じだが、証拠が無いので証明できない。それに、たとえそうだったとしても、ラウラたちのような実動部隊には知り得ぬことだったはずだ。

そういう裏でのやり取りは、上層の幹部たちの領分だ。

「ラウラは少し誤解しているようだ」

「なんだと?」

「オレは入学当初から織斑を鍛えているが、筋はいい。流石は織斑千冬の弟と言っている」

織斑の剣道の腕は、箒だけではなく優秀な姉がいたからこそその賜物だろう。

ただ我武者羅に打ち合うだけではああはならない。

姉からの指導。同僚との切磋琢磨が今の織斑を成しているのだ。

「何なら一度アイツと模擬戦を試してみるか?」

「——っ!? 是非頼む!」

「そ、そうか。では予定ができたなら伝える」

オレが織斑を鍛えていると言ったところから敵意のようなものを感じられたが、模擬戦を持ちかけるとすぐに消えた。

今のラウラには織斑の味方は皆等しく敵のような認識なのだろう。

「では、その前に授業に集中してもらおうか」

「この連中はISに対しての意識が薄すぎる。私が教える事は何も無い」

そうしなくては織斑先生に怒られるのだが。

「ぼ、ボーデヴィツヒさん? 何か問題がありましたか?」

山田先生が進みの遅いラウラたちを心配してやってきたが、ラウラは無愛想に答える。

「何もありません」

「え、じゃあ何で……」

「ラウラ。軍人なら任務はきちんと遂行するものだろ?」

「……………」

「織斑先生もそう言うだろうな」

「……貴様ら、早くしろ」

ラウラは渋々と準備を始める。

織斑先生のことに関係させれば、嫌とは言えないようだ。

少しズルいかもしいれないが、授業なのでやむを得まい。

「ありがとうございます。アロンさん」

これで、やっと実習が始められる。

「さて、皆はどうなっているかな」

今回の授業は専用機持ちたちが班長になって一般生徒のIS実習の手伝いをするというものだ。

オレはといえば、山田先生のように遅れている班の補佐をすることになってる。

まずは問題のシャルル・デュノアの所を見に行くでしょう。

「あ、君は……」

「アニエスだ。何か問題はあるか、シャルル」

「ううん、何も」

そう言っただけ微笑むシャルルは、男というには可愛げがあった。

何も知らずに男だと言われれば、確かに納得してしまうかもしれない。

「お前が来たときは驚いた。二人目の男性IS操縦者なんて聞いていなかったからな」

「そ、そうだね。何故だか知らないけど、お父さんやその部下の人が隠してたみたいで」

シャルルの父は、デュノア社の社長だったか。

シャルロットを男としてIS学園に転入させて、何ができるといふのだろう。

衰退しかけているデュノア社の宣伝としては、男性IS操縦者だけでは物足りない。

どうせなら無理にでも新型ISを開発させ、試作品を持たせて転入させ、更にそこから宣伝をしたほうがインパクトがある。

デユノア社も一応は第三世代型の開発を進めているはずだ。
事実、ラファール・リヴァイヴアルは今から10年後に開発される
第三世代型なのだ。

間に合わなかったなら確かに納得もいく。

だからせめて男性IS操縦者の存在をアピールして、会社の存続を

図ったとも――

「アニエス、大丈夫?」

「ん、何がだ?」

「いや、今すぐく思い詰めた顔してたから」

「シャルルの指導を受けられる女子が羨ましいなと思っていただけ
だ」

「そんな。アニエスはISの操縦が上手いんでしょ? 無人機をひと
りで撃破したって聞いたよ」

「運が良かったただけだ。オレはただの一般生徒さ」

「そう言えば、アニエスは自分のこと『オレ』って言うんだね」

「そうだが、何か変か?」

「アニエスは綺麗なんだし『私』って言った方が似合ってるよ」

「ふっ。なるほど『貴公子』か」

シャルルはその振る舞いから『プロンドの貴公子』と呼ばれている。
本人や織斑は知らないようで、女子たちの中だけでそう呼ばれてい
るのだ。

織斑の場合は『最強の弟』『キング・オブ・唐変木』などだ。

うむ。そのままだ。

また、このオレにも呼び名があるらしい。

つい最近のこと。簪に教えてもらった。

クラス対抗戦の無人機乱入事件の際、オレが無人機のひとつを撃破
した功績から『薔薇色のナイト』と呼ばれるようになったらしい。

呼び名がつくのはこの際どうでもいいとして、何故『薔薇』なのか。
オレの髪はそんなに赤くはないと思うのだが。

「まったく、無人機のせいで色々とかき乱されたな」

周りの人間から期待されることは嫌ではないので、悪い方向に向か

わないだけよかったと思っっている。

「では、またな」

「うん。がんばってね」

「ふーん。そうなんだ」

織斑の放課後訓練を終え、寮の部屋に戻る前に楯無に今日一日のシャルルのことを話してみた。

わかったことはシャルルが絵に描いたような貴公子であること。

同姓の織斑との接触到、いちいち大袈裟に反応すること。

「やはり確証がほしいな」

「そうね。これだけじゃ推測にしかないし」

「仕方がない。もう少しこっちから仕掛けてみるか」

「どうやって?」

「オレもフランス人だ。うまく話を合わせるさ」

「織斑、模擬戦をしてみないか？」

ラウラに頼まれた織斑との模擬戦。

中々アリーナでの模擬戦が認められず、ようやく短い時間だけ許可が降りた。

「模擬戦って、誰と？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒとだ」

「「えっ!?!」」

ラウラの名前を出した瞬間、そばにいた連中が声をあげた。
予想通りの反応ではある。

そして真っ先に反論してきたのは箒だった。

「アニエス、何を考えている。アイツは一夏を敵視しているのだぞ」

「それについてはオレとシャルルが立ち会うことにした。シャルルにも話は通してある」

織斑の訓練の一環だと言ったら二つ返事で了承してくれた。

「織斑は昨日、シャルルと射撃武器について学んだだろう？ 今日の本気で撃ってくる相手に今までの違いを実感してもらおう。いいな？」

「最近、織斑先生とアニエスの雰囲気似てきたと思わない？」

「そうですね。特に相手に有無を言わせない所とか」

「聞こえてるぞ。鈴、セシリア」

あんな鬼教官と一緒にしないでほしい。

『ふふふ。待っていた……待っていたぞ、織斑一夏!』

「悪い顔してるな」

「うん、してるね」

モニターの向こうでは念願の織斑一夏との戦闘がようやく叶うと言って嬉しそうなラウラがいる。

しかしその笑顔が悪い。

織斑は勿論のこと、ピットに設置されたモニターで見ているオレとシャルル、そして観客席で見ている箒、鈴、セシリア。更には今回の件の情報を聞き付けて集まってきた女子たち、それら全員が引く程だ。

《では、織斑一夏とラウラ・ボーデヴィツヒによる模擬戦を開始します》

オレがいつでもリヴァイヴに乗れるように準備を終えると同時にアナウンスが流れ、それが終了した直後ラウラが動く。

「いきなり!?!」

シャルルが驚き、次の瞬間にはラウラのIS『シュヴァルツエア・レーゲン』のレールカノンが火を吹いた。

「さあ、織斑。これまでの成果を見せてみる」

織斑はラウラの砲撃を寸での所で躲す。

そこから瞬時加速で接近し、雪片を振るう。

ラウラは雪片式型の性能をよく知っている筈だ。

なにせ大好きな織斑教官の使っていた武器の後継型なのだから。

「ダメだ」

「え?」

織斑は判断ミスをした。

シュヴァルツエア・レーゲンに不用意に近づいてはいけない。

それはドイツの第三代兵器、

アクティブ・イナード・シャル・キャンセラー
A I

C と呼ばれる特殊

兵装のせいだ。

『な、体が!?!』

織斑の顔に驚愕の表情が張り付く。

突然自分の体がピクリとも動かなくなれば、それも仕方がない。

これはオレのミスでもあるか。

いつもの織斑なら、こんな不用意に近づくことはなかった。

それはオレが相手をよく見ろと教えたからだ。ラウラが織斑を敵視しているように、織斑もラウラに対して何か思うところがあつたようだ。

事実、織斑が瞬時加速をかけた時の目がそれを物語っていた。

『やはり貴様も、私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では有象無象のひとつでしかない——消えろ』

動けない織斑に、ラウラの砲撃が炸裂。

次の瞬間、レーゲンから四つのワイヤーブレードが射出され織斑の体に巻き付く。

「まずい。行くぞ、シャルル！」

「う、うん！」

危険を察知して、オレたちはアリーナへと飛び出す。

ワイヤーブレードが巻き付いた部位は右腕、左腕、左足、そして首だったのだ。

絶対防御が発動しなかったということは、巻き付く時は脅威ではなかったということだが、その後まではISも考慮していない。

ラウラがあのまま攻撃を続けていれば、白式が強制的に量子変換されISスーツを着ただけの織斑が残り、ラウラはその織斑を直接痛め付けることができる。

クラス対抗戦で鈴がやろうとした『殺さない程度に痛め付けることはできる』とは訳が違う。

「ラウラ、やりすぎだ。織斑を放せ」

「何を言っている。これは私とコイツの戦いだ。邪魔をするな！」

「そうか、では仕方がないっ」

オレは近接ブレードを展開し、織斑に巻き付いたワイヤーを切る。首を絞められて気を失った織斑をシャルルが受け止め、急いで離脱していった。

「邪魔をするなど言った筈だが？」

取り残されたラウラの目には怒りが籠っていた。

「ラウラ、これは模擬戦であつて戦争じゃない。よつて相手を徹底的

に痛み付けることは許されないぞ」

「ふんっ」

「お前には少しお仕置きが必要だな」

ラウラは織斑を有象無象のひとつでしかないと言った。

その有象無象とはこの学園の生徒全員を意味している。

そんな意見を持つ物には当然お灸を据えなければならぬだろう。

「思い上がるなよ。たかが訓練機で私の相手をするか?」

「お前こそ思い上がるなよ。ISの性能差が勝敗を分かっ絶対条件ではない事を教えてやる!」

「ならば容赦はしないっ!」

感情的になって突っ込んでくる。

その動きは至極単純で、カウンターを当てるには簡単すぎる程だ。

「ぐっ!」

カウンターパンチをまともに食らい、よろけるラウラ。

「仲間内で『政府の犬』と呼ばれる軍人がどれほどの物か見せてもらおうか」

挑発することで相手の激情を買い、相手の動きをさらに感情的にさせる。

「そうか。貴様、傭兵か」

「元、だがな。今はIS学園一年一組『アニエス・アロン』だ!」

左手にショットガンを構え、ラウラに向けて放つ。

ラウラは慌てて射線上から出ようとするが、至近距離から放たれた散弾を完全に避けることはできなかった。

「くっ、傭兵風情が」

ラウラは軍属でIS専用の部隊の隊長で、それに見合うだけの実力がある。

お前は織斑千冬に——その強さに憧れているんだったな。

しかしラウラよ。心得ているか?

ISは確かに兵器だ。世界最強の力だ。

だが、それが強さに繋がるとは限らない。

攻撃力はあくまで攻撃力でしかないのだ。

お前は間違っている。

単純に言う強さは軍事的価値と言って大差ないが、哲学的な強さはもつと複雑な物なのだ。

「幼すぎるんだ、お前は」

ラウラよ。この言葉の意味がわかるか？

身体的な幼さを言うなら、オレとお前の年齢は一緒なのだからオレも幼いという事になる。

オレが知っている強さは——あの人が教えてくれた強さは、今の前が持っていないものだ！

「食らえっ！」

レーゲンの装甲に刃を押し込む。

しかもそこはレーゲンの特徴とも言えるA I Cの展開するための機関だ。

しかし破壊した訳ではない。

あと1センチ押し込めばA I Cを展開できなくなる。

しかしそれは今度の学年別トーナメントに支障をきたすため、オレにはできなかつた。

「こ、この私が……」

「これでも学園の生徒皆が有象無象だど？」

ラウラも今の状況が分かっているのだろう。

これ以上抵抗することはなかつた。

Episode. 12

「……う、ん？」

何があつたんだろう。

俺はラウラに捕まえられて、それから――

「織斑……」

「あれ、アニエス？」

俺は保健室のベッドに寝かされていたようで、その側にアニエスがいた。

俺が目覚めて話しかけてきたアニエスは、ひどく申し訳なさそうな顔をしていた。

恐らく、俺とラウラを戦わせてしまったことに自分の不注意を感じているのだろう。

「すまなかつたな、織斑」

「アニエスが謝ることじゃねえって。俺がこうなったのは俺が弱かつたからさ」

「お前は弱くはないさ」

そう言いながらアニエスは微笑むが、その微笑みにはいつもの彼女のような毅然とした態度が見て取れない。

俺は話題を変えるために、前から気になっていたことを訊ねてみる事にした。

「なあ、アニエスは何であんなに強いんだ？」

アニエスがセシリアと戦って勝った事も、クラス対抗戦で乱入してきた無人機の一機をひとりで撃破した事も千冬姉から聞いた。

「アニエスの実力なら代表候補生になってもおかしくないだろ。でも、アニエスはただの生徒だって言うし……」

「それは……」

アニエスは言葉を詰まらせた。

「お前たちより苦労してきただけだ」

同じ年の筈だが、どうも数年年上に見えてしまう。

鈴やセシリアたちが千冬姉に似てきたと言うが、確かにその通りか

もしれない。

「さて、織斑が目を覚ましたと皆を呼んでくるとしよう。ではな
「お、おう」

「それでタッグトーナメントになったんだ」

オレは部屋に戻り、簪のパソコンの画面を見ていた。

簪は織斑の下りになってからは、やはりどうでもいいという態度で
聞いていた。

「オレはラウラのストッパーとして強制的に組まされたが、簪はやは
りまだ出ないのか？」

「まだ完成してないから」

ひとりでISを組み立てるという目標はまだ諦めていないらしい。
それはそれで良い傾向だ。

時間は掛かるだろうが、ひとりでそれを成したときにはきっとそれ
なりの実力が身に付いているだろう。

「簪。お前はISの整備士ではなく日本の代表候補生だろ？」

「……………」

「お前は少し勘違いしている」

「勘違い？」

「お前の姉は別にすべてひとりでやった訳じゃない」

するとキーボードを叩いていた簪の手が止まった。

「お前に本音というメイドがいるように、楯無にも協力してくれる者

がいた筈だ。確かにあの霧纏ミスデリアス・レイディの淑女はモスクワグストーリー・トゥマン・モスクヴェの深い霧の設計データを元に楯無ひとりで作つもの者だ。しかしその仮定で、いったいどれだけの人脈が駆使されたと思う?」

「何が言いたいのか?」

オレの言っていることは理解できている筈だ。

それでも訊ねるといふことは、オレへの威嚇か?

「つまり、人の手を借りてもお前の目標に届かないことはないということだ」

「でも……」

「楯無が主な部分を作つて、それを補佐する人物がいた。それを今度はおれたちがやるんだ。向こうにはそれなりに専門の奴がいただろうから、条件的にはこっちの方が不利だ」

簪は少し考え、そして答えた。

「……じゃあ、アニエスと本音にだけ頼んでみる」

その後一度部屋を出ると、楯無と会つたが「それでタツグトーナメントになつたんだ」と言われ、その振る舞いが簪とよく似ていた。

「結果、簪の楯無に対する評価を下げてしまったのだが。すまないと思つている」

「謝ることはないわ。むしろ感謝してる。それにほとんど事実だもの」

「そうなのか?」

「どんなに頑張った人でも、何かに埋もれてしまえば名前すら残らない。私の場合は虚ちゃんや専門の人の補佐や教えがあつての事だし、もし私が今の簪ちゃんだったら絶対にIS完成させることなんてできないわ」

「……………」

「ん、どうかした？」

「やはり姉妹なのだな、楯無と簪は」

見た目や振る舞いだけでなく、考え方の傾向も二人はよく似ていた。

少々相手を思いすぎてしまうため、すれ違いを起こしやすい姉妹なのだ。

「な、何よいきなり」

「なんでもない。それよりも、シャルルの件だが」

「ああ。何か分かったかって？ いや、こっちはまったく」

「オレもだ」

やはりシャルル・デュノアは存在しないのか？

では本当にシャルルはシャルロットだということになるが。

「でも、デュノア社が経営難にあるのは本当みたい」

「それは知っている」

「もしシャルル君がデュノア社のスパイだとしたら」

「狙いは白式のデータだろう」

考えてみれば、織斑に接触して何ができるかと言えば、織斑のDNA

Aの採取か白式のデータの奪取だ。

DNAについては織斑のルームメイトであるという立場を利用して毛髪でも取ってしまうえば事足りる。

「そうなるわね」

「デュノア社の社長は心優しい人物だったのに……」

「未来の情報？」

「オレはデュノア社長に一度だけあったことがある。商売としてデュノア社に行ったが、朗らかな笑顔を振り撒く明るい親父さんだったよ」

まだ幼かったオレを心配してくれるくらいだ。

自分の子供ならそれ以上に可愛がつてもおかしくない。

オレの傭兵人生の中で有数の光だったと言つても良い。

「そんな人が貴女にどんな仕事を？」

「オレに依頼してきたのはデユノア社長ではない。商売相手はデユノア社長の正妻だったよ。彼女が部屋に入った時、一瞬だけ社長の顔が強ばったのを覚えている」

「じゃあ今回も、その正妻が？」

「実の子……いや、実の子ではないのかも知れないが、身内をスパイとして送り込むくらいなら彼女はやりそうだ」

「何でわかるのか聞いても？」

「彼女の依頼の内容が『とあるＩＳ開発社のデータを盗む』という物だったからだ。この時代にはまだそんな傭兵はいないし、だから身内を使って白式のデータを盗もうと企んでいるんじゃないか？」

「推測の域を出ないけど、可能性としてはあり得るわね」

その通り。だが、オレの手段はそれしかない。

未来から来たオレは表舞台にあまり立つわけにはいかないのだ。

「かなり大胆だが、シャルルに鎌を掛けるというのは？」

「推測が正しければ上手くいけるかもしれないわね。大丈夫なの？」

少々危ない橋ではあるが……

「いくらか勝算はある」

ある夜、織斑とシャルルの部屋の前。
いざとなると緊張するものだ。

部屋の中からは微かに声が聞こえる。織斑とシャルルの物だ。

「スー、ハー……よしっ」

深呼吸をして、扉をノックする。

「織斑、シャルル。いるか？」

「お、おう。アニエスカ……」

扉が怖々と開き、中から織斑が顔を覗かせた。

様子がおかしい。それにシャルルはいないのか？

「シャルルはどうした？」

「あ、いや。か、風邪だ。風邪で休んでる！」

「バカを言うな。今日は放課後訓練のときもシャルルは元気だったぞ」

織斑はシャルルを会わせたくないらしい。

でもその行動がオレの思考を一気に加速させた。

優しく唐変木で、それでいてラッキースケベ織斑のことだ。

シャルルが女だと知ったのかもしれない。

「シャルルに話があるんだ。入れてくれないか」

「い、一夏。僕は大丈夫だよ」

中からジャージ姿のシャルルが出てくる。

「織斑、少し席を外してくれ。大事な話なんだ」

「え、うん。いいけど」

すると織斑とシャルルはヒソヒソと話をし、しばらくしてから織斑が部屋から出ていった。

「あ、アニエスカ……えっと、君の気持ちは——」

「シャルロット……」

「——っ!？」

「やはり、お前はシャルロットだったのだな」

「どうしてそれを……？」

シャルル——いや、シャルロットは目を丸くする。

それだけで、性別を偽っていたことがわかった。

「でもそっか……。やっぱりアニエスにはバレてたんだ」

シャルロットはため息混じりに溢した。

「わかっていたのか？」

「アニエスが僕を見る目に、いつも疑惑が籠っていたよ。僕がわかるくらいにね」

案外あつけなかった。

オレが楯無に言った勝算とは、織斑勢力のメンバーほとんどがIS学園関係者だったということだ。

その中に男子はおらず、シャルルがシャルロットであるという可能性が高いと思っていたからだ。

オレはシャルロットは身内の名前だとか言って誤魔化すと予想していたのだが、オレがシャルロットを疑っていたのを彼女にはバレてしまっていたらしい。

「で、アニエスは僕が女だと知ってどうするの？」

「織斑は何と言ってたんだ？」

『『ここにいろ』だつてさ。嬉しかったよ』

シャルロットはその時のことを思い出したのか「えへへ」とのろけ笑いをした。

なるほど、その場で女子の心を揺さぶる言葉をかけて織斑は次々と女を攻略していつているのか。

「そうか……」

「アニエスはいいの？」

「何がだ？」

「僕を疑ってたつてことは僕が、その……スパイだつて」

「予想だと言った。そしてそれを知った今、お前がそのスパイを仕方なくやってたのか否かで、オレは今後の態度を改めるつもりだ」

「え、どういうこと？」

「オレは情報通でな。お前がデユノア社長の愛人との娘だという事を

知っている」

「……………っ」

シャルロットが言葉を詰まらせた。

他人の口から言うのは禁句だったのかもしれない。

「さあ、どうだ？」

「仕方なくも何も無いよ。僕に拒否権はないんだから」

「お前はやりたくてスパイを引き受けたのかどうかと訊いているんだ」

「そんなはずっ……………ないよ」

最後の辺りが萎んでしまったが、はっきりとした意思が感じられた。

「そうか。……………ではシャルロット」

オレはしやがみ込み、シャルロットの手を取る。

「オレにはお前を救うことができると言ったら信じるか？」

「えっ」

「今はまだ用意できないが、いつかきつと用意する」

シャルロットがスパイをしなければなくなった大きな理由は、デュノア社の経済難にある。

第三世代型の開発が滞っているのなら、それを後押ししてやればいい。

あくまで後押しだが。

「何でそこまでしてくれるのかな？」

「お節介なだけさ。ま、自重する気はないがな」

「アニエスらしいって言うのと違うのかな。でも、アニエスがそんな人でよかったよ」

「お前の事情を知って同情しない奴がいたら、オレはそいつを軽蔑するよ。助けてやりたいとは思わないのかと」

「ありがとう。アニエス」

やっとシャルロットが心から笑ってくれた気がした。

いや、事実そうなのだろう。

自分を偽って日常を過ごすのは、それはもう辛い事だっただろう

に。

「さて、オレの疑問は解決したし、シャルロットは織斑に惚れたし。これでオレは帰るとしよう」

「え、ほ、惚れ——あ、アニエス〜！」

シャルロットの正体を知ったあの夜から日が経ち、ついに学年別トーナメントの開催日となった。

しかし、今年のトーナメントは一味も二味も違う。

まず、今年はある問題児が理由でトーナメントがタッグマッチになっっていることだ。

そして更に、今回の優勝者は織斑一夏と交際できる権利を得ることができらしい。

もちろん、本人には内緒での取り決めらしい。

「……………」

「心配するな、ラウラ。オレとお前が組めば優勝は間違いなしだ」

ラウラとタッグを組むようになってから、オレはラウラと織斑両方の面倒を見ていた。

織斑とセシリアの時と同様、どちらにも普通的手段で得られる情報を元に訓練をしてある。

目標はもちろん優勝。

しかしこのトーナメントがタッグマッチになったせいで、専用機持ち同士のタッグは皆優勝候補としてあげられていた。

例外の例としてオレでラウラのペアがあるが、オレの実力は学園中の皆知っている。

むしろオレとラウラのペアは反則ではないかと意見が拳がっていた程だった。

「優勝になど興味はない。むしろ、このような場所でお前以外の誰かに負けるなどあり得ない」

「随分高い評価を貰えて嬉しいが、油断をすると足元をすくわれるぞ」
「織斑一夏のことを言っているのなら、先日には私はアイツに勝っているから心配はいらない」

「これから行うのは試合であって戦いではないぞ。この間のようなワイヤーによる拘束術は、今後一切禁止だ」

「ふんっ」

大丈夫だろうか。

ラウラはISの操縦において、頭では分かっているも結局は気持ちで行くタイプだ。

それ故に沸き起こる激情を抑えられなければ、どんなミスをするのかわかったものではない。

「ま、それなら第一戦目でそれを証明してもらおうか」

「何？」

「見てみる、ラウラ」

オレはトーナメントの組み合わせの端を指差す。

第一ペアは『アニエス・アロン&ラウラ・ボーデヴィツヒ』と書かれているが、第一戦目の相手のペアはなんと『織斑一夏&シャルル・デュノア』と書いてあった。

「反則じゃないか？」

「いや、そんなことはない」

「僕も反則だと思っただけど……」

「……………」

織斑、アニエス、シャルロット、ラウラがそれぞれの配置につく。

あとは試合開始のアナウンスを待つのみだ。

「ラウラはひとりで織斑と戦いたいらしい。安心しろ。前のようにならないようキツク言っておいた」

「アニエスってお姉さんみたいだね」

「オレはまだ16歳だ」

《——それでは、試合を開始してください》

ついにアナウンスが鳴り、第一試合の火蓋が切って落とされた。

「アニエス（シャルル）、そっちは任せた！」

「了解！」

アニエスとシャルロットは上空で、ラウラと一夏は地上で戦闘を開始した。

「行くよ、アニエス！」

「来い、シャルル！」

二人は同時に銃を展開し、引き金を引いた。

二人が展開したのはどちらもショットガン。

しかし、シャルロットの物はボルトアクションのいらぬ連装ショットガン。

アニエスが一度撃ったとき、シャルロットは三発も撃つことができた。

単純に武器の構造の差で、その差はどうしても縮められない。

二人の差はその実力とISの性能である。

どちらもフランス製のラファール・リヴァイヴであるが、シャルロットのは専用機でラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡとなってい

る。

普通に考えれば訓練機が勝てる確率は低いが、それはラウラに対して「性能の差が勝敗を分かたず絶対条件ではない」と豪語するアニエスの実力がそれを凌駕しているのだ。

「くっ」

互いに互いの攻撃を躲すが、アニエスの方が難しい分だけ隙ができた。

シャルロットはそこをアサルトライフルで攻撃。

アニエスが瞬時加速で射線を逃れながら同じくアサルトライフルを展開したのを見ると、素早くスナイパーライフルを展開して距離を取るシャルロット。

「なるほど、ミラージュ・デ・デザート砂漠の逃げ水か」

砂漠の逃げ水。

斬り合っていたかと思えばいきなり銃に持ち替えての近接射撃、間合いを離せば剣に変更しての接近格闘。

押ししても引いても一定の距離と攻撃リズムを保ち、攻防ともに高いレベルが安定した戦闘方法。

シャルロットいわく『求めるほどに遠く、諦めるには近く、その青色に呼ばれた足は疲労を忘れ、綾やかなる褐色の死へと進む』とのこと。

アニエスの解釈では相手の展開した武装に合わせて、相手に不利な間合いを行き来する戦法となっている。

シャルロットのこの戦法は彼女が得意とするラピッド・スイッチという技術による所が大きい。

特に一夏のような攻撃の有効範囲が極端に狭い相手にはとても有効な戦法と言えた。

「流石だな、シャルル」

「アニエスこそ。訓練機でそこまでやるか、って感じだよ」

シャルロットは焦りを感じていた。

彼女は以前、アニエスとラウラの戦闘を見ていたが、実際に戦ってみるのとはやはり違っていた。

戦闘時のアニエスは、近くだと普段とは別人のように見えたのだ。普段は毅然としてシャルロットにとって謎の多いアニエスだが、いざ戦闘開始ともなると感覚派と理論派が入り交じったような操縦技術を見せる。

アニエスは自分の特技を瞬時に見極め、それに対応した戦略を今も頭の中で構築しようとしているのだらうと考えると、シャルロットは背筋に冷たいものが走ったように思えた。

「これはあまり長引かせるわけには行かないかな」
「どうかな……ふっ！」

アニエスはショットガンを発射。

シャルロットはシールドを構えて距離を取り、素早くスナイパーライフルを展開する。

間髪入れずに照準を合わせようとするがその場にアニエスの姿は無かった。

「こっちだー！」

ハイパーセンサーがアニエスを捉えていたが、シャルロットの反応速度が遅れて認識した。

「うそっ、どうやって!?!」

アニエスの手には近接ブレードが握られている。

交わせるタイミングではなかった。

「貰ったぞー！」

「しまっ——」

刃がシャルロットのISの装甲を切り裂く。

そして距離を取らうとスラスタ^{カスタム}を吹かすシャルロットであったが、アニエスがリヴアイヴCⅡの装甲の一部をがっちり^{カスタム}を掴み放さない。

振り切らうとブレードを展開するも、あっという間に弾かれてしまう。

続けて幾度も切り付けられる。

シャルロットの戦法も、相手との距離が動かせなければ効果を発揮しない。

「これで、最後——！」

「あああああつ!!!」

アニエスとシャルロットの勝負が付こうという時、ラウラの叫び声
がアリーナ中に響き渡った。

時は戻り、一夏対ラウラ戦。

戦況は膠着状態にあった。

というのも、試合開始直後にシャルロットがアサルトライフルを一
夏に手渡していたからだ。

当たらずとも牽制になればいいと渡した物だが、A I Cの弱点に気
付いた一夏はそれを上手く活用して戦っていた。

「バカなっ。こんな短時間で?!」

「油断大敵って事だ、ラウラ！」

一夏の撃った弾丸はラウラの動きを制限し、それを補おうとラウラ
がワイヤーブレードを射出。

それを打ち落とすだけの技量を持たない一夏だったが、接近して雪
片で叩き落とすことはできる。

「この私が……」

今、ワイヤーブレードが全て破壊された。

「こんな奴にー！」

ラウラは一夏の急成長に驚いていた。

今ならアニエスが一夏のことを買っていたのが分かる気がしたの

だ。

そしてラウラは、自分の慢心が生んだ小さな敗北を感じた。

(こんな……こんなところで負けるのか、私は……！)

その瞬間、ラウラの脳裏に最愛の教官の顔が浮かんだ。

その顔はラウラの憧れた織斑千冬ではなく、ひとりの姉としての織斑千冬だった。

(なぜ、あなたはそんな顔をなさるのですか……)

かつてその顔を見たときのラウラは、自分の理想が崩れそうな思いだった。

だからこそラウラは腹が立った。

誰よりも強く、誰よりも厳しかった憧れの鬼教官の顔を、嬉しそうに綻ばせる男の顔を見ると心の奥底から激しい感情が溢れてくるのだった。

(この感情は何なのだ。邪魔だっ！)

ひどく腹が立つ上に、そのせいなのか攻撃の精度が若干落ちるのは感じていた。

そしてそれがラウラをまた腹立たせる。

(コイツだ。コイツのせいだ)

この溢れてくる激情を払い除けたい。そのために――

力が、欲しい。

ドクン……と、ラウラの奥底で何かがうごめいた。

そして、その何かは語りかけてくる。

『――願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲するか……？』

(言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私など――空っぽの私など、何から何までくれてやる！)

ラウラは何かも分からぬそれに手を伸ばす。

(だから、力を……比類無き最強を、唯一無二の絶対を――私によこせ！)

《Valkyrie Trace System》—boot.

Certificate—Clear.
MIND Condition—Uplift.
Damage Level—D.

「何が起こったの?」

「異常事態だ。シャルル、試合は中止だ」

目の前ではラウラが……そのISの装甲がすべてぐにやりと溶け、どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。

「ヴァルキリー・トレース・システム……。そうか今日は!」

ISは原則として変形ができない。

ISがその形状を変えるのは『初期操縦者適応』と『形態移行』の二つだけだ。

パッケージ装備による多少の部分変化はあっても、基礎の形状が変化することはまずない。

しかし目の前で起こっている現象は変形というよりも、一度ぐちゃぐちゃに溶かしてから再度作り直す粘土人形に見えた。

ヴァルキリー・トレース・システムは、過去のモンド・グロッソの部門受章者の動きをトレースするシステムで、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。「ヴァルキリー」という名にしては、禍々しいものだな」

シユヴァルツェア・レーゲンだったものはラウラの全身を包み込むと、その表面を流動させながらまるで心臓の鼓動のように脈動を繰り返し、ゆっくりと地面へ降りていく。

それが大地にたどり着くと、まるで倍速再生を見ているかのようにいきなり高速で全身を変化、成形させていく。

そしてそこに立っていたのは、黒い全身装甲のISに似た『何か』。しかしその形状は先月の襲撃者とは似ても似つかない。

ボディラインはラウラのそれをそのまま表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーが腕と足につけられている。

そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所には装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。

その姿は織斑千冬のIS『暮桜』に酷似しているが、問題はその手

の武器である。

それは見間違う筈がない。

「雪片……？」

かつてブリュンヒルデと呼ばれた織斑千冬の操るISが振るって
いた剣。

そして一夏の《雪片式型》の前行型。

「そういうば、今日だったな。この事件は……」

まさかこのオレが平和惚けしていたとは。

ここ数日の自分を思いつきり殴り飛ばしてやりたい。

「くっ……、お前。よくも千冬姉の！」

織斑が弾かれたように千冬擬きに突っ込む。

「待て、織斑！」

オレの制止も聞かずに、織斑は加速。

そして雪片を構える。

「この——」

織斑の怒涛の斬撃。

それを千冬擬きが雪片で弾き返した。

更に横に一闪。織斑を吹き飛ばす。

「くそっ」

ラウラと戦った時のダメージと千冬擬きの攻撃を受けて、白式が
エネルギー切れで強制解除される。

しかし織斑はそれをお構いなしに千冬擬きに掴みかかろうとする。

オレは慌てて織斑の肩を掴んだ。

「織斑、IS無しで戦うつもりかっ！」

「放せよ、アニエス！ 邪魔するならお前も！」

「殴りたいなら殴ればいい。だがまず説明をしろ！」

オレがそう言うのと、織斑は頭に血が上っているのにやっと気付いた
のか、抵抗をやめた。

「あいつ……あれは、千冬姉のデータなんだ。それは千冬姉の……千
冬姉だけのものなんだよ。それを……くそっ！」

千冬擬きはアリーナの中央から微動だにしない。

どうやら武器が攻撃に反応して行動するのだろう。

「織斑、まずは冷静になれ」

《非常事態発生！ トーナメントの全試合は中止！ 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む！ 来賓、生徒はすぐに避難すること！ 繰り返し！》

「聞いての通り、お前がやらなくても状況は收拾される」

「だから、無理に危ない場所へ飛び込む必要はない、か？」

「違う。今のお前が飛び込んだ所で、何ができると言うんだ？」

白式は動かず、織斑は先程の戦闘で疲労が溜まっているはず。

千冬擬きは、そのまま織斑千冬の動きをする。

それが織斑を怒らせているのだが、たとえ白式が動いても今の織斑では千冬の動きをするアレには勝てない。

幸い、千冬擬きの持つ雪片にはシールド無効化の能力は付加されていないようだが、踏み込みと重さで振り抜かれる刃は織斑を吹き飛ばすほどの威力を持っている。

「エネルギーが切れたのなら、はやく避難して——」

「無いなら他から持ってくればいいんだよ。一夏、アニエス」

オレの言葉を遮って、シャルロットがふわりと降りてくる。

「そんなことができるのか？」

「普通のISなら無理だけど、僕のリヴァイヴならコア・バイパスでエネルギーを移せると思う」

「本当か!? だったら頼む！ 早速やってくれ！」

「けどー！」

びしっとシャルロットが織斑に指を指す。

いつも控えめな彼女にしてはその言葉は強く、有無を言わせぬものだった。

「約束して。絶対に負けないって」

「もちろんだ。ここで負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から一夏は女子の制服で通ってね」

「うっ……！ い、いいぜ？ なにけ負けないからな！」

シャルロットの軽いジョークを交えた会話に緊張がいい意味では

ぐれたのか、織斑の肩から力が抜けていた。

「じゃあ、始めるよ。……リヴァイヴのコア・バイパスを解放。エネルギー流出を許可。——一夏、白式のモードを一極限定にしね。それで零落白夜が使えるようになるはずだから」

「おう、わかった」

暫くして、シャルロットは息をつく。

「完了。リヴァイヴのエネルギーは残量全部渡したよ」

言葉の通り、シャルロットの体からリヴァイヴが光の粒子となって消える。

それに合わせて、白式は再度織斑の体に一極限定モードで再構成を始めた。

「やっぱり、武器と右腕だけで限界だね」

右腕だけでは確かに心許ない。

「では、こっちのも持っていけ。織斑」

「え、でも普通のリヴァイヴじゃ……」

「用はエネルギーバイパスのコードを白式に繋がられればいいのだろう」

オレは話しながらリヴァイヴを弄り、コードを白式に突き刺す。

シャルロットの見よう見まねでエネルギーを流出させると、それが終わると同時に白式の装甲が次々と形成されていった。

「勝てよ、織斑。オレはお前の女装など見たくないからな」

「ありがとう。ふたりとも」

織斑は胃を決して千冬擬きに望んでいった。

「さて、コードを戻さなくては」

「え、一夏を見なくていいの?」

「今の織斑はいい目をしていた。あれなら勝てる」

それよりもリヴァイヴを弄ったまま放置してしまっただけで、後で鬼教官に怒られる。

「そっか、信用してるんだね。アニエスは」

「経験から来る自信ってヤツだ」

「行くぜ、この偽物野郎!」

今、織斑が千冬擬きを切り裂いた。

真つ二つに割れた千冬擬きの中からラウラが倒れてきて、織斑がそれを受け止める。

オレの頭には事件のことなど既に消えていて、寧ろまた織斑に囚らず攻略された女子が増えたのだと呆れていた。

織斑のお陰でVTシステムの事件は無事收拾された。

今回、ラウラ本人にはお咎めはないらしい。

無論、条約に違反していたドイツ軍には面倒事が舞い込むだろうが、自業自得だ。

「お疲れさま、アニエス」

オレは部屋に戻ろうとすると、楯無に待ち伏せられていた。

「オレはほとんど何もしてない。頑張ったのは織斑だ」

「VTシステムについては聞いているわ。ところで、貴女は今回の件は知らなかったの?」

「いや、知っていたさ。しかし忘れていた。ここの所平和が続いていたからな。だいぶ惚けてきているよ」

惚けていた自分を磨り潰すように、ぎゅつと拳を握りしめる。

「貴女がいなくてもこの事件は起きた。そうでしょ? なら貴女が気に病む必要は無いわ」

「そうだが——」

「あ、私はこれで。ね?」

オレがいい終えるより早く何かに気付いて、楯無が猛スピードで逃げていった。

何事かとその場で呆気に取られていると、その答えはすぐにやってきた。

「アニエス?」

「ん、なんだ。簪か」

「今、話してたのって……」

「ああ、お前の姉だ。今日のトーナメントの件について聞かれたよ」

「そうなの?」

どうしたのだろう。

トーナメントのことについて話していたのは嘘ではないのだし、万が一にもオレは顔に嘘が出るわけでもないだろう。

「さつきチラツと見たとき、アニエスが怖い顔してたから……」
「怖い顔？」

楯無とは普通に話してたし、怖い顔をしていたつもりはなかったのだが。

「今日、何かあった？」

「いや、特にこれといった事はなかった」

それにしても、簪が心配してくれるなんて珍しいこともあるものだ。

いつもISを作っていたからそんな機会が無かったのかもしれないが。

「今日も式式を作りに行くか？」

「うん。そう思ってたんだけど……」

「うん？」

そつと簪が何かを差し出してくる。

「DVD？」

「うん。私の好きな……アニメ」

「簪はアニメが好きだったのか」

「う、うん」

ちよつと恥ずかしそうにうつむく簪は、とても可愛らしかった。

今なら楯無の気持ちがかかるかもしれない。

以前、お姉ちゃんと呼ばれて甘えられていたと聞いたが、簪の笑顔は確かに母性本能が擦られる気がする。

まだ見たことはないが……いや、オレは同じ年なのに母性とはどうなのだろう。

「う、うむ。……では部屋で見るとしよう」

「うんー」

大変嬉しそうだ。

喜んでくれるのはいいのだが、ISの方はいいのだろうか。

その後、簪と二人で色々アニメを見たのだが……

「ふむ。面白いな、これ」

「でしょ?」

「特に、なんだったか。こう……」

オレはとあるアニメの主人公と同じことをやってみせる。

「フランシスコ・ザビエル!」

「かんちやーん。あにりーん。いる〜」

「あ……」

その場に本音が来て赤っ恥を書いてしまったのである。

「暑い……」

季節は夏。日中の気温が上がり、女子たちが紫外線対策だ水着だ何だと忙しくなる季節だ。

あ、オレも水着を買わなくてはな。臨海学校の為に。

織斑先生曰く『水着が無いなら下着で泳がせるからな』と言った。

男がいる——というよりいつでも、それはダメだと思うのだが。

と言うわけで、簪と二人で買い物に行こうと思ったのだが、彼女は臨海学校には参加しないらしい。

やはりそこにも彼女の専用機が絡んでくるのだった。

簪とオレと本音で頑張ってはみるものの、中々これが難しかったのだ。

仕方がないので、オレは本音の方を誘いに行こうとしたのだが、これもダメだった。

気まずいのだ。

簪と一緒に、彼女が好きなヒーロー物のアニメから感動物のアニメなどを見ていたのだが……いや、これ以上はやめよう。

「仕方が無い。ひとりで行くとしようか」

一緒に買い物に行く友人は他には見つからない。

第一、気を遣ってしまうからだ。

例えば織斑たちは、あの代表候補生たちに気を使ってしまう。

……と、思っていたのだが。

「あれは……?」

オレの目線の先。そこには箒、セシリア、鈴、ラウラの四人だった。彼女たちはその視線の先にいる織斑とシャルロットを尾行しているようだった。

シャルロットとは言えば、学年別トーナメントの翌日に女子として

再編入。

織斑に恋する『オリムラヴァーズ』の一員になったのである。

しかしラウラが織斑に嫁にすると行ってキスをした時は驚いたな。

シャルロットと織斑が大浴場を使ったと聞いて暴走した専用機持ち達を更に暴走させるには十分すぎたのだ。

流星の織斑もキスをされれば気付くのかと思えば、今の目の前の光景である。

よしっ。ひとりでは暇なので絡んでみるとしよう。

「おい、何をしているんだ？」

『ひゃっ——つと、ととっ』

尾行している四人に話しかけると一斉に驚き、一斉にオレを草の陰に引き込んだ。

「み、見つかったらどうするのだっ！」

「そんな事も分かんないの!？」

「尾行する気があるのですのっ!？」

「そんなことで戦場を生き抜けるのか!？」

順に箒、鈴、セシリア、ラウラと小声かつ物凄い剣幕で起こられてしまった。

「ああ、すまない」と一応謝っておく。

「で、どうなってるんだ？」

織斑とシャルロットのペアは、織斑の性格を考えれば只の買い物なのだろうが、シャルロットはこの状況をデートだと思ってるに違いない。

しかも、二人で一緒に駅に降りた所で手を繋ぎ始める始末。

「どう見てもデートじゃないか」

残念ながら会話の内容まではわからないが、織斑の照れ臭そうな顔と、シャルロットの嬉しそうな顔を見れば一目瞭然だ。

ふたりはどうやら水着を買いに来たらしい。

オレも水着を買わなくてはならないのに、こんなことをしているのだろうか。

「……ん？」

シャルロットがこちらをチラッと振り向いた。

そしてオレと目があつて目を丸くした。

「とつくに気付かれてるじゃないか」

「分かつてますわ。わたくし達はあくまで監視でしてよ」

監視つてなんだ、監視つて。

これではデート(?)をしているシャルロットも落ち着けないだろう。

「ご愁傷なことだ。」

「そうか、アニエスにはまだ話していなかったな」

箒が突然思い出したように言った。

「なんのことだ?」

「私たちは嫁争奪戦において正々堂々と戦うという決定だ」

ラウラが得意気に言っているが、さっぱり意味がわからない。

織斑を取り合っているというのはわかったが、正々堂々の部分が理解不能だ。

「まあ、大体は把握した」

「その為にも尾行ですわよ!」

コソコソと尾行するのが正々堂々なのか。はじめて知ったな。

何をしているんだか、この四人は。

一緒に尾行してしまっているオレもオレだが。

シャルロットは相変わらずチラッとこちらの様子を見る。

と、水着エリアで状況は動いた。

「あれ、一夏どこ行った?」

「試着室に入ったな。シャルロットと一緒に」

『一緒に!?!』

確かにオレは見ていた。

オレンジ色の水着を持ったシャルロットが織斑の手を引いて更衣室に入っていったのを。

オレたちから姿を眩ますのと、織斑との距離を縮める二つの意味があると見た。シャルロット、中々やるじゃないか。

とは言え、さすがに試着室に一緒に入るのは教育上よろしくないだ

ろう。

「い、行くわよ！」

「待て、鈴。シャルロットが着替え中だったらどうするんだ！」

「なら、尚更行くわよ！」

「それは流石にまずい——おっ？」

オレの目線の先、そこには二人の人物。

オレにつられて四人もその方向を見る。

「お、織斑先生と山田先生……？」

「ふっ。織斑め」

あの二人も織斑とシャルロットが試着室に入っていったのを見ていたのだろう。

と、織斑先生はおもむろに試着室のカーテンを開けた。

「……あ」

「何をしているか、バカ者どもめ」

「残念だったな、シャルロット」

「ううう……恥ずかしいっ」

織斑先生と山田先生の説教を受けた後、シャルロットの先程までの行為は当然弄るいいネタにされたのであった。

「そ、そそ、そんなことよりシャルロット。あ、アンタはあの、あのの、あの中で……」

「お、おお落ち着け、鈴」と箒が鈴を宥めるが、箒自身も落ち着いたらどうか。

「コホン。では、シャルロットさん？ 貴女は試着室の中で……一夏さんに……」

「裸を見せたのか」

『……!?!?』

オレがそう言うとその場の全員が頬を赤く染めた。

シャルロットはここぞとばかりに大胆に行動にでる奴のようだ。

他の奴らでこんな事ができるのはラウラくらいか。

「いや。一夏は後ろを向いてたよ」

「ま、妥当な判断だな。一夏らしいが……おい、ラウラはどこ行つた？」

「そう言えばどこに……あ」

いつの間にかオレ達から離れていたラウラは、少し離れた所で水着を見ていた。

「どうやら水着を選ぶのに手間取っているらしい。」

生まれてからずっと軍属だったのだから、水着など持ったことも、おめかししたこともないのだろうか。

しばらくして通信機を取り出して誰かと話し、それが終わると物凄い勢いでシャルロットに詰め寄ってきた。

「シャルロット、私に水着を見繕ってほしい！」

「え、ラウラ!?! ちよっ……!」

そして物凄い勢いで水着選びに行ってしまった。

「水着……あ、そうだ。オレも頼みがあるんだが」

『えっ?』

「恥ずかしい話、水着を選ぶ自身が無くてな。ついででよかったらオレの水着選びに協力してほしい」

『……はっ?』

オレがそう言ったのがとても衝撃的だったらしく、残った三人はオレを見たまま啞然としていた。

オレだつて生まれてからずっと傭兵だつたのだ。

異性に気を使い始めたのは遅めの思春期を迎えてからだ。

しかも今まで海に行った事はあつても、遊んだことなどない。

つまり、オレもどんな水着が似合うのか分からないのだ。

「以外だな。アニエスにできない事があるなんて」

箒がバカな事を言っている。

お前はオレをどんな風に見ているんだ。

「そういう事なら、わたくしが選んで差し上げてよ。アニエスさんには以前からご恩がありますから」

「私も選んであげるわよ。とびつきり似合うのをね?」

ニヤニヤと不気味に笑う女子三人。

これはラウラのようにシャルロットに頼んでもらつた方が良かったかもしれない。

「な、何だ? お前達、悪い顔してるぞ?」

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの子が声を上げる。

今年の臨海学校は天候に恵まれて快晴。

陽光を反射する海面は穏やかで、キラキラと輝く波は潮風に煽られてゆっくりと揺らいでいる。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「オレもこんな綺麗な海は初めてだ」

バスで隣の席になったのは織斑だった。

織斑の知らぬ所で一組全員によるじゃん拳大会があったのだ。

そしてオレは図らずもじゃん拳で勝ってしまったわけで……。

「ぐぬぬ……」

「お、落ち着いてよ。ラウラ」

オレに恋愛感情は一切無いのだが、周りの奴からしたらオレも織斑を狙っているように見えているのだろう。

「困ったものだ」

「ん、何が？」

「お前の鈍さがだ」

周りの連中——特に専用機持ち達の目線が痛いほど刺さってくる。

あまり織斑に構うとまずい。

先日のシャルロットの気持ち分かるようだ。

「まあ、いい。もうすぐ到着するぞ」

バスを降り、全員整列をしてお世話になる旅館の女将さんにお辞儀をする。

『よろしくお願いまーす！』

今日も学園の女子達は元気である。

「あ、そうだった。おい、アロン」

挨拶が終わり、これから海に行こうとしたところで織斑先生に呼び止められた。

「はい、何でしょう」

「実はな。お前に専用機が与えられる事になるかもしれん」

織斑先生は他の生徒に聞かれないよう、耳打ちで話してくる。

ん？ ……オレに専用機だと？

「このオレに、ですか？」

「そうだ。お前が無人機を撃墜した事は各国の上層部なら誰でも知っているし、学年別トーナメントでのお前の戦闘技術を来賓が見ていたのだ」

未来人の戦闘技術見たさに来賓が集まっていたのか？

確かに来賓席にいた人数は相当なものだったが、まさかオレのせいだったとは。

しかしこの話、そう簡単に受けるわけには行かない。

オレは未来人。つまりこの時代では異物なのだ。

タイムパラドックスとなどという説が正しいのかオレは知らないが、下手に表向きな行動をするとオレの知る歴史に歪みが生じることになる。例えばクラス対抗戦のように。

いや、もう十分表向きになっているんじゃないか？

ただ一般人に知られていないだけで、世界の主要人物に知られていないわけではないか。

最終的には歴史をねじ曲げてしまうのが目的なのだが、どこから間違ったのかまったくわからない。

「悩むのはわかる。しかしフランス側がおを欲しいと言って聞かないのだ。事実お前はフランス国籍を持っているわけだが——」

「それでも、慎んで辞退させていただきます」

「お前ならそう言うと思っていた」

織斑先生は安心したような顔をして笑った。

これで良い……はず……。

Episode. 19★

「アニエスさん、遅かったですわね」

オレに割り振られた部屋には、本音、セシリア、相川が他にいる。本音と相川は先に行ってしまったようで、セシリアはまだ部屋の中にいた。

「すまない。織斑先生と話をしていた。待っていてくれたのか？」

「いえ、アニエスさんが逃げないようにと、箒さんと鈴さんから固く頼まれましたので」

「やっぱり、アレを着なければならぬのか？」

オレとしてはアレを着ても似合わないかと思うのだが。

こうなってしまった原因は水着選びを箒、セシリア、鈴の三人に手伝わせてしまったオレのミスだ。

「もちろんですわ！」

セシリアは自信満々に微笑む。

「実はジャージを持ってきたんだが——」

「却下ですわ」

「日焼けするのはちよ——」

「サンオイルを貸してあげましてよ」

「……………」

ダメだ。どんなに言い訳しても即行で打ち返されてしまう！

「逃げることは許しませんわ」

「ああ、ちよと待てっ。引つ張るなあ！」

首根っこを捕まれてズルズルと引きずられていく。

ハンターによって捕獲された獲物に、成す術はもうないのだ。

「鈴さん！ まだいらっしやいますか！」

「あ、セシリア。来たわね」

女子の更衣室に着くと、水着姿の鈴が中から出てきた。

セシリアと引きずられてきたオレを見て、まだ中で着替え途中だった女子の何人かが引いているじゃないか。

「やっぱりアニエスは嫌がってたのね。似合うのに」

「困ったものですわ。似合いますのに」

「で、でも……」

「デモもリプレイも無いわ。観念しなさい」

「ほ、本当にこんな着るのか？」

鈴がオレの荷物から買ったアレ——水着を取り出す。

ビキニタイプの淡い赤はオレの髪の色に合わせたらしい。

オレは露出を控えるようにリクエストした筈なのに。

「ほら、早く着替えますわよ！」

「嫌なら手伝ってあげるから！」

「わかった、わかった！ 自分で着替えるって！」

渋々と、本当に渋々と着替える。

「まさか、オレがこんな格好をするなんて……」

水着に着替えたオレは観念して浜辺に出てきたのだが、織斑に見られないかと恐る恐る進——

「あれ、アニエス？」

「ひゃっ!? ——むぐ」

驚いて素頓狂な声を出してしまい、慌てて口元を押さえる。

「お、織斑……う？」

「おう、そうだけど」

み、見られてしまった。織斑に。男に。

殆ど裸のような姿を男性に見られたのはいつ以来か。

確か、仲間に着替えを見られた時だ。

その時はそいつをポッコボコにしてやったが。

「アニエス」

「な、何だ？」

「その……似合ってるな」

「……………」

何か言おうと迷っていた矢先にこれか。

ちよつと乙女心を刺激してくる言葉だが、オレは未来人。

そう簡単にお前に攻略される程、ちよろい女ではないぞ！

「それより、こんな所でどうした？」

「セシリアと約束があつてな。断るのもあれだし」

「セシリアならもうすぐ——」

「いーちかつ♪ とう！」

織斑の後ろから鈴が走ってきて、飛び上がる。

流石の跳躍力で織斑の肩に飛び乗った。

うむ、軽量級は伊達ではないようだ。

「うわっ、とと。鈴!? いきなり飛び乗るんじゃねえよ」

「おー、高い高い。遠くまで見えるわね」

これが幼馴染みであるが故の遠慮の無さだというのだろうか。

むしろ鈴だからこそできる芸当と言うべきか。

「その歳で恥ずかしくらないのか、鈴」

「アニエス、まだここにいたんだ」

「織斑に見られてしまったがな」

「似合ってるし、いいじゃん」

そういう理由ではないのだが。

「え、何か俺に見られたらまずい事があったのか？」

「昔、似たような経験をしてな」

「??」

「その時殴ってやった男の顔が甦るのだ」

「ひっ」

ポキポキと手の間接を鳴らして見せると、ふたりは予想以上に引いてしまった。

「そんな顔をするな。織斑にはそんなことはしないさ」

その男は完全に下心丸見えだったからな。

あのロリコンめ。オレの下着姿を見て鼻の下を伸ばしていやがった。

その後どうなったか聞きたいか？

教えてやろう。

そのロリコンはオレを見るだけで固まるほど『トラウマ』になったのだ。

「なんか、その……すまん」

「何故謝る。織斑にはそんなことはしないと云っているのに」

自分が唐変木であったことを救いに思うが良い。

「それはそうと、鈴。早く降りないとセシリアが来るぞ」

「セシリアが？　なんで——」

「あ、ああ、あ……り、鈴さん。何をしていますの!？」

「ほんとに来た」

どうも遅いと思っていたが、なるほど。

ビーチパラソルを取りに行つてたのか。

セシリアは織斑と鈴の姿を見て開いた口が塞がらないらしい。

「何って監視塔(ごっご)っ？」

「ごっごかよ」

「そうよ。だって私ライセンス持ってないし」

「そりゃそうか」

「わたくしを無視しないで頂きます!？」

オレがいるとも付け加えておこう。

「織斑。セシリアと約束していたんじゃないのか？」

「あ、ああ。そうだな」

「それではさっそく」

セシリアは嬉しそうにパラソルを砂浜に立て、シートの上に俯せに

なつて水着の上の紐を解いた。

「これは……」

セシリアの側には高そうなサンオイルが置かれている。いや、実際に高級な物なのだろう。

セシリアの持ち物は大体そんな感じだ。

「一夏さん。お願いしますわ」

「はっ？」

セシリアが織斑にさせようとしている事はわかる。

この状況を見れば誰でもわかるだろう。

シャルロットに便乗でもしたのか、セシリアも中々やる。

「幼馴染みはここまで積極的にはなれないか」

「わ、私だつてその気になれば、これくらい……」

自分がやられているのを想像したのか、鈴は顔を真っ赤にしてうつ向いてしまった。

これは当分無理そうだ。

そうしている内に織斑はセシリアの背中にオイルを塗っていく。

織斑の顔が赤くなっているのは気のせいではない。

と、二人の会話にこんなものが上がってきた。

「せ、背中だけでいいんだよな？」

「ふふっ。よろしければ……ま、前も——」

その瞬間鈴が飛び出した。

「ああ、もうっ！ じれったいわね！」

鈴は織斑からオイルの容器を引ったくり、雑にセシリアの背中に塗りたくっていく。

「ひゃっ、冷たっ?! り、鈴さん!」

「そりやそりやそりや……!」

セシリア情報だが、サンオイルは塗る前に手で温めてから塗らないと冷たいのだそうだ。

鈴はその手間をもの見事にすっ飛ばしていた。

「ああ! もう許しませんわ——」

『あ……』

鈴のイタズラに起き上がって拳を振り上げたセシリアだったが、その胸部には水着が装着されていない。

つまり、上半身丸出しで起き上がってしまったのだ。

「……………」

そんなセシリアの姿を見てしまった織斑は先程に増して頬を染め、『俺は何も見えてない』と言わんばかりにそっぽを向いている。

「い、一夏さん……………」

「な、なん——だあ!？」

セシリアの強烈な右ストレート（ブルーティアーズ部分展開済）が織斑を突き飛ばした。

Episode. 20

セシリアは織斑を殴った後、顔を真っ赤に染めたまま逃げて行って鈴を追いかけて行ってしまった。

パラソルやシートを置いて行って。

「いてて……」

「大丈夫か、織斑」

「ああ、大丈夫だ」

確かに大丈夫そうだ。

セシリアの荷物は後で本人が取りに来るだろう。

「さて、戻るとするか」

「え、アニエスは遊ばないのか？」

「あまり素肌を晒すのは好きじゃないんだ」

「せっかく似合ってるのにな」

「その言葉だけで十分だ」

と言いつつ、本心はセシリアと鈴、そしてどこかにいる箒に見つか
らないように逃げるためだ。

遊ぶならもつとゆっくりできる時間がほしいからな。

「ここなら誰もいないかな……」

織斑と別れ、制服に着替えてからオレは中庭に来た。

「監視ならもつと上手く出来るだろう。篠ノ之博士？」

「ふくん。気付いてたんだ？」

ひよこんと木の陰からウサミミが生えた。

「もちろん。水着に着替えてる時もな」

そして稀代の天才が姿を表した。

服装はまるで不思議の国のアリスの様だが、頭にはウサミミと小さな王冠。

アリスとウサギと女王が混ざった、メルヘンかつカオスな容貌だった。

「君が未来人かく。案外普通だね」

「その普通の未来人に、ご自慢の無人機をひとつ撃墜させられているのは何処の天才だったかな」

オレの挑発に篠ノ之束の眉が小さく動いたのがわかった。

「まあ、君が倒したのは援護型だった訳だし、あの程度を倒した所でこの束さんの計画に狂いなんて生じないよ」

オレは自然と身構えていた。

目の前で悠々と語る天才からは、かつての戦場で感じた事のある敵意——殺気を感じていた。

全身の血が廻るような感覚が、忘れかけていた戦闘の日々を思い出させてくれる。

「言いたいことはそれだけか？」

「まさか。私は君に忠告をしようと来たんだよ」

「忠告？」

次の瞬間、目の前に握り拳が迫る。

「——っ!？」

それを受け流し、寸での所で直撃を避ける。

『あまり邪魔をすると痛い目に会うぞ』 ってね」

ドスの効いた声がオレの耳に届く。

先程まで聞いていた束の陽気で掴み所の無い声ではなく、明確なものも
のが籠っていた。

「オレなんかが博士の計画の障害になるとは光荣だ」

今日この期間に態々忠告しに来たということは、今回の件も博士の計画ということだろう。

IS学園の臨海学校期間中と数日後。

この間で四つの大きな事態が引き起こった。

ひとつ、篠ノ之箒が第四世代型の専用機を手に入れたこと。

ふたつ、アメリカの軍用ISが何者かの手によって暴走させられたこと。

みつつ、織斑一夏の白式が第二形態移項を果たしたこと。

よつつ数日後にとあるテロ組織が壊滅したこと。

二つ目までは博士の計画の一部だと考えて間違いない。

どちらも博士でなければできないことだからだ。

四つ目に関しては誰かがその光景を見ていたと伝えられていたから。

「しかし解せないな。何故、博士は戦争を起こそうとする？」

「戦争？」

「知らないのか？ オレがいた未来ではISによる戦争が勃発していったぞ？」

「……………知らない」

長い『間』だった。

もしかして——いや、もしかしなくても戦争を起こす気はないのか？

博士は今の一言から何も話さなくなってしまった。

もし博士では無いとしたら、ISによる戦争の原因を作り出した着火点は誰だ？

そして博士は何故無人機を作ったのか。

無人機で事件を起こし、全世界に向けて登録されていない新しいコアがある、もしくはそれを作ったということを知らせるためではないのか？

「——えろ……」

「ん？」

「教えろ。そんな事を起こした奴を。その名をつ！」

突如、博士の表情が豹変。

オレですらたじろぐ程のものだった。

「残念だが、オレも知らない。だからオレは戦争を未然に防ぐためにそいつを探してたんだが……」

まさかそれが篠ノ之束ではなかったとは。

博士を出し抜く程の情報統制と改竄能力を有しているとすると、その人物はある程度——いや、かなり有名はずだ。

この時代、最近有名になり始めたという可能性もある。

最近、織斑を強くするだけでは戦争は免れないということがわかってきた。

初めの頃と比べると、その成長には目を見張る物があるが、歴史はそれほど変わっていない。

博士がここに来たのも、箒に専用機を譲渡するためというのが目的なのだろう。

オレに忠告というのはあくまでついででしかないはずだ。

「博士がISの戦争を望んでいないと言うなら、協力を頼みたい」

「ん？ 何でこの私が君に協力しなきゃいけないのかね？」

「しなきゃならないのではなく、これは頼みだ。博士が嫌だと言うなら、それは仕方の無いことだ」

しかし博士が協力してくれるのなら、オレの目標にぐんと近づく事ができる。

今のオレの立場では裏社会の情報を得るのは難しい。

楯無に頼むという手もあるが、手の届かないところもあるだろう。

そもそも楯無がオレの言うことを信じてでも更識全体が信じるとは限らない。

「まーいいいかなー。束さんはとても忙しい身だから、面倒な事は君に任せればいいし」

「それを本人の前で言うのか？」

「え、嫌なの？」

「協力してくれるなら喜んで」

「そっか、そっか。じゃーよろしく『ミーちゃん』」

「ミーちゃん？」

「未来人ってことだよ」

「アニエスという名前があるんだ」

「じゃあアミちゃんていいよ」

「アニエスで頼む」

「頼むってことは断ってもいいんだよね？」

「はっ、しまった！」

博士のオレに対するあだ名は『アミちゃん』になった。

「IS学園って本当に羽振りがいいな。しかもこれ、本わさじやないか！」

少し離れた場所で、織斑が夕食に歓喜の声をあげていた。臨海学校ということで、夕食は海鮮が主になっている。

オレはあまり日本食——特に魚を食べた事がないので、織斑が言っている『本わさ』も知識としてしか知らない。

「アニエス。本わさとはなんだ？」

オレの隣で、ラウラが織斑の言葉を聞いて皿の隅に乗っている緑色の物体（本わさだが）をつついていた。

「IS学園でも織斑がワサビを使っていたら？ あれはワサビに似せた物で、本物のワサビと味の似た別の物を混ぜて作ったものだ。そして『本わさ』というのは、本物のワサビだけを擦って作った……単純に言う『100%ワサビ』だ」

「ふむ。では、『ワビサビ』とはなんだ？」

「は？ ワビサビ？」

「つい先日、嫁に聞いたのだが、どうもワサビの種類ではないらしい」
それはそうだ。

「ワビサビがワサビと響きが似ているのは同意するが、ワビサビとは質素で静かな物のことを表す、日本の美意識のひとつだ」

つまり、決して食べ物の名前ではない。

「そ、そうだったのか……」

説明してやると、顔を赤くしてうつ向いてしまった。

そう恥ずかしいことじゃないぞ、ラウラ。

誰でもワサビとワビサビが似てると思うはず……多分。

「そ、それより。嫁は……一夏はワサビが好きなのだろうか」

「ふむ。あの様子を見る限り嫌いではないようだが。下手に食べると

――

「じゃあ、これが本物のワサビなんだ？」

ラウラと織斑の方を伺っていると、あろうことが、シャルロットがワサビを山のまま口にした。

「つ~~~~~~~~!!」

案の定、鼻を押さえて涙目になっている。

「そのまま食べると、あのようになる」

「き、気を付けて食べるとしよう」

そうしてラウラは恐る恐るワサビに手をつけた。

ひとつまみワサビを取って、刺身と共に食べる。

「ちよつと辛い……」

「あー！ セシリア何してんの！」

突然、女子の一人が声をあげる。

その声に反応した周囲の者たちが、セシリアの方に視線を向ける。するとそこには、織斑に『あーん』をしてもらっているセシリアがいた。

「ずるい！ セシリアずるい！」

「ず、ずるくありませんわ！ 隣の席の特権です！」

「それがずるいって言うてんの！」

途端に辺りが大騒ぎになっていく。

「ここら。そんなに五月蠅くしていると、鬼が――」

「お前たちは静かに食事することができんのか！」

その声に場の全員が凍り付いた。

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。50キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！ とんでもないです！ 大人しく食事をします！」

そう言つて各自の席に戻っていく。

それを確認してから、千冬さんは織斑の方を見た。

「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「は、はい」

そして鬼は去っていく。

流石の迫力であった。

「ん、お帰りだな。ラウラ」

「う、うむ。それよりアニエス。この後、時間はあるか？」

「あるが……、何だ？」

「セシリアめ、どこへ行く気だ？」

「部屋では身嗜みを整え、高級な香水をつけていたようだ。そんなおめかしをするのだから、十中八九織斑の所だろう」

「しかし、ここより先は教員の部屋しか……」

「知らないのか、ラウラ。織斑は織斑先生の部屋に泊まるのだぞ？」

「そうなのか!？」

と、そんなやり取りをしながらオレとラウラはセシリアを尾行して
いた。

案の定、セシリアは織斑姉弟の部屋に到着する。

しかし、扉の前に誰かがいた。

「な、何をしていますの。あなたたち」

「いや……」「これは」「その……」

箒、鈴、であった。

「お前たちも来ていたのか」

「アニエス、ラウラ!？」

「どうしてここにいますの？」

隠れる必要は無いと出ていくと次の瞬間、何か扉の向こうで何か

あったのか、先の二人が耳を当て始めた。

「いったい何を——」

「しっ、静につ！」

仕方がないので、オレも扉に耳を当ててみた。

『千冬姉、久しぶりだからちよつと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！ す、少しは加減をしろ……』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！ そ、そこは……やめっ、つうっ!!』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだし、ね』

『あああっ!』

……………。

「こ、こ、これは、一体、何ですの……?」

何と聞かれれば、まあ。アレに聞こえる訳だが。

更に言えばこのままここにしていると不味いわけで。

「……………」

鈴も箒も、ずーんと沈んだ表情をしている。

その様子はまるでお通夜さながらだ。

『じゃあ次は——』

『一夏、少し待て』

ふたりの声が途切れ、オレとラウラは危機感から扉から離れる。

バンツ!!

「へびっ!!」

思いつきりドアに殴られ、反射的に漏れた箒、鈴、セシリア三人の
声は十代女子にあるまじき響きをしていた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「さ……さきようなら、織斑先生っ!!」

脱兎のごとく逃げ出す三人。

しかし、鬼の追っ手からは逃げられない。

箒と鈴は首根っこを捕まれ、セシリアは浴衣の裾を踏まれて降参し

た。

「ちようどいい。お前たちも入れ」

『えっ?』

その場の全員が同じ反応をした。

「ああ、そうだ。もうひとり——デュノアも呼んでこい」

「は、はいっ!」

首根っこを解放された鈴と箒は駆け足で呼びに行く。

オレたちはずれた胸元を正すセシリアと一緒に部屋へと入った。

「あれ、セシリア。遅かったな——つて、お前らも来たのか?」

部屋に入ると、そこには布団がひとつ敷かれていて、その脇に織斑が座っていた。

この姉弟、何をしているのか?

Episode. 22

状況を推理するに、織斑が姉にマッサージをしていたらしい。

因みにセシリアがこの部屋に来たのも、織斑に呼ばれたからなのだろうだ。

呼ばれた方は何を考えていたのか知らないが、織斑はマッサージをしてやるつもりだったらしい。

つい先程セシリアのマッサージをしていが、その途中で織斑先生に下着を晒させられた。

織斑先生の言う通り年不相応の物だった。マセガキめ。

「お前はもう一度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「ん。そうする」

そうして織斑はタオルと着替えを持って部屋を出ていった。とりあえず「くつろいでくれ。って、難しいかもしれないけど」と言い残して。

「……………」

そしてその言葉通り、どうしていいのかわからない女子が五人、言われたまま座ったところで止まってしまっている。

これはオレが動かなければならないのだろうか。

「おいおい、葬式か通夜か？　いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……………」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……………」

「は、はじめてです……………」

この場で落ち着いていられるのは、オレを除いてラウラだけだった。

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ之、何がいい？」

いきなり名前を呼ばれて、箒はびくつと肩をすくませる。

言葉が出てこないようだ。

そうこうしていると織斑先生は旅館の備え付けの冷蔵庫を開け、中

から清涼飲料水を六人分取り出ししていく。

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶、ミルクティーだ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

そう言われたものの、順番に箒、シャルロット、鈴、ラウラ、セシリア、オレと受け取った全員が渡されたもので満足だったのか交換会は開かれなかった。

「い、いただきます」

皆が次々に口を付けていく中、オレだけは何かの意図を感じ取って飲まずにいた。

「どうした、アロン。お前も飲め」

「はあ。いただきます」

そんな様子を織斑先生に見つかってしまった。

悪意は無いだらうから、大丈夫だろう。

「飲んだな？」

織斑先生が言った瞬間、オレは心の中で『やっぱり』と呟いた。

「は、はい？」

「そ、そりゃ、飲みましたけど……」

「な、何か入っていましたの!?!」

「失礼なことを言うなバカめ。なにちよつとした口封じだ」

そう言いながら織斑先生は冷蔵庫から新たに星のマークがキラリと光る缶ビールを取り出した。

プシュツ！ と景気のいい音を立てて飛沫と泡が飛び出す。

それを唇で受け取って、そのままゴクゴクと喉を鳴らした。

「……………」

周りが唾然としている中、織斑先生は上機嫌な様子でベッドにかける。

「ふむ。本当なら一夏に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

いつも規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物とが一致しないようで、オレ以外の五人はほかんとしている。

特にラウラは魚のように口をパクパクして言葉を失っている。

「おかしな顔をするなよ。わたしだつて人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイル飲む物体に見えるか？」

「い、いえ、そういうわけでは……」

「ないですけど」

「でもその、今は……」

「仕事中なんじゃ……？」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

そう言つて織斑先生——いや、千冬は、全員の手元をぎつと流し見る。

そこでやつと飲み物の意味に気付いて「あつ」と声を漏らした。

「こんな事せずとも、別に言いふらしたりしないのに」

「なら好意として受け取っておけ」

何が嬉しいのか、ニヤニヤと笑っている千冬。

「さて、前座はこのくらいでいいだろう。そろそろ肝心の話をするか」
二本目のビールをラウラに言つて取らせ、また景氣のいい音を響かせて千冬が続ける。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

あいつ、と言つてはいるが全員が誰を指しているかわかっていた。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちてるのが腹立たしいだけですので」と、ラムネを傾けながら箸。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もぐもぐと言う鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

マッサージの時の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれつとそんなことを言う千冬に、三人はぎよつとしてから一斉に詰め寄つた。

「「言わなくていいですー！」」

その様子をはっはっはつと笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「僕——あの、私は……やさしいところ、です……」

ほつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささは裏腹にそこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでもやさしいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちよっと、悔しいかなあ」

あははと照れ笑いをしながら、熱くなつた頬をぱたぱたと扇ぐシャルロット。

なんだかその様子が羨ましいのか悔しいのか、前述三名はじーっと押し黙ってシャルロットを見つめた。

「で、お前は？」

さつきから一言も発していないラウラに、千冬が話を振る。

どうもそれ自体は警戒していないようで、ラウラはびくつと身をすくませながらも言葉を紡ぎはじめた。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

にべもない。何でもないことのように言う千冬に、珍しくラウラは食つてかかった。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

そうかねえ……と言う千冬は、二本のビールを空ける。

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい」

そうだろ、オルコット？ と話を振られたセシリアは、赤い顔をしてうつむき、頷いた。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

え!? と全員が顔を上げる。

『く、くれるんですか!?!』

「やるかバカ」

ええ……と心の中で突っ込むオリムラヴァーズ。

「女ならな、奪うくらい気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

三本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情で続ける。「ところで、その傍観主義者はどうなんだ？」

「オレですか？」

予想外の展開にオレは戸惑ってしまふ。

いや、何故オレに聞く？

他五人はともかく、オレが織斑をどう思っているのかは千冬も知っている筈だろうに。

「まあ、好きかどうかで言えば好きなんですけど」

面と向かって話すのが照れ臭くなって、頬をかきながら目線をそらす。

「あえて言うなら『憧れ』です。ラウラとは少し違う意味での彼の強さに、オレは憧れています」

空になったペットボトルをゴミ箱に捨てる。

ああ、酒が飲みたい。美味しそうに飲む千冬を見ていたら、昔一度だけ飲んだ事があるのを思い出した。

当時の記憶はないのだが。

「ん、皆どうかしたか？」

ラヴァーズたちに何故かため息をつかれてしまった。

そして千冬がため息混じりに言う。

「まったく、お前と言う奴は」

オレは冷蔵庫の中から缶を取り出して千冬に手渡す。

その際「年齢を考えてもみろ」と小さく呟いた。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をする。

一学年全員がと並んでいるだけあって、かなりの人数になっている。

今いるのはIS試験用のビーチで、四方を切り立った崖に囲まれていて秘密のビーチのようだが、ドーム状の設計のためか学園のアーリーナを連想させた。

ここに搬入されたISと新型装備のテストが今回の合宿の目的で、当然ISの稼働を行うので全員がISスーツ着用姿だ。

「ああ、篠ノ之。お前はちよつとこつちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒は、千冬さんに呼ばれてそちらへと向かう。

理由は大体想像がつく。何せこの場所には篠ノ之博士がいるのだから。

「オレたちはさつさと試験を始めよう。まずは……」

リストの中から打鉄専用装備『荷電粒子砲』を見つける。

「これから始めようか」

『はい』

いつの間にかオレが実行委員のようになっていたが、それも当然と言えば当然かもしれん。

しかし、荷電粒子砲とはまた打鉄のデザインには似合わない武装を送り付けてきたものだ。

しかも打鉄専用装備ときている。

そういえば簪の『打鉄式式』にも荷電粒子砲が搭載されていたが関係があるのだろうか。

「他はスナイパーライフル、パイルバンカー、ガトリングとあるな。これは――」

「ちーちゃん~~~~ん!!!」

ずどどどど……! と砂煙を上げながら人影が走ってくる。

その声はオレがつい昨日聞いたものだった、

「……束」

立ち入り禁止という看板をも無視して、篠ノ之博士は堂々と臨海学校に乱入してきた。

「やあやあ! 会いたかったよ、ちーちゃん! さあ、ハグハグしよう! 愛を確かめ——ぶへっ」

飛びかかってきた束さんを片手で掴む。

しかも顔面に思いつきり指が食い込んでいた。

骨が軋む音がしてるのは気のせいではない。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そしてその拘束から抜け出す博士。

よっ、と着地をした束さんは、今度は箒の方を向く。

「やあ!」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、箒ちゃん。特におっぱいが」

「がんっ!」

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた! ひどい! 箒ちゃんひどい!」

博士は頭を押さえながら涙目になって訴える。

それより箒、どこから日本刀を出した?

「ねえ、あれって……」

「篠ノ之束博士、だよね?」

「うそ……本物?」

女子たちが乱入者を見て騒ぎ始める。

それを見かねた織斑先生が、博士の頭を叩く。

「束、自己紹介くらいしろ。生徒たちが混乱してるではないか」

「えー、もう。面倒臭いな」

渋々と博士が皆の方へ向き直る。

「やっほー。私が天才の篠ノ之束さんだよー。はい終わり」

——早っ！

全員がそう思ったことだろう。

そして直ぐに背を向けようとした時、博士と目があった。

(やあ、アミちゃん。昨日ぶり)

声を出さずに口を動かして、博士は背を向けた。

オレとの関係は他言無用という事だろう。

オレとしても博士が味方についたということは秘密にしておいた方が色々都合がいい。

「ではでは、久しぶりの箒ちゃんに東お姉ちゃんからのサプライズプレゼント！」

嬉しそうに顔を歪めて博士がりモコンを取り出して操作する。

すると上空から、エンジンの形をした物が降ってきた。

地響きを上げて地面に突き刺さったそれは真つ二つに割れて中からコンテナが出てくる。

さらにコンテナは自動で口を開けて、中に入った物を吐き出した。

「(紅椿……)」

オレは誰にも聞こえないくらい小さく呟いた。

実物を見るのは初めてだ。

紅椿は完成した第四世代型ISの一号機で、この機体には白式の雪片型式と同じ『展開装甲』の技術が使われており、この時代のISの性能を凌駕していた。

この後は福音の暴走と白式の第二形態移行が待っている。

教師陣、及び専用機持ちたちは暴走事件に駆り出される。

極秘とされていたこの件は、織斑一夏と篠ノ之箒の手によって無事処理されたと記録に記されているが、実際は一度失敗していたらしいのだ。

詳しくは知らないが、作戦行動中に何かあったに違いない。

そしてオレが成長の針を進めた織斑が作戦を無事成功させること

ができるのか。

心配なのは他勢力の動きだ。

臨海学校前日の事。楯無から嚴重注意されていた。

織斑一夏の出現により生まれた『ISは女の物だ』と主張する勢力の中で過激派の者たちが動いているとのこと。

オレが何故そうなったのかと訊ねると、どうやら織斑の実力が彼女たちの予想を上回っていたらしい。

はじめは監視するだけに留めていたが、武器を調達し始めていたとか。

おそらくと言うまでもなく、オレのせいだ。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

山田先生が顔を青ざめながら走ってきた。

いつも慌てている山田先生だが、今回はその様子が尋常じゃない。きっと福音の暴走事件の件だろう。

「どうした？」

「こ、こっつ、これをつ！」

渡された小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた——」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、ひとり欠席していますが、それ以外は」

なにやら、織斑先生と山田先生は小さな声でやりとりをしている。

しかも、数人の生徒の視線に気がついて、会話ではなく日本の軍部の手話で話し始めた。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。——全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生はパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼

働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゆ、中止？　なんで？　特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、一同はざわざわと騒がしくなる。

しかしそれを、織斑先生の声が一喝した。

「とつとに戻れ！　以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！　いいな!!」

「はっ、はいっ！」

全員が慌てて動き始める。

接続していたテスト装備を解除、ISを起動終了させてカートに乗せる。

その姿は今までに見たことのない怒号に怯えているかのようでもあった。

「専用機持ちは全員集合しろ！　織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！　——それと、篠ノ之も来い」

オレは当然部屋で待っているつもりはない。

と、皆と別れて単独行動をしようとした気付かれないように離れた矢先、オレは強く腕を引かれた。

「昨日の今日だけど、頼まれてくれないかな？」

「何をですか？」

「旅館の守護」

「では、やはり？」

「私やちーちゃんやんは下手に手を出せないから、過去を調べられない君に任せるよ。だから、はい」

博士はそう言つてオレの手にナイフと拳銃を持たせてきた。

「よくもまあ、こんな物を」

「私にとってはただの脅しの道具にしかないよ。でも弾丸は入ってるからね」

と、オマケとばかりに予備のマガジンと弾丸を渡してくる。

つまり敵はある程度の数がいるということだ。
あまり少くはないらしい。

Episode. 24

旅館の屋根の上にオレはいる。

そこから、持ち出したIS用スナイパーライフルのスコープで水平線を見つめていた。

次に山の方をしてみる。……人の気配はない。

「や、アミちゃん♪」

「博士……。会議は終えられたんですか？」

「うん。私の計らいで、箒ちゃんといっくんの二人で作戦を開始するって。計画通りだぜい」

確かにISの性能や特性を見れば、適切な選択と言える。

しかし問題は操縦者だ。

織斑に関しては油断さえしなければ、今回の作戦は上手くいくだろう。

しかし、箒はどうだろう。

博士の計画通りなら、この作戦は失敗する。

その理由は知らないが、どうもそんな気がするのだ。

「ふーん。様になっててカッコいいね、アミちゃん」

「弱冠16歳とは言え、傭兵ですから」

次の瞬間、実習の場所から二機のISが飛んでいった。

もちろんのこと、織斑と箒である。

「まったく、世界をかき乱してくれる」

「そうかな？ ISを戦争の道具にしようなんて考えてる奴よりはマシだと思うけど」

「それはそうですが……」

そうこうしている内に、紅と白のISは水平線へ向かっている。

スコープ越しに、箒の顔が見えた。

「笑ってる」

「いっくんと肩を並べて戦えるようになって、嬉しいんだね」

「失敗しますよ、あれでは」

「未来の知識ってつまらないね」

「でも知っている以上。そうならないように足掻くことはできます」
「そうだね」

博士と話をしながらも、オレはスコープから目を外さない。

倍率を上げて遠方を見渡すと、高速で空を飛ぶISを発見した。

軍用に作られたIS『銀の福音』だ。
シルバー・ベル

広域に攻撃ができる銀の鐘がもっとも特徴的で、軍用ということもあってその性能は競技に持つてくるとしたら反則レベルだ。

「さて、こつちの方は……」

海に背を向け、次は森の方を見渡す。

人の気配はない。

「まだ姿を見せはしないか」

「あの二人が失敗するのが本当なら、その時だと思うよ」

「ぐもつとも」

それから誰の気配もなく、しばらくして織斑と筈が作戦に失敗したと旅館の中が騒がしくなってきた。

襲撃者は未だに現れない。

博士はいつの間にかどこかへ姿を消し、オレは織斑の様子を見にその場を離れた。

織斑は意識を失っているらしい。

寝かされている部屋の方へ向かっていると、目的の部屋からぞろぞ

ろとオリムラヴァーズが出てきた。

彼女たちの目から織斑の敵討ちをしようという気持ちが読み取れた。

「む、アニエスか？」

「ちよつと、アンタは部屋で待機中のはずでしょ？」

「こつちも見逃してやるから構うな。オレはお前たちとは行けないから、せめてこれだけの事はやらせろ」

そう言われてはと、五人はオレを責めようとはしなくなった。

オレの援護は期待していなかったようで、アイコンタクトをしてから五人は去っていった。

「カードはまだ揃っていない」

紅椿は現れた。しかし雪羅はまだ現れない。

部屋に入り、織斑の側に座る。

「織斑、早く目を覚ませ」

そんなにこの場所に立ち寄っていられる訳ではない。

織斑が倒れたという情報を受けて、博士が言っていた組織から派遣された奴等が動いているはずだ。

ふと窓の外を見てみるが、まだいない。

「こんな所で寝てて良いのか？ お前を想っている奴等は皆戦いに行ってしまったぞ」

そしてオレもまた戦いに行かなくてはならない。

そういうことなら、専用機の件も考えなくてはならない。

これからISによる戦争を引き起こす奴を止めなければいけないのだ。

もちろん向こうもISを所持していると考えた方が良い。

「織斑、お前は強い。だがまだ足りない。せめてオレに勝てるくらいを目指せよ」

オレがまだ10歳だった時の出来事を思い出す。

それはオレが織斑一夏が白式を操り、一度に三機のISを倒した時のことだ。

オレはそれを見て、織斑の強さに憧れたんだ。

「織斑さん……。——っ!？」

先程まで誰もいなかった窓の外の風景。だが動く人影のような物に気が付いた。

「ここまでだ。オレはオレで戦わなくちゃならない。お前はお前の守るべき者たちを守れ」

急いで屋根の上へ戻り、ライフルを構え直す。

敵の総数はざっと15人。ISを装備している奴は見当たらない。

「専用機持ちがいなくなった今がチャンスという訳か。だが……」

サブマシンガン、アサルトライフルなどなど。

そんな武装をした奴らに遠慮をする必要はないよな。

「ここから……」

スコープの中に敵の一人を捉え、トリガーに指をかけ、引く。

「出てけえっ!」

重い大きな音が響き、足に命中する。

使ったライフルがIS用の物だっただけに、着弾点は見事に吹き飛ばぶ。

「威力が強すぎるっ」

撃った反動で激痛が肩を貫いた。

オレは制服の中に隠していた銃を引き抜き、あらかじめ用意していたフード付きの黒いコートを羽織る。

これは誰にも素顔を見られないように用意したもので、敵は勿論のこと旅館にいる誰にもオレの姿を見られてはならないのだ。

敵はオレが屋上にいるのを見つけ、発砲してくる。

が、どれも当たらない。

「はっ、素人か」

オレは背の高い木に跳んで、それを伝って地面に降り立つ。

敵は再び発砲してるがオレには当たらない。

「下手くそどもめ。弾の無駄撃ちだ!」

右手に拳銃、左手にナイフを持って走り出す。

掠らせもせず弾丸の中を掻い潜り、敵がこちらの射程圏内に入る。

「まず、ひとり」

パンツ！ と、乾いた音。敵のひとりが倒れる。

「もらった！」

次の瞬間、背後に別の敵が現れる。

サブマシンガンを持った奴だ。

背を低くして地面を蹴り、接近、一閃。

ナイフの刃が敵の腕を切り裂く。

激痛に敵は武器から手を離してしまい、代わりにオレが拾う。

「しま——っ」

その先は聞こえない。

なぜならオレがサブマシンガンの引き金を引いたから。

オレの戦闘能力を警戒してか、一旦攻撃が止む。

「お前たちは何者だ。頭は誰だ！」

パスンツ 小さな音が鳴り、オレの右肩を弾丸が貫いた。

ナイフは既にしまっていたが、奪ったサブマシンガンは落としてしまふ。

「くそっ！」

発砲音は聞こえたという事は、あまり遠くにスナイパーがいるわけではないらしい。

とりあえず右肩を使えなくなってしまった。

「一斉掃射だっ」

合図と共に敵全員が姿を現し、銃口をこちらに向ける。

オレは再び背を低くして地面を蹴る。

しかし先程と違うのは、持っていた拳銃を上空高く放り投げていること。

放り投げた物に一瞬とは言え、敵はそれに気を取られる。

その隙に懐に飛び込み、正拳突きで相手突き飛ばし、放物線を描いて飛んできた拳銃をキャッチ。

引き金を引く。

銃口を別の敵へ向けて引き金を引く。

引く。引く。引く。

……………。

「ハア……ハア……。はあく」

オレはそれから敵を駆逐するまで、一言もしやべっていなかった事に気が付き、ようやく終わったと溜め息をついた。

「いっ——。これは、何も無かったじゃ済まないな」

「アロン！」

遠くから、織斑先生の声が聞こえた。

銃撃の音が届いてしまったようだ。

「大丈夫か、アロン！」

やがて織斑先生が青い顔をしてオレに駆け寄ってくる。

オレは安心感と疲労からその場に力無く膝を付いた。

織斑先生が受け止めてくれ、オレはその腕の中で意識を手放した。

「傷はもう大丈夫？」

簪が心配そうにオレの体に巻かれた包帯を見つめる。

臨海学校で右肩に受けた傷は、跡は残るものの痛みは無い。

オレが負傷した事は本音から楯無、やがて簪の耳にも入ったらしく、オレが未来人である事も簪たちにバレてしまった。

「もう大丈夫だ」

暴走IS事件は歴史通り解決された。

負傷者はゼロで、オレが殲滅した敵の事は極秘事項に加えられ、表沙汰になる事はないだろうとの事。

そして奇々怪々な事に、白式に乗って戻ってきた一夏の体には、福音に受けた傷がひとつもなくなっていたと聞く。

まさかパイロットの傷を治療するとは。

いやはや、ISの自動進化プログラムとは凄い物だ。

「さて、では行ってくる」

八月、IS学園は遅めの夏休みに入る。

そのせいで、世界中からやだてきた学園生はその半分が帰省する。

オレにはそもそも帰省する場所など無いのだが、先日の負傷により今のオレには力が必要だと判断した。

よって、不本意ながら専用機の件を受けることにしたのだ。

オレに専用機を用意してくれたのは『ダダリオ・ネクスト社』と言う所だった。

楯無に聞いた所によると、どうやら変わった会社らしい。

どう変わっているのかと訪ねると『他の会社とは違った発想を元に開発している』と答えられた。

独特の設計で開発するのは当たり前ではないのか。

そもそも有名な会社なら未来にもその名は届いているはず。

オレが知らなかったという事は、マイナーな会社なのだろう。

と、考えを巡らせながら専用の飛行機でフランスへ飛び立つ。

そしてオレはその中で夢を見たのであった。

「へえ、こいつがアンタらの娘か」

オレの事をジロジロと見てくる男たちのひとりがそう言った。

「アリエル婆さんの若い頃の写真見たことあるけど、瓜二つじゃねえか」

これはオレが初めて傭兵集団の基地に訪れた時の記憶だ。

そして初めて銃を撃った時の記憶でもある。

当時のオレは6歳。

そんなチビが初めて撃った拳銃で次々と的の中心を撃ち抜いていった時の傭兵仲間たちの驚きの表情と言ったら、それはもう傑作であった。

「射撃の天才って奴だな」

誰かがそう言った。

実際オレはその時点で、基地の射撃レコードを大幅に塗り替えていたのだ。

オレは8歳になり、傭兵仲間と共に初の任に付いた。

スナイパーとしての役割だったが、子供が前線に出れるかと言ってしまえば答えは明確である。

狙撃は基本的に只スコープの中に敵を捉え、引き金を引くだけでいい。

敵が複数なら誰を最初に狙うべきか、それはスナイパーのオレの判断にかかっていた。

だが、オレの初任務はとてもあっけなく終わった。
オレが初っぱなから本丸を撃ち抜いてしまったからだ。
頭を失った敵は浮き足立ち、その隙に仲間たちが攻め込む。
オレも狙撃で援護をする。

やがて任務を果たし、オレは仲間全員から頭をわしゃわしゃと強く
撫でられた。

「……………うむ？」

飛行機が地面に着地した振動でオレは目を覚ました。

荷物を持って飛行機から降りると、オレを出迎えてくれた人物が二人。

「ようこそ、フランスへ。私は『シズ』、こちらは兄の『カーリー』」

シズは黄色いポニーテールで眼鏡をかけている。

カーリーはシズと同じ黄色い髪で、かなりの美少年である。

ただし『シャルル』には負ける。

「アニエス・アロンだ。よろしく」

「ええ、よろしく」

そう言つて、二人と握手を交わす。

カーリーは無口な性格らしく、一言も喋らない。

代わりにシズがダダリオ・ネクスト社について説明してくれる。

ネクスト社は、万能型のISを目指して開発していて、今までに開発したものは近接格闘型、遠距離狙撃型、全距離対応型など、足

掛かりを作っていた。

そして今回オレが乗るISは万能型の試作機らしい。

「では行きましょう」

車に乗り込み、30分ほどで駐車場に到着した。

そこから地下へと続く階段を降り、やがて大きな部屋に着く。

配線が床を這っていて、その奥にアルファベット三文字が書かれたコンテナが佇んでいた。

しかし先に『総督』に会うのだと言って先に進むことになる。

「ザハ様、アニエス・アロン様をお連れしました」

「来たか」

事務室と札の付いた部屋の前に、老人が座っていた。

その面影はまるで番人のようで、老人と言うよりは空手家師範と呼んだ方がしっくりくる。

「副社長のザハだ」

「アニエス・アロンだ」

「総督は今いらっしやらない。よって代わりに私が指示を出す」

ザハはオレの事を品定めするように眺めてくる。

下心は感じられず、寧ろ強いのかそうでないのかを見極められている気分だ。

「時間が惜しいのでな。さっそく始めるとしよう」

ザハの言葉に部屋にいた全員が返事をした。

自己紹介をされたが、その中で印象的だったのはナイスバディな『ミー』、ミーに下心を抱く『リリオ』、映画のワンシーンのような台詞を吐く『マズマ』、オレよりも年下の『ナフェ』であった。

髪の色もカラフルな連中で、ミーは紫、リリオは緑、マズマは赤で、ナフェはピンク。

同じ髪色ということで、マズマとは少し親しくなった。

が、彼は映画が好きらしく、始めに話してきた映画は『ビッグスナイプ』という題名のものであった。

正直、よく分からないのだが。

彼と雑談をしながらISの調整は進んでいく。

ISの名前は『アヴニール・ル』

和名：未来の歯車

形式：A c | C

世代：第三世代

国家：フランス

分類：高機動万能型

装備：近接ブレード『ルミエール』

可変式遠距離装備『ロックキャノン』

装甲：アーマメント装甲

仕様：高出力小型ウイングスラスター

アンチビームコーティング（ABC）コート

世界中のISの中で最も小さなISで、特徴的なのはその小ささとABCコートにある。

名前の通り対ビームコーティングを施されていて、印象的なデザインから『布製のIS』と呼ばれるらしい。

最も小さく最も軽い。だからこそその瞬発力や素早さが実現できるという訳だ。

また小型化したことにより、パイロットの脳波をより早く機体を送ることができる。

パワードスーツというより、小型飛行ユニットに見えるが、スラスターの瞬発力はイグニッションブースト以上に相当するようだ。

ロックキャノンはガトリング、キャノン砲、ライフルを基本に、カートリッジによって三つずつ様々な組み合わせを持たせることができる。

「なるほど、確かに独特の設計だな」

「一次移項が終わったら模擬戦だ。準備をしておけ、ミー」

「はい」

「どうやら模擬戦の相手はミーらしい。」

「ねえ、貴女。アロンって言ったっけ？」

「そうだが？」

「ふーん」

ルーの戦闘準備が終わり、ようやく模擬戦が始まったという所。

ミーの方から質問してきたくせに、即効で話を切り上げた。

ミーのISに名前は無く、彼女曰く分身だそうなので、ISの名前も『ミー』と称されている。

またシズにも専用機があり、こちらも名前は『シズ』。

他のカラフル組は全員メカニックらしい。

「じゃ、始めましょう……か！」

ミーは主装備の大斧を振り上げ急接近——振り下ろす。

ワンテンポ遅れたと反射的にスラストーを使い後ろに飛ぼうとすると、オレの予想を遥かに越えるスピードを發揮した。

「凄いわね。そのIS」

「ああ。とんでもない暴れ馬だ」

飛んだ勢いで体勢を崩し、膝を付けて10メートルほど地面を滑った所で止まった。

スラストーに火が付いた瞬間、バランスーがイカれてるのではないかと錯覚する程のスピードが出た。

本当にイグニッションブーストなど目ではない。

加速と言うよりは、緊急回避を極限まで切り詰めた代物と言える。

「じゃあ、次はこれよっ！」

ミーが斧を振り回す。

すると次の瞬間、衝撃波がオレの体を襲った。

「衝撃砲と同じ技術か」

「correct.正解。本当はこっちが開発した技術なんだけど、ねっ」

二、三と連続で衝撃波を繰り出す。

威力は甲龍のそれよりも高いが、衝撃波を撃つタイミングと角度は

読みやすい。

「こつちも武器は……こつ」

近接ブレード『ルミエール』

可変式遠距離装備『ロックキャノン』

「行くぞ、相棒！」

それぞれ左右に展開して戦闘体勢へ移項。

腰のスラスターを吹かして、ミーに急迫——一閃した。

「ぐっ!?!」

間一髪、斧で防ぐミーであつが、その表情に数秒前までの余裕はなかつた。

「侮るなよ。これでも代表候補生に推薦された身なんぞな！」

専用機が与えられるという事は、そういう事だ。

「このっ」

現在のオレとミーの距離はほぼゼロ。

ミーは斧を振り回すが、小回りの効くこちらのルミエールの方が有利である。

それを理解しているのだろう。ミーはルミエールの軌道をいち早く察知して寸での所でかわす。

だが、忘れていないか？

BRSの武器は近接ブレードだけではないということだ。

「カートリッジ——ガトリング！」

コールに反応して、ロックキャノンの砲身が変形し、ガトリングへと変わる。

「食らえっ——」

ゼロ距離で放たれる数えきれないほどの弾丸は、ミーの腹部に全て命中する。

「きゃあああ!!」

衝撃に耐えきれず、ミーの体が吹っ飛ぶ。

それでも、オレは撃つ手を止めない。

そのままルミエールを前方に突き出し、ガトリングを撃ち終わると同時にスラスターで再び急迫する。

「これで、終わりだー」

ブレードを突き出したまま突進し、その切っ先をミーの胸元へ突き立てる。

ダダリオ・ネクスト社のISには、全てにABCが施されているが、防ぐのはビームであって実弾のダメージはそのまま通るのだ。

絶対防壁が発動し、急速にミーのシールドエネルギーが削られ、やがてゼロになる。

「そ、そんな。まさか」

ミーは自分が負けた事に対して呆気に取られているようで、しばらく放心状態だった。

「おめでとう。さすがだな」

突如、声が響いた。

聞こえた方向へ視線を向けると、仮面を付けた白い髪の女性が拍手をしていた。

「誰だ？」

オレはルーを待機状態の『星形が彫られた銀色のプレート』に戻して向き直る。

ちなみにプレートには紐がついていて、首に掛けられている。

「私は……この社長……シング・ラブという」

「シング・ラブ？」

「ダダリオ・ネクスト社の社長の他に、歌手をしている」

「ああ、聞いた事はある」

40年後には懐メロとなってしまうていたが、数回しか聞いていないのにオレのお気に入りリストの中に入っていた。

シング・ラブは謎の歌手ということでも有名で、仮面をつけているのが特徴的だった。

確かISが開発されてすぐ後に人気が急上昇した歌手でもある。

まさかISの開発を手掛けていたとは。

「ルーはどうかね？」

「最適化をしても中々なついてくれないな」

「習うより慣れろと言うだろう？ 頑張りたまえ」

「無論、そのつもりだ」

「そうだ。フランスにはどのくらい滞在する気なのかな？」

何故そんな事を聞くのか？

「まあ一応、一週間の予定だ。だが、よかったら一日だけ自由行動をさせてもらいたい」

「構わんよ。では次にシズと戦ってもらおうか」

パチン！ とシング・ラブが指を鳴らすとゴゴゴという重い音が響き、ISを纏ったシズが現れた。

「では、始めるとしましょう」

これからオレの訓練の日々が始まる。

フランス滞在期間のある日。

オレはダダリオ・ネクスト社のロビーで思わぬ人物に出会った。

「すまない、この副社長に用があるのだが。君はこの社員かね？」

「いや、アニエス・アロンという。ルイ・シャルル・デュノアさん」

「アニエス……。そうか、君が」

ルイ・シャルル・デュノア。

デュノア社の社長にして、シャルロットの父親である。

オレが知っている彼は、とても家族想いの優しい男だったはずだ。

「こんな所でシャルロットの父親に会えるとは思っていなかった。ちやうど明日アポを取りに行こうかと思っていた所だったんだ」

「君がかい？ 何か用かね？」

「IS学園卒業後のシャルロットの処遇についてだ」

シャルロットが本来の性別と名前で再入学した事で、フランスの男子IS操縦者はいなかったことになる。

それはつまり政府を騙していた事に繋がるので、シャルロットは勿論の事デユノア社にも責任がある。

「シャルロットが本来の性別と名前で再入学した事を聞いた妻はカンカンだよ。IS学園を卒業したらどうしてくれようか、ってね」

「社長婦人は怖いな」

シャルロットは父親からの命令だと言ったが、それもそのはず。

いくら社長婦人が夫に命令しても、下の者に上の者が命令を下すという形は変わらない。

シャルルとしての入学は正妻の提案だったのだろう。

「僕にできる事は、なるべく妻の目が届かない所に避難させることしかないんだ」

ほら。ルイはシャルロットの事を考えている。

シャルロットは父親を冷たい人間のように言っていたが、現実はどうだ。

よかったな、シャルロット。

「そうでもないさ」

「どういう事だい？」

「部外者のオレは口出しできない。だが、ルイさん。アンタならできる。夫として。そして何よりシャルロットの父親として」

「アロン君……」

「未来で会ったアンタは家族思いだが、どこか寂しげな顔をしていた」
「だろうね」

「しかし、オレとアンタなら救ってやれるかもしれない」

そうしてオレはキーボードを叩く手を止め、使っていたパソコンの画面をルイに見せる。

「これは、ラファール……り、リヴァイヴァル？」

画面に写し出されているのはラファール・リヴァイヴァルの設計図だ。

「未来でデュノア社が作る第三世代型ISだ。疾風の復活。良い名前じゃないか」

一度別のISの傘下に収まったデュノア社はこのISを作って復活した。

別の会社の技術がまったく使われて言えば嘘になるが、八割以上はデュノア社の技術で作られている。

ラファール・リヴァイヴァルはまさにデュノア社の復活の象徴なのだ。

今すぐには作れないだろうが、シャルロットが学園を卒業するまでには余裕で間に合うだろう。

「何で君がこれを？」

「オレが未来で使っていたISだ。オレは今も未来でも、デュノア社のお得意さんだという事さ。どうだ、言い値で売るぞ？」

「ああ。買うよ。今の妻は社の保身と発展にしか興味がないんだ。これを餌に、シャルロットを救えるかもしれない——いや、救えるよ。きつと」

ルイはオレの手を取り、泣きながら感謝の言葉を並べていく。

やっぱルイはオレの知った通りの人だった。

この涙は本物で、子供の事で本気で泣ける親が悪党な訳がない。

それにルイはシャルロットという名前を子供につけたのだ。

正妻との子供ではなく、愛人との子供に。

その翌日、シャルロットからメールが届いた。
いったいフランスで何をしたのか。と。

「とんでもない事をしてくれたよ。アニエスは」
「そうか？ オレは人助けのつもりだったんだが」
オレが日本に帰ってくるなり、シャルロットはオレに詰め寄ってきた。

当然、未来人であることは隠さなければならないので『手助けをしただけ』という事になっている。

それはともかく、自分の父親が自分の事を想ってくれた事が嬉しかったようで、シャルロットはたまに「えへへ」と笑ってはそれを見ているオレに対して顔を赤くしていた。

「ありがとう。アニエス」

「それは何度も聞いたぞ」

「いくら言っても感謝しきれないんだよ」

「オレは約束を果たした。これでお前は正妻から無茶苦茶な要求をされる事なく、父親に甘えられるという訳だ」

するとシャルロットはまた「えへへ」と笑う。

「そろそろ私がいる事を思い出して欲しいのだが？」

ラウラが不満そうに告げてきた。

「すまない」「わ、忘れてた訳じゃないよ？ ラウラ」

オレたちは買い物をして町に出ている。

シャルロットは私服で、オレとラウラはIS学園の制服。

その理由はオレもラウラも私服がないからである。

あるとすればラウラの場合は軍服で、オレは傭兵時代に着ていた服だ。

当然、買い物する時に着て行っている服装ではない。

しかし制服とはいえ、シャルロットとラウラの容姿は目立つようで、周囲の評価は高い。

「ね、ね、あそこ見て。あの三人」

「うわ、すっごいキレイ」

「ブロンドの子も無茶苦茶可愛いわよね。モデルかしら?」

「そうなのかな? 銀髪と赤髪の子たちが着てるのって……制服? 見たことない形だけ」

「ばかつ。あれ、IS学園の制服よ。カスタム自由の」

「え!? IS学園って、確か倍率が一万超えてるんでしょ!」

「そ。入れるのは国家を代表するクラスのエリートだけ」

「うわ。それであのキレイさって、なんかズルイ……」

「まあ、神様は不公平なのよ。いつでも」

オレたちに注目している女子高生のグループが、声のポリウムを抑えることなく騒いでいる。

そんな風に盛り上がっている会話は、当然バスという狭い空間でオレたちの耳にしっかりと届いていた。

「……………」

シャルロットは少し頬を染めて俯き、ラウラはどうでもいいように車窓の外を見ていた。

しばらくしてバスを降り、シャルロットはバッグからなにやら雑誌を取り出して、それを案内図と交互に見ては何かを確認していた。

「最初は服から見えていって、途中でランチ。そのあと、生活雑貨とか小物とか見に行こうって思うんだけど、ふたりともそれでいい?」

「よくわからん。任せる」

オレもラウラも一般的な十代女子のことには疎い。

十代女子というのはオレたちも含まれるのだが、本当に分からないのだから仕方がない。

所でラウラは我が強い性格なのだが、シャルロットの言葉には特に抵抗なくすんなりと頷いている。

分からないことであっても行動は自分で決めるのがラウラという人間だと思っていたのだが。

シャルロットには何か言葉では言い表せない不思議な魅力があるのか、オレ自身もラウラと同じく彼女の言葉は優しくオレに届いてくる。

「で、アニエスはどっちがいい?」

「ん、何がだ？」

「私服はスカートとズボン、どっちがいいのって聞いてたんだよ。まったく、ふたりともぼーつとしてるんだから……」

「オレはズボンの方がいい。動きやすい物だと尚いいな」

「確かにそうだ。では私も——」

「ラウラはやっぱりスカートだよな」

ラウラの服装はシャルロットによって強制的に決定された。

「ちよつと待てシャルロット。私も——」

「一夏に見せるならやつぱり可愛い方がいいよね」

「うっ……むう」

シャルロットの『一夏に見せる』という言葉に黙り込んでしまいうラウラ。

恐らく今のラウラの頭の中では、機能性と一夏に見せる用で悩んでいるのだろう。

「わ、わかった。スカートにする」

照れながらボソツと呟いた。

それを聞いたシャルロットはとても嬉しそうに笑う。

「うんっ。それがいいよ！ アニエスも本当にいいの?」

「ズボンのほうが馴染みがあるし。第一、スカートは履いた事がないのでな」

制服はカスタム自由なので、ズボンにさせてもらったのだ。

あくまで動きやすく。そう考えるのはやはりオレが傭兵だったからだろうか。

未来を変えると決めなければ、オレも今ごろ普通の十代女子のようにキヤツキヤ……いや、ないな。うん。

「え、じゃあこの機会にスカートに手を出してみるってのも手じゃない?」

「オレには別に見せる男なんて」

「またまた。素直じゃないんだから、アニエスは」

そう。オレは素直じゃないと思われている。

臨海学校でオリムラヴァーズの目の前で、オレは一夏に恋愛感情を

抱いていないと宣言したはずなのに、彼女たちの中では箒や鈴、セシリアのように恥ずかしくて誤魔化そうとしたと思われているらしかった。

「よし。じゃあ三人で『可愛い服』を買いに行こうか！」

シャルロットはオレとラウラの手を取って、やや強引に引つ張っていく。

もしかしたらシャルロットの言葉がすんなり届いているのは、実際はシャルロットが有無を言わさずに行動しているからなのではないだろうか。

「なあ、シャルロット。秋物ならオレはやはりズボンの方がいいぞ」

「え、なんで？」

「少し寒くなってくるからだ」

「じゃあロングスカートの方がいいね」

「いや、スカートは——」

「アニエスの真っ赤な髪が特徴的だから……えっと」

ほら、この通りである。……ん？ あそこにあるのは？

呉服店が立ち並ぶ中で、ひとつだけオレの目に止まる店があった。

オレは二人に黙って、こっそりとそれを見に行く。

他の店のように秋物を並べるところか、季節感が合っていないものばかり。

その店はフロアの隅っこにあり、看板には『コスプレ専門店』と書かれていた。

「コスプレ……って、何だ？」

どこかで聞いた事があるような。

それはそう……。簪や本音に教えてもらったような……。

考えながら店の中を見回っていると、今度は見覚えのある服を見つけた。

黄色い電気鼠のデザインである。

「ああ。あれか」

そうしてようやく『コスプレ』について思い出した。

アニメなどに登場するキャラクターの服装や髪型を模した物だ。

面白そうなので、簪や本音へのプレゼントと自分が着る用を買って、早急に二人の所へ戻る。

すると、シャルロットと店員らしき人物が試着室の前で待機していた。

様子を見ていると試着室のカーテンが開き、その中からラウラが出てきた。

しかしその服装はIS学園の制服ではなく、部分部分フリルをあしらいい、肩の出た黒のワンピースだった。

「あつ、アニエス。どこ行ってたの?」

「別の店を見てきた。これから私服を買おうと思っていたんだが……」

オレの視線はまだラウラの方へ向いている。

「凄く似合ってるでしょ? あのラウラが『もつと可愛い方がいい』ってリクエストしたんだよ? あのラウラが!」

「本当か!」

「そ、そんなに驚かなくてもいいだろう」

シャルロットがすべて見繕った物だと思っていたが、まさか『あのラウラ』が自らリクエストした物だったとは。

しかも『もつと可愛い方がいい』だと?

ふむ。織斑をひっぱいた時と比べると、まるで別人のようだ。

「靴まで用意したのか……」

「せっかくだもん、ミュール履かないとね」

初めて履くであろうヒールのある靴に、ラウラが姿勢を崩す。

その場にいた全員が「あつ!」と思った瞬間には、シャルロットがその体を支えていた。

「す、すまないな」

「どういたしまして」

体勢を立て直したラウラの手を取り、お辞儀をするシャルロット。

そんな二人はさながら貴公子とプリンセスといった様子で、まるで物語のワンシーンのようでさえあった。

「じゃ、写真とっていいかしら!」

「わ、私も！」

「握手して！」

「私も私も！」

わあつと一気に囲まれる二人。

オレは隙を見て抜け出したが、店内だけでなく騒ぎに集まってきた店外の人まで輪に入ってきて、あたりはしばし騒然となった。

カメラを持った連中を上手く処理するのに手間取って、結局オレの私服を買うのはまた今度という事になった。

「ごめんね、アニエス」

「シャルロットが謝る事じゃない」

今考えてみれば、例え私服を来ても見せる相手などいないのだから、制服でも別に構わない。

しかしそれを言ってしまうとシャルロットに小言を言われそうなので黙っておく。

「まあ取り合えず、今日はラウラの服を買えたから良いじゃないかな?」

「そうだな」

そう言うラウラの姿は、もとの制服に戻っていた。

「別に私服でもいいのに」

「あれは、その……汚れては困る」

「織斑に見せるまではな」

「なっ! そ、そういう訳では……むう」

否定しても無駄だと思ったのか、ラウラは顔を赤くしながら俯く。しかし何とか話を反らそうと、話題を変える。

「で、午後はどうなんだ?」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなあ。日本製の時計って、ちよつと憧れだったし」

因みにオレの資金源は代表候補生としての支援金である。

シャルロットも同様で、ラウラに関しては軍の給料ももとからあつたらしい。

口座に入っている金額を聞いたときは本当に驚いた。

「腕時計が欲しいのか?」

「うん、せつかくだからね。二人はそういうのってないの?」

「日本刀だな」「和弓もいいな」

いつだったか箒が日本刀を持っていたような気がする。
和弓も得意だと言っていたし、しかも紅椿の装備も刀と弓だ。

「……女の子的なものは？」

「ないな」「特に思い付かない」

即答にシャルロットはがくつと首を落とした。

ふと、シャルロットが隣のテーブルに目をやった。

そこには二十代後半くらいのスーツ姿の女性が、頭を抱えていた。
いつ注文したのか、ペペロンチーノには既に湯気がまったく立っていない。

「はあ……」

深々と漏らすため行きには、深淵の色が見て取れる。

「ねえ、二人とも」

「お節介はほどほどにな」

先回りしたラウラの言葉に、シャルロットは嬉しそうな顔をした。
自分の目の前で誰かが困っていたら、放っておけないのがシャル
ロットの良い所だ。

当然そんなことを続けていけば、困るのはシャルロットも同じなの
で、ラウラはそれを心配したのだ。

この二人はオリムラヴァーズの中で、とても愛称の良い二人だ。

「どうするんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言って、シャルロットは席を立つなり女性に声をかけた。

「あの、どうかさされましたか？」

「え？——!?!」

女性はオレたちを見るなり、ガタンツ！ とイスを倒す勢いで立ち
上がる。

そのまま、シャルロットの手を握った。

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない!?!」

「「え？」」

「というわけだね、人手が足りなくなっちゃったのよ」

「はあ」「ふむ」「ふーん」

「でもね、今日は超重要な日なのよ！ 本社から視察の人間も来るし、だからお願い！ あなたたちに今日だけアルバイトしてほしいの！」

オレたちに泣きついてきた女性のお店は、女は使用人、男は執事の格好で接客をするという喫茶店であった。

確かに、どちらも奉仕する立場ではある。

流石おもてなしの国、日本。

「それはいいんですが……」

着替え終わったシャルロットはやや控えめに訊く。

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか……？」

「オレもなんだが……？」

「だって、ほら！ 似合うもの！ そこいらの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！」

「そうですか……」

誉められたというのに、あまり嬉しくなさそうに隣のシャルロットはため息を漏らす。

オレはシャルロットの姿を見ながら、シャルロットの貴公子の風格を感じていた。

「シャルロット、オレはどうだ？」

やや落ち込み気味のシャルロットを励まそうと、オレも執事服を見

せる。

「うん。アニエスは出で立ちも堂々としていて、似合ってるよ」

「そういうお前は貴公子なんだから、自信を持って」

「そうは言っても……ねえ」

シャルロットは羨ましそうにラウラの方を見る。

ラウラはと言えば、オレたちとは違って飾りっ気の多いメイド服を着ていた。

細身でありながら強靭さを秘めた体躯。

綺麗にしゅつと伸びた銀髪。

そしてミステリアスな雰囲気加速させる眼帯。

その姿を見れば男は振り返り、女はため息を漏らすだろう。

「大丈夫よ、二人とも。すつごく似合ってるから！」

シャルロットの手を握って言う女性に対し、やや引きつり気味の顔で社交辞令の笑みを返すシャルロット。

「店長、早くお店手伝って」

フロアリーダーがヘルプを求めて声をかける。

すぐに女性——店長は最後の身だしなみをして、バックヤードの出口経と向かった。

「あ、あのっ、もうひとつだけ」

それをシャルロットが呼び止める。

「ん？」

「このお店、なんていう名前なんですか？」

店長は笑みを浮かべてスカートをつまんであげ、大人びた容姿に似合わない可愛らしいお辞儀をした。

「お客様、@クルーズへようこそ」

〈SIDE: Third person〉

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、@マークの刻まれたトレイへと乗せる。

そんな単純な動作にさえシャルロットの気品がにじみ出ている、臨時の同僚スタッフたちは、ほうつとため息を漏らした。

初めてのアルバイトだというのに、その立ち居振舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌みではない。

そんなシャルロットの姿に、女性客の半分が見入っていた。

「お待たせいたしました。紅茶のお客様は？」

「は、はい」

自身の方が年上にあるにもかかわらず、女性は緊張した面持ちでシャルロットに答える。

紅茶とコーヒーをそれぞれ女性に差し出す前に、シャルロットはお店の『とあるサービス』の要不要を尋ねた。

「お砂糖とミルクはお入れになりますか？ よろしければ、こちらで入れさせていただきます」

「お、お願いします。え、ええと、砂糖とミルク、たつぷりで」

「わ、私もそれでっ」

実はふたりとも常日頃からノンシュガー・ノーミルクなのだが、今日に限ってはあえて目の前の美形執事に奉仕してもらいたい一心でわざとそう答えたのだった。

その内心を知ってか知らずか、シャルロットは柔らかな笑みを浮かべてうなづく。

「かしこまりました。それでは、失礼いたします」

時折、わずかに響くかちやかちやという音でさえ、女性客は息をの

んで聞き入った。

「どうぞ」

「あ、ありがとうございます……」

すつとシャルロットの手元から差し出されたカップを受け取り、女性はどうきまぎとした様子でそれを口につける。

次に同じようにコーヒを混ぜてもらった女性客も、緊張からぎくしゃくとした動きでわずかに一口だけ飲んだ。

「それでは、また何かありましたら何なりと御呼び出してください。お嬢様」

そう言つて綺麗なお辞儀をするシャルロットはまさしく『貴公子』としかいいようのない雰囲気をつけていて、女性客はぼかんとしたみうなずくのが精一杯だった。

また、女性客のもう半分が見入っている執事と言えは。

「お待たせいたしました。ご注文のコーヒになります。砂糖とミルクは如何なさいますか？」

同じく執事服に身を包んだアニエスである。

貴公子のシャルロットに対し、アニエスは見事フットマンをやり遂げたバトラーのような雰囲気振り撒いていた。

「じゃあ、どつちもたつぷりで」

こちらの女性も奉仕を受けたいが故にそんな注文をしてしまう。

アニエスは内心で『甘つたるそうだ』と思いながら、顔色ひとつ変えずに砂糖とミルクを入れる。

アニエスは今までの知識と経験を生かして執事に成りきっていた。

執事の立ち居振舞いはアニメや漫画から。

迷いの無さは仕事への熱意から。

「どうぞ」

「は、はい……」

一口。たったそれだけを飲んだだけだが、女性客はアニエスに気が取られて味など分からない。

すると、今までひとつの表情を顔に張り付けていたアニエスが女性客が飲んだのを確認して、初めて微笑んだ。

「それでは、また何かありましたら何なりと御呼び出しください。お嬢様」

マニユアル通りの台詞を言った時には既に元の表情に戻っていた。女性客は刹那優しい笑みを見せたミスティアスな執事に対して、頬を赤らめながらうなずくだけだった。

ところで店の男性客の視線は銀髪で眼帯を着けたメイド——ラウラに釘付けにされていた。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

「……………」

男性客三名のテーブルで注文を取るラウラだったが、本日限定の執事二人に対して、こちらのメイドは接客というにはあまりにも無愛想だった。

「あのさ、お店何時に終わるの？ 一緒に遊びに——」

ダンツ！ と、テーブルに垂直に置かれたコップが大きな音と一緒に滴を散らかす。

面食らっている男たちを前に、ラウラはぞつとするほど冷たい声で告げた。

「水だ。飲め」

「こ、個性的だね。もっと君のことよく知りたくなっ——」

台詞の途中で、しかもオーダーを取ることなくラウラはテーブルを離れる。

そしてカウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンドクを持って来た。

「飲め」

さつきよりは多少優しめにカップを置くラウラ。

それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮なくこぼれた。

「え、えっと、コーヒーを頼んだ覚えは……」

「何だ。客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけですよ……」

ラウラに好印象を持たれたためか、それとも有無をいわせぬ態度に萎縮しているのか、男は言葉を探りながら会話を続ける。

実際、女性待遇社会でこんな風に女子に声をかけられるというのは、勇者か馬鹿のどちらかでしかない。

そして、男たちは確実に後者だ。

「た、例えば、コーヒーにしてもモカとかキリマンジャロとか——」

言葉を遮るように、ラウラはまったく笑っていない目のまま、その顔に嘲笑を浮かべた。

「はっ。貴様ら凡夫に違いがわかるとでも?」

「いや、その……すみません……」

結局、ラウラの絶対零度の視線と許しのない嘲笑に才折れて、男たちは小さくなりながらコーヒーをすすった。

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい……」

ドイツの冷水と呼ばれたラウラの一面は、今でも健在のようだった。

しかし、そんな人を寄せ付けない態度ですら、美少女の外見を伴えば魅力となるらしい。

「あ、あの子、超いい……」

「罵られたいつ、見下ろされたいっ、差別されたいっ!」

特別盛り上がりつつあるテーブルは異様な興奮を見せていたが、他の客はもちろんスタッフまでもが見て見ぬふりでやり過ごしていた。

「あ、あいつ、追加の注文いいですか!? できればさっきの金髪の執事さんでー!」

「コーヒー下さい! 銀髪のメイドさんで!」

「赤毛の執事さん、追加の注文お願いします!」

「こつちにも美少年執事さんをひとつ!」

「美少女メイドさんをぜひ!」

そんな騒動は全体に感染し、爆発的に喧騒を大きくしていく。

どう反応していいか困る三人だったが、店長が間に入って上手く三人を滞りなくテーブルに向かうように声をかけて調整をしていた。

そこは流石本業、店長の指示は的確で、いつの間にか通常時の五割増しの客数を見事にさばっていく。

そんな混雑が二時間ほど続いて、さすがに三人にも精神的な疲れが見え始めた頃、その事件は起こった。

Episode. 29

〈SIDE: Agnes Alone〉

「全員、動くんじゃねえ！」

ドアを破らんばかりの勢いで雪崩れ込んできた男が三人、怒号を発する。

何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが、次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった。

「ぎゃあああっ!?!」

「騒ぐんじゃねえ! 静かにしろー!」

オレはいち早く状況を把握して物陰に隠れる。

シャルロットも同じように身を隠すが、ラウラだけは無反応でその場に立ち尽くしていた。

「何をしているんだ、バカめ」

男たちはおそらく銀行強盗だろう。

ジャンパーにジーパン。顔には覆面、手には銃。背中のバッグからは何枚か紙幣が飛び出している。

三人のうち一人が天井に向かって銃を発砲する。

威嚇であろうが、店内の客たちは悲鳴をあげた。

「大人しくしてな! 俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか?」

すぐ後にパトカーのサイレンが聞こえる。

それに気付いたその男は、扉を開けて再び銃を発砲。

「おい、聞こえるか警察ども! 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ! もちろん、追跡車や発信器なんかつけるんじゃねえぞ!」

幸い、弾丸はパトカーのフロントガラスを割っただけだったが、周囲の野次馬がパニックを起こすには十分だった。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ツスね!」

「まったくだ」

シヨットガンに、サブマシンガン、リーダーがハンドガン。金を持つているのは子分二人のようだが、なぜリーダーはハンドガンだけなのか。

明らかに札束の重さではない何かリーダーの服を下に引っ張っている。

「はんだ、お前。大人しくしてろというのが聞こえなかったのか？」

案の定、ラウラに気がついたリーダーがやってきた。

「おい、聞こえないのか!? それとも日本語が通じないのか!？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないツスカ! 時間はたっぷりあるんスカら、この子に接客してもらいましょうよ!」

「ああ? 何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ! すっげー可愛いツスよ!」

「お、オレも賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

二人揃ってテヘへと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下に、リーダーは眉間にしわを寄せながらソファにどかかと腰を下ろす。

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渴いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

ラウラはうなずくでもなく男たちを一瞥すると、カウンターの中心にスタスタと歩いていく。

と、オレは苦笑いをしていたシャルロットを発見する。

向こうもオレに気付いたのを確認すると、オレは手話で『ラウラが仕掛けると同時に出るぞ』と合図する。

すると、シャルロットはうなずいてくれた。

やがてラウラが戻ってきて、テーブルに氷が満載された水を持ってきた。

「……なんだ、これは?」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんスけど……」

「黙れ。飲め。——飲むものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、そ

れらを回転するような動作で掴み——弾いた。

「いつてええっ!? な、なっ、何しやがっ——」

氷の指弾。

それをトリガーから離れていた人差し指に、突然の出来事に反応できずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる。

そして犯人の怒号より早く、男の一人の懐へと膝蹴りを叩き込んだ。

「ツぎけやがって! このガキ!」

いち早く痛みから復帰したリーダーが、さっそくハンドガンをぶっ放す。

火薬の炸裂音を連続して響かせるが、しかしラウラには届かない。

ソファを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、店内のあらゆるものを盾にして、ラウラはその細身からは予想もつかないスピードで駆けていく。

「あ、兄貴っ!? こ、こいつッ——」

「うろたえるな! ガキ一人、すぐに片付けて——」

「——一人じゃないんだよねえ、残念ながら」

マガジンを切り替えたリーダーの、その背後に迫っていたのは見目麗しい執事服の美少年——もとい、美少女のシャルロットだ。

「なっ!? このっ——」

「あ、執事服でよかったかな。うん。思いつきり足上げてても平気だし」
そんなことを口にしながら、シャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げる。

そしてそのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度はかかと落としを叩き込んで無力化する。ゴキツという嫌な音がして、ショットガンを構えていた腕はだらりと垂れた。

「そんな、ガキ二人に——」

「いや、三人だ」

リーダーは背後の声に振り返り、子分の一人が床に伏せているのを見つける。

それをやったのは勿論、このオレ——アニエス・アロンだ。

「アニエス」「シャルロット」

次の瞬間にはオレとシャルロットの回し蹴りがリーダーの頭部に直撃する。

前後から挟むようにして叩き込んだそのコンビネーション技は、タフそうなりリーダーを気絶させるには十分だった。

「ふう、終わったな」

しばらくの間、しーんと静まりかえる店内。ジェットコースター展開に呆然としていた店内の客とスタッフは、のろのろと頭を上げはじめる。

「お、終わった……?」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

そしてオレは、気絶したリーダーの服をまさぐっていた。

どうも顔の肉付きと腹周りの太さが合わないのだ。

と、そこでようやくその謎が解けた。

「アニエス、何をしている?」

ラウラが気になって近付いてきた。

オレは何か切る物を探したが見つからず、仕方がないので拳銃で代用することにした。

オレは拳銃をリーダーに向ける。

「ちよっ、アニエス何を——!」

ダダダダダンッ!

シャルロットが止めようとした時には、オレは全ての起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を撃ち抜いていた。

「爆弾だ」

リーダーが来ていた革ジャンの中には、軽く四〇平方メートルは吹き飛ばせそうなプラスチック爆弾の腹巻きがあった。

「び、びっくりさせないでよ。も〜」

「ふむ、流石の腕だ」

「さて、二人とも。早く退散しよう」

「もう、危ない事しちゃダメだよ」

寮に帰るなり、どこかで情報を得たのか簪にしかられてしまった。

「アニりんの執事服はちよつと見たかったかも」

と、隣で本音がお菓子を食べながら言う。

三人でそれぞれ用意したものだが、オレが用意した物の中の@クルーズのクッキーはとりあえず好評だった。

「もう、本音。アニエスがまた怪我したらどうするの?」

「心配無用だ。アレくらい敵、シャルロットとラウラがいたお陰で掠り傷ひとつ無かったぞ」

「それでもっ……。はあ」

どうやら反論するのをやめたらしい。

オレが傭兵だったという事を思い出したのだろう。

事件の件だが、寧ろオレがいなくても同じ結果だった筈だ。

「ところで、もうそろそろじゃないか?」

「うん。そうだね」

もうすぐ学園祭である。

Episode. 30

「近距離戦闘と遠距離戦闘の即時切り替え。基本戦略の組み立て直し。それに射撃訓練の追加、新装備の経験訓練と……やる事が多いわね」

楯無に今後の課題を話してみたが、予想通りの反応だった。

「白式の性能の偏りが大きいだけにな」

近接特化型の雪片、そして高火力の荷電粒子砲とエネルギー攻撃を無効化する盾を持つ雪羅。

火力調整が難しい上にどれも燃費が悪すぎる。

こうして楯無と話し合っているだけでは何も解決できない。

「オレなんかより、楯無が教えた方が良いんじゃないか？」

織斑はよく分かりやすいと言ってくれるが、未だに織斑の勝率は二割以下。

初見で戦う相手にはまだ勝ち目はあったが、その後はほとんど勝てていない。

もつとうまく相手の隙を突いて一撃を叩き込まなければならぬのに。

「その必要があると見たわ」

「では？」

「ええ、近々接触してみるつもりよ」

「やはり生徒会に引き入れる気か」

「それが一番だと思うのよ。そうだ、アニエスは部活どうするの？」

「オレは……別に考えてない」

ずっと織斑の訓練や簪の専用機に掛かっっていて、部活なんてやる暇がなかった。

それに最近はずいぶんアヴニール・ルーの事もあり、更に忙しくなった。

「部活をやる暇が元より無いんだ」

「よかつたら生徒会に来る？」

「いや、まだ保留にしておく」

「そう、残念ね。おっと、もう時間だわ」

そうして楯無は足早に去っていく。

「部活……か。タイムスリップではなくて、異世界転生だったらなあ」

「はっ？　楯無を？」

楯無が全校集会で織斑一夏争奪戦を宣言してからすぐ後の事。

三年の先輩に「楯無を倒さない？」と勧誘された。

生徒会長、即ち全ての生徒会長の長たる存在は最強であれ。

それがIS学園の生徒会長という肩書きが証明する事実。

不意打ちでも何でも、当時の生徒会長を倒す事ができれば倒した者が生徒会長になるという決まりで、今回の織斑一夏争奪戦を中止及び織斑を入手。というのが三年の先輩たちの魂胆らしい。

「ふむ、学園最強に挑もうというのは面白いですね」

という訳で時間は飛んで放課後。

三年の先輩たち計三人とオレの生徒会長への襲撃が始まる。

標的は職員室から出てきた織斑を待ち伏せ、一緒にアリーナへ向かってる。

こっちの作戦は一人目が竹刀を持って攻撃、これが撃破されれば次の手段として校舎の向かいの廊下から弓で狙撃、これでも駄目なら不意を突いて三人目とオレが突撃。

三段構えの作戦だが、正直どこまで通用するのは甚だ疑問だっ

た。

「覚悟おとおつ!!」

竹刀持ちが攻撃を開始、反射的に織斑がふたりの間に立つが、それをするりとかわして楯無が扇子を取り出す。

「迷いのない踏み込み……いいわね」

楯無は余裕の表情で竹刀を受け流し、左手の手刀を叩き込む。

竹刀持ちが崩れ落ちると同時に、弓矢が窓ガラスを突き破る。

「こ、今度は何だ!？」と織斑が声を上げた。

楯無の顔面を狙い、次々と矢が飛んでくるが、どれも楯無には当たらない。

「ちよつと借りるよ」

竹刀を蹴り上げて浮かせ、空中のそれをキャッチすると同時に放る。

割れた窓ガラスから投擲されたそれはスコーンと弓女の眉間に当たり、見事撃破した。

「もらったああああ!」

バンツ! と廊下の掃除道具ロッカーの内側からボクシンググローブを装着した先輩が現れる。

ワンテンポ遅らせてオレも出ると、目の前でボクシング女が宙を舞った。

次の瞬間には楯無のソバットがボクシング女をロッカーへと叩き込んだ。

「次っ!」「ふっ!」

楯無が着地すると同時にオレの拳が突き出される。

楯無がそれをいなし、お返しとばかりに左フック。

オレがそれをかわし、続けて迫る右ストレートもかわす。

右ストレートをかわしてすぐ、今度はオレが左アッパー。

楯無はギリギリでかわし、蹴りを食らわせてくる。

すんでの所で防御が成功するが、学園最強の蹴りは並大抵の物ではなかった。

が、まだ余裕はある。

自分が最強であると思っっているあのポーカーフェイスをひっぺがしてやらんことには、倒れた三人の先輩に示しが付かないというもの。

「まさか貴女まで出てくるなんてね」

「学園最強と手合わせ願おうか」

「一年最強相手じゃ流石にキツイのだけれど」

「その余裕。気に入らない、なっ！」

容赦無しの蹴り。しかしかわされた。

すると楯無はお返しとばかりに膝蹴り。

オレはそれを受け止め、足払いで楯無の体勢を崩す。

すると位置の問題で、織斑の方を向いたままスカートがめくれ上がる。

楯無はその事実いち早く気づき、オレから顔を赤くしながら離れ取ってスカートを整える。

「スカートは無防備だな」

「貴女だつてそうじゃない」

「オレは下にスパッツを履いている。パンツじゃないから恥ずかしくない」

「どこのヲタク理論よ」

ところで意外と簡単に楯無のポーカーフェイスを剥がすことができた。

最強と言えどまだ高校生なのだ。オレもだが。

織斑の方を見ると、顔を赤くして目を背けていた。

「なんだ、この状況は」

「誰が作り出したのよ」

殺伐とした状況から、一気に桃色の背景が浮かび上がっていた。

「結局、勝負はどうなったんですか？」

恐る恐る織斑が訊ねてきた。

「どう……つて」

「今日の所は引く。いつかガチンコで戦ってみたいからな」

倒れた竹刀持ちとグローブ装備を担いで、弓女の下へ向かう。

次回、楯無と勝負するならISを使って勝負したいと思っている。
IS学園生徒最強としてではなく、ドイツ国家代表IS操縦者としてだ。

機会があればきつとその時は来るはずだ。

余談だが、IS学園の生徒には外部の人物を学園に招く事ができるチケットが配られるらしい。

当然オレにも配られるのだが、誰を招こうか迷っている。

IS学園以外での知り合いかというと……誰がいたであろうか。

「ねえ、あの人……」

「すっごい美青年。誰が呼んだのかしら」

文化祭当日。始まって間もなく、窓から校門の辺りを見てそんな事を口にしてる生徒達がいた。

オレはそのすっごい美青年——カーリーを迎えに走っていた。

外に友達がいなかったオレは、初めはマズマを呼ぼうと思っていたが、彼にはどうしても外せない予定があるという事で、以前から学園を見てみたいと言っていた(らしい)カーリーを招くことにしたのだ。

「カーリー」

「……………」

「……………」

「…………と、取り合えず学園内を案内しよう」

カーリーは相変わらず無口で、待っている間に女子に話し掛けられ、軽い会釈しか交わしていなかったようだ。

「これが学園祭のパンフレットだ。カーリー、どこか行ってみたい場所はあるか？」

「……………」

喋らない。

「オレのクラスはメイド喫茶になったんだが」

「……………」

しかし、喋らない。

「ほら、中華喫茶もあるぞ」

「……………」

やはり、喋らない。

「クレープ食べるか？」

「……………」

喋らないで、食べる。

「占いの館という物もあるな」

「……………」

黙って、入る。

「そこは入るのか!」

「……………」

黙って首をかしげられた。

なんとかいうか、シズと一緒にいてほしい。

ミーから聞いた話だと、カーリーはシズと話す時だけは途端にお喋りになるとか。

このシスコンめが。お前も唐変木なのか?

「あれ、アニエスじゃない。その人誰?」

占いの館を出てすぐ、チャイナドレスの鈴が現れた。

「彼はカーリー。ダダリオ・ネクスト社の社員だ」

「へえ。よろしく、カーリー」

「……………」

背の高いカーリーと背の低い鈴なので、並ぶとすごく身長差が感じられる。

「で、アンタたちデートしてるの?」

「いや?」 「……………」 (フルフル)

「息ぴったりね、アンタたち」

「カーリーを呼んだのはオレだが、始めてここに来たから案内していったんだ。それより、お前は店の方はいいのか?」

「私の今日の勤務時間は終了。これから一夏に会いに行く所」

「そう言えば、オレの出番ももうすぐだ。すまない、カーリー。オレはこれで」

カーリーは「構う事はない」とでも言いたげに手を上げて首を振る。相変わらず無口な奴である。

ある程度は案内したし、カーリーなら迷う事はないだろう。

囲まれはするだろうが。

「ダダリオ・ネクスト社か」

「どうした、鈴?」

「ううん、ただマイナーな会社がよく第三世代型ISを開発できたな

「くっと思ってただけ」

もしかしたらオレが過去に来たことによる変化かもしれない。

それでも、オレにとつては有益な変化だった。

ISによる戦争を引き起こそうとしている人物なら、保身にかけては必要以上に準備をしているだろうと予想ができる。

きっと専用機がなかったら、オレは訓練機をパクって挑んでいたかもしれない。

「着いたぞ、鈴」

「すう……はあ……」

鈴は目的地に着くなり深呼吸を始めた。

「さてはその格好を見せるために行く気だったな？」

「似合ってるでしょ？」

「流石中国人なだけあるな。ほら、行くぞ」

中に入るなり、燕尾服の織斑がそれはもう忙しそうに店内を駆け回っているのが目についた。

しかも接客のひとつひとつに真剣にやっているようで、クラスメイトたちから受けた執事の心得をしっかりと守りながら駆けずり回っている。

「ちよつとそこの執事、テーブルに案内しなさいよ」

近くにメイドもいるというのに、忙しそうな執事を態々指名する鈴である。

「何してるの、お前……？」

織斑が気付き、振り向く。

そう言えば、鈴と織斑を並べて見るとあるアニメのキャラクターが思い浮かぶな。

二足歩行型のロボットのアニメだ。施設武装組織のエージェントの兄妹である。

写真でも取っておこうか。簪に見せる……のは、いいか。

「さて、オレも仕事、仕事と」

因みにオレの仕事も接客である。

メイド服に身を包み、他に客の列の対応だったりだが、主にウェイ

トレスだ。

と言うのも、主な接客は織斑が事実上担当している。

殆どの客が織斑執事を指名するため、回転率の悪いこと悪いこと。

「どこかにブロンドの貴公子でも居ないものか」

「残念。今日の僕はメイドさんなんだ」

着替えるためにやって来たスペースからシャルロットが現れた。

シャルロットの言う通り、今日の彼女は執事ではなくメイド姿だった。

「おう、似合ってるな」

「えへへ、一夏にもそう言われたんだ。で、貴公子だった?」

「いや、シャルルがいれば織斑も楽になるし、店の回転効率も上がるんじゃないかと思っていたんだ」

実は出し物を決めるとき、織斑の他にシャルロットが執事になる案も出たが、その時のシャルロットの断りようが凄かった為、やむ無く織斑だけが執事になったのだ。

「アニエスがやれば良いじゃない。前に見たアニエスかつこよかったし」

「知らない。覚えてない」

「シャルロット、アニエス。早く接客お願い」

「はい、今行くよー」

「うーむ、織斑が居なくなってから、少し客足が遠退いたかな」

「まあ、仕方ないわよね。一夏くんが目当てで来る人がほとんどだろうし」

オレが仕事を始めてから少し後のこと。

楯無が来て織斑が店を出ていった。

「アニエスの店番の時間ももうすぐ終わるけど、もう上がってもいいよ？」

クラスメイトのひとりがそんな事を言い出した。

「あのイケメンの人、もしかして彼氏？」

「いや、ただの知り合いだ。……まあ、その申し出は有り難いな」

と、いう訳でオレの勤務時間は少し短めに終わった。

織斑はどこへ行ったか分からないので、カーリーを探してみるのも

ピ。ピ。ピ。……

「うん？ メールだ」

ケータイを取り出してみると、カーリーからのメールのようだ。

今日はこれで帰る。シズや他の皆にもいい土産話ができた。

招待してくれてありがとう。

と、書いてある。

「そう言えばカーリーの肉声ってまだ聞いたこと無いな」

あの顔からどんな声が出るのか、かなり興味深かった。

とは言え、カーリーが帰ってしまったのなら、オレのこの後の予定はどうしようか。

「そうだ、鈴の店に行つて——ん？」

二組の中華喫茶にでも行こうと踵を返したところ、明らかに挙動不審な男を見つけた。

周囲の女子に目移りしているように見えるが、道に迷って戸惑っているようにも見える。

「おい、その男子」

「えっ、男子って俺か？」

頭にバンダナを巻いた赤毛の男。

誰かに招待されたのだろうか、誰にも案内されている様子はない。

「どうした、迷ったか？」

「い、いや。別にそんな事は――。えっとお名前は？」

「ん？ オレはアニエスだ」

「俺、五反田弾って言います。ええ、実は迷子です。良かったら学園内を案内していただけませんか！」

弾はその後すぐに「うおお！ 言ったぞお！」と小声で叫んでいるが、オレには丸聞こえである。

「まあいいか。よし、ついさつき暇になったんだ。案内してやる」

「おおー！ やったあー！」

いちいち反応がオーバーな奴だ。

しかし、なんで敬語なんだ？ こいつ、俺と同じ年だろうに。

生徒会主催の演目、観客参加型演劇『灰被り姫』シンデレラは織斑との同居を餌に学園の生徒を一ヶ所に集める事と、混乱に混じって出てくる敵を誘き出すために行われている。

「楯無、白式の反応が舞台裏に向かったぞ」

『了解。行ってくるわ』

「気を付けろよ」

『あら、心配してくれるの?』

「さっさと行けっ」

『釣れないわねえ』

通信機からの楯無の残念そうな声を無視して電源を切る。

カーリーや五反田弾という少年も、学園中の生徒が一ヶ所に集まったせいで過疎化した校舎から帰った頃だろう。

ちなみに何故生徒たちを一ヶ所に集める必要があるのかについては、亡国企業が白式の強奪を目論んでいるとの情報があったからだ。「織斑は楯無が何とかするだろう。オレは別動隊の警戒……の、つもりだったんだがな」

オレが学園の屋上から周囲を警戒していると、見知らぬISの反応をリーダーがキャッチした。

「速いな。しかもこの反応は……」

即座にオレもアヴニールを纏う。

ISの望遠システムが敵と思われる影を鮮明に写してくれる。

「BT二号機」

一見蝶のように見えるシルエットはブルーティアーズ搭載ISの二号機、サイレント・ゼファイルスに間違いない。

オレはロックキャノンを放つが、向こうは避けようとしなかった。
た。

どうせ威嚇だと分かっていたのだろう。

「よお。何しに来たんだ?」

「……………!?!」

サイレント・ゼフィルスのパイロットの顔は、そのほとんどがバイザーによって隠されているためよく分からないが。

何やらオレの顔を見た途端に驚いたようだった。

「お前の仲間の所へは既に生徒会長様が向かってるぞ」

「……………」

「だんまりか。ま、いいさ。バックアップとして来たんだろうが、ここから先へは行かせないから、なっ!」

スラスターを吹かしてゼフィルスに斬りかかる。

ゼフィルスのパイロットは無口なのか、それとも声を出さないようにしているのか。恐らくは後者だろう。

一言も発することなく、オレから距離を取りブレードを展開した。

「初めての实战だ。ひとつ走り付き合えよ」

ちなみにこれは簪に影響されて、ただ言いたかっただけ。

「カートリッジ、ガトリング!」

ロックキャノンが変形し、ガトリングに変わる。

「……………!?!」

もう一度キャノン砲だと思っていたのか、変形した瞬間にまたも驚くゼフィルス。

高速でばら蒔かれる弾丸を避けながら、ゼフィルスはライフルを構える。

「悪いな。こっちは簡単に間合いを詰められる」

トリガーが引かれる前に、ゼフィルスに接近する。

ブレード同士で鏝迫り合いの中、そこで初めてゼフィルスのパイロットが声を発した。

「お前は、誰だ」

「フランス代表候補生、アニエス・アロンだ」

目の前にいるゼフィルスを、ロックキャノンをこん棒代わりにぶん殴る。

そして距離が離れた所に砲口を向ける。

「カートリッジ、スナイプ」

ロックキャノンが変形し、スナイパーライフルに変わる。すかさずトリガーを引き、ゼフィルスに命中させる。

「たかが単発のライフルだ。威力もそこまである訳じゃない。だが――」

「――!?!」

ゼフィルスの異常にパイロットが気付く。

「――これは只の弾丸じゃない!」

ロックキャノンのカートリッジのひとつ。

その名は『G―Iスナイプ』といい、このライフルの弾丸には高性能なISのシステムを短い時間だけ混乱させる効果がある。

ゼフィルスはその場に停滞して、オレがルミエールで切りかかっても動かない――否、動けないのだ。

戦闘に置いて身動きが取れないのは致命的な物。

ルミエールの刃でゼフィルスの頭部を切りつける。

シールドで防がれないように、頭部のバイザーを叩き割る。

「なっ!?!」

驚いたのはオレ。

何故ならバイザーの下から現れたゼフィルスのパイロットの素顔が、織斑千冬にそっくりだったからだ。

織斑千冬ではない。しかし、顔はそっくり。

織斑は千冬と一夏だけではなかったのか。

ドカアン!

「なんだ?」

「おい、ガキ!」

ボロボロになったスーツに毛先が焦げたロングヘアーの女が、爆発に紛れて第四アリーナから出てきた。

と、ゼフィルスのパイロットはオレにレーザーガトリングを浴びせながら、その女の所へ降り立つ。

「迎えに来たぞ、オータム」

「てめえ……、私を呼び捨てにするんじゃない！」

ゼフィルスはオータムを掴み、ビットで牽制しながら飛来した方向へと離脱していく。

「くそっ、待てー！」

アヴニールの速さなら追い付ける——と、思ったのも束の間。

ビームが弧を描いて曲がり、オレの行く手を阻む。

（偏光制御射撃だ?!）

現在のBT適性の最高値のパイロットはセシリアのはず。

そうこうしている内にゼフィルスと女性の影は遠く離れていつてしまい、ビットは用済みとばかりに自爆した。

「逃がしたか……」

「〜♪」

楯無は学園祭の後、鼻唄を歌うほど機嫌が良かった。

聞いてみると織斑と同室になる権利を手に入れたらしく、更には織斑を生徒会に引き込むことに成功したらしい。

しかしこれでは生徒会に不満を持つ者が続出するので、織斑の生徒会での仕事は各部活にマネージャーとして派遣されるというもの。

「ところで、楯無」

「ん、何？」

「織斑姉弟の他に、もうひとり織斑がいると思うか？」

「……どういふこと？」

「織斑先生にそっくりの人物を見た気がしたんだ。裏社会に通じている楯無家なら何か分かるんじゃないかと思ってな」

「確かに表向きじゃあの二人だけよね。でも、そういう事なら先生が一夏君に直接聞いた方が早いんじゃない?」

「社会に知られてはいけないから、裏の事実になるのだろうか」

「まあ、それもそうね」

千冬はともかく、一夏は家族思いな性格だ。

もうひとり家族がいると知ったら放っては置かないだろうし、千冬に關しても同じ事が言える。

いや、千冬なら何か知っているのかもしれない。

「さて、これから学園長に話があるから。アニエスは自分の部屋に帰ってなさい」

「そうするとしよう」

「あつ、そうだ。アニエス」

「どうした?」

「簪ちゃんは最近どんな感じ?」

「最近、専用機を完成させようと頑張ってるぞ。オレと本音も手伝ってはいるが、難関なのは荷電粒子砲とマルチロツクオンシステムだな」

「アヴニールには生憎と荷電粒子砲は付いていないし、近くにそんなサンプルデータがあるとすれば織斑の白式か、楯無に直接頼むしかない。」

しかし簪は楯無に手伝ってもらう事を嫌がるだろうし、織斑が気に入らないらしい。

どっちかという織斑の方が解決しやすいのだから、何か対策を練ってみるとしよう。

「オレが過去に来なければ、織斑が打鉄式式の整備を手伝ったという話であったし。」

「そうなの。ありがと」

「オレの目的にも必要な事なんだ。どうってことないさ」

Episode. 33★

「えっ、じゃあアヴニールはキャノンボール・ファストに出ないの？」
簪は心配そうにそう言った。

キャノンボール・ファストとは、ISによる高速バトルレースである。

本来なら国際大会として行われるそれだが、IS学園があるここでは少し状況が違う。

市の特別イベントとして催されるそれに、学園の生徒たちは参加することになる。

といっても専用機持ちが圧倒的に有利なため、一般生徒が参加する訓練機部門と専用機持ち限定部門とに別れている。

学園外でのIS実習となるこのイベントでは、市のISアリーナを使用する。

臨海地区に作られたそれはとてつもなくでかく、二万人以上を収容できる。

「いや、出る。そもそも、アヴニールには高機動パッケージなんて要らないくらいの出力があるからな」

高機動調整前のアヴニールの加速力でも、勝てない事は無いのだ。しかし、簪が心配したのはアヴニールに実装される筈だった高機動

パッケージの開発が追い付かなかった為だ。
よってアヴニールはエネルギーをスラスタ部分に集中させる仕

様に調整せねばならない。
もともと暴れ馬だったアヴニールを、更に高出力に仕上げる事でオ

レ自身も制御しきれるか不安である。
ちなみにバトルレースなので妨害も有りだ。

オレの場合はアヴニールの更なる軽量化を考えているため、ロツク
キャノン捨て、残るルミエール一本で飛んでくるミサイルなりレー
ザーなりを防ぐか避けるしかないのだ。

布製のISと呼ばれるアヴニールの総合重量は、通常のISの平均
重量に比べて桁がまるで違う。

普段ならそこまで気にならない『重さ』というハンデは、『曲がる』『止まる』『加速する』の三要素に影響を及ぼし、それらが重要なレースの世界では『軽量化』に勝るチューニングは存在しないのである。『式式はまだ時間が掛かりそうだな』

幾らか形になつてきた打鉄式式であるが、やはり手が足りない。

キャノンボール・ファストが終われば、すぐに全学年合同タッグマッチが待っている。

未来情報なのでまだ楯無にも言っていないが、今年のキャノンボール・ファストは荒れる。

打鉄式式はそのタッグマッチでデビューを果たすのだが、このペースではとても間に合わない。

「キャノンボール・ファストには間に合わない」
「残念だ」

軽い雑談の後、オレはいまだに私服を持っていないので町に買いに行くと言に告げて部屋を出た。

「おう、アニエス」

「織斑か。どうした、こんな所で？」

部屋を出るとすぐに、私服の織斑と出会った。

「そうだ。アニエスって私服が無いんだろ？ だったら一緒に買いに行かないか？」

どうやら織斑はシャルロットと買い物に行く予定だったらしい。

オレがそれに同行して良いのかは、シャルロットがどういう反応をするのかによるわけで――

「うん。いいよ」

あつさり了承してもらえた。

始めはシャルロットに無言で首を振り、自分のせいではないと伝え
ると、彼女は分かってくれたのか溜め息をついた。

しかし、シャルロットもオレが私服を持っていないことを覚えてい
たようで、オレが思っていたよりも快く領いてくれたのだ。

本当は鈴と一緒に行くはずだったのが、予定が出来て来れなくなっ
たのだとか。

鈴がオレに変わったただけだから、あまり変わらないそうだ。

「すまないな。シャルロット」

「いいって。アニエスの服を今度買いに行くって言ったのは僕なんだ
し」

誘ったのは織斑だが。

とは言え、いつか織斑とオレの二人だけで行くよりは良いと、シャ
ルロットは思っているのかもしれない。

ちなみに以前買った服は私服ではないので、シャルロットたちには
見せていない。

見せたのは簪と本音だけだ。

「二人だけ制服ってのもなんだし、最初はアニエスの服を買いに行こ
うか」

ということ、シャルロットと織斑に私服を選んでもらう。

シャルロットが幾つかオレに似合うのを選んできて、織斑がその中
から絞っていく。

シャルロットはラウラの私服を選んでいた時もそうだったが、他人
の世話をする時にとても夢中になるらしい。

そして一度夢中になると中々止まらない。

やがてシャルロットが、オレの希望通りズボンを使ってコーデイ
ネットしてくれた。

その中で織斑が良いと思ったのは、白いシャツに紺の上着、黒のデ

ニムという物だった。

「……………どうだ？」

「やっぱり、アニエスはクールビューティって感じだよな」

クールビューティと聞くと、真つ先に思い浮かぶのが織斑千冬なのだが、織斑の好み——しかもオレとなると、そっちの方面に行くようだ。

シャルロットの方も、少し複雑そうな表情をしている。

「ん、どうしたんだ。二人とも？」

「……………なんでもない」

取り合えず、この服は買う。

更にシャルロットが選んでくれた他の物からも幾つか選んでおく。

これでオレも私服で出掛けられるようになった。

するとレジで支払いを終えてから、ふと思った事があった。

(もし、戦争が起きなくなったら。オレはどうなるのだろうか)

オレは未来で死んだ筈だったのだが、何故か過去の世界に来てしまった。

時間軸の関係する議論はとても複雑で、いろんな説が存在している。

例えば『決して歴史を変えられない』という物や『精神だけが過去に来る』『パラレルワールド』などである。

オレは実際にここにいたのだから、精神だけが過去に来たわけではなく、体ごと過去にやって来たのだ。

そこで危惧されるのが『決して歴史を変えられない』という物だ。

もし、その説が正しいとしたらオレは…………

「ん…………？」

そこでオレの思考は中断された。

見覚えのある人物を見つけたのだ。

「シャルロット、織斑。急用ができた」

「え、アニエス？」

「すまない！」

オレは二人を置いて全速力で駆け出した。

呆気にとられているのか、追っては来ないようだ。

それでいい。何故なら、オレが見つけた人物は――

「――博士」

人気の無くなった場所に入った篠ノ之博士を呼び止めた。

「や、アミちゃん。久しぶりー」

カツラを被り特殊メイクを施しても、常人からかけ離れた存在というのは、分かる奴には見ただけで分かるのだ。

「こんな所で何をしてるんだ？」

「何って、捜索中だよ？」

「捜索？」

「今のところ全く掴めてないんだけどね。いったい誰が戦争を起こすのやら」

博士にも正体を悟らせないという事は、犯人も天才的な人物だと分かる。

希代の天才が捜索しているのだから、見つかるのは時間の問題だと思っていたが、どうやら一筋縄では行かないらしい。

「ところで、博士。聞いてもいいか？」

「お、何かね？」

「未来を変えると、何が起これると思う？」

「うーん、タイムスリップの技術は作ったことないからまだ分かんないけど。例えば――」

Episode. 34

〈SIDE: Ichika Orimura〉

最近、アニエスの元気が無い。

先日アニエスの服を買いに行った後からだろうか。

何があったのか聞いても教えてくれない。

絶望とかじやなく、憂鬱や葛藤か何かだと思う。

とにかく放課後の訓練の時によく上の空だったり。しかし、成績やISの稼働データはこまめに送っているらしく、さすがアニエスだと言える。

「おーい、アニエスー！」

「……………」

「またしても上の空だ。毎日少しずつ酷くなってきている気がする。」

今日は第六アリーナ手間高速機動実習をする事になっていて、追加装備なしの組は俺と箒とアニエスの三人なので相談しろとの織斑先生の提案である。

「やがて織斑先生に注意されたアニエスがやって来る。」

「すまない。考え事をしていた」

「出力調整か？ アニエスはこういう風にするつもりなんだ？」

「オレは全出力をスラストターに回す。こんな感じだな」

「そう言っただイスプレイを見せてくるアニエスだったが、俺とその隣にいた箒は目を疑った。」

アニエスの専用機、アヴニール・ルーは元から高機動型であるにも関わらず、ロックキャノンに回すエネルギーを全てアヴニールのスラストターに回しているため、飛んでもない出力を生み出していた。

「普通の人間が扱える代物ではない。それだけはわかった。」

「アニエス。いくらなんでも、これはやりすぎではないか？」

箒が心配そうに尋ねるが、アニエスは首を横に振った。

「アヴニールの利点は速さと身軽さだ。これくらいピーキーな仕様の方がいい」

物には限度というものがあると思うのだが、アニエスはあれだろうか。織斑先生と同じレベルの人間じゃないのだろうか。

「織斑……」

「な、何だ？」

「いや、やっぱりいい」

アニエスはアヴニールを纏って、俺たちから離れた。

キュウン…… と甲高い音と共にアヴニールのスラスタ―に火が付き、次の瞬間に砂ぼこりを上げて爆発する。

「アニエス！」

「二夏、上だ」

見ると、アニエスの姿は一瞬にして上空に舞い上がっていた。

先程の爆発はアヴニールの高すぎる出力のせいだったらしい。

しかし事故というわけではなかったのだから、とてつもない性能だ。

「あれがアヴニールの性能か……」

「アニエス」

「ん、織斑か。どうした？」

「どうしたじゃない。最近のアニエスは元気が無いけど、どうしたんだ？」

「別に、ちよつと不調なだけだ」

本当に不調なだけだろうか。

今までは頻繁に放課後の訓練にやって来たのが、最近になってめつきり来なくなった。

まあ、アニエスにも用事があるのだろう。それは別にいい。

俺が気になっているのは、アニエスの最近のISの操縦が、俺の目からでも分かるくらい荒くなってきている事だ。

今までのアニエスの操縦は、大胆かつ繊細というか、大雑把に見せ掛けて実は計算されているというような感じだった。

なにより、普段の操縦ではISを労るようなアニエスが、最近は投げ槍になったかのような操縦をする。

これはもう、不調というよりは何かを諦めたかのようにも見える。

「キャノンボール・ファストまで時間が無いだろうか？ 早くお前も白式を仕上げろ」

「……アニエス、今日時間あるか？」

「ああ、忙しい」

「……そうか」

アニエスはそうして去っていった。

本当にどうしてしまったのだろうか。

それぞれのISのスラスタが甲高い音を上げながらカウントダウンを待つ中、一際小さいアニエスのアヴニールは前屈姿勢で待機していた。

これはアニエスがクラウチングスタートの姿勢でいるからで、それ

を観客や来賓、レースの相手までも視線を集める。

3……2……1……スタート！ と同時にアニエスが飛び出す。

それを追ってセシリア、鈴……と列ができるが、やはりアニエスに追い付ける物はいない。

瞬発力、機動力を他よりも遥かに上回るアヴニールはあつと言う間に第一コーナーを曲がり、後方を突き放す。

アヴニールは小さい体のためスリップストリームを仕掛けられる心配はない上に、スラスタールの出力が圧倒的であるゆえにそれを許さない。

「行かせませんわ！」

セシリアがライフルを構える。

このレースでは妨害あり。ただ速いだけでは勝てない。

しかし、それはアニエスも重々理解している。その上での先行なのだ。

セシリアの正確な射撃がアニエスを襲うが、アニエスはまるで背中に目があるかのように易々と避けながら、アヴニールを加速させた。

それを見て鈴がセシリアに加勢するが、結果は変わらない。

後方より遙か先を行くアニエス。

観客の誰もがアニエスの圧倒的勝利を確信した瞬間、突然アニエスがコースアウトした。

ピットの扉に一直線。しかし、すぐに出てくる。

その手にはロックキャノンを持っていた。

アニエスは一度コースアウトしてしまったので、失格となるのだが、アニエスはそのような事はどうでも良いという風に、再び空を飛ぶ。

そして次の瞬間、アリーナ中の警報が鳴り響いた。

「やはり読んでいたか。アニエス・アロン……」

ゼフィルスのパイロットは、高速で向かってくる小さなISに悪態をついた。

何となく予感めいた物を感じていた彼女だったが、まさかレース途中にコースアウトして武器を持つてくるとまでは思っていなかった。

ロックキャノンをランス形態にして突っ込んでくるアニエスを、ゼフィルスのビットで迎え撃つ。

しかしアニエスの勢いは衰える事なく、あっという間に目の前まで矛先が迫る。

「ぐっ!」

辛うじてブレードで受け止めたが、重い一撃で後方へ吹き飛ばされる。

体勢を立て直し、敵を睨み付けようとするパイロットだったが、既に目の前にアニエスの姿は無かった。

「上っ!」

「はあああああ!!」

センサーが教えてくれた方向に視線を向けると、ブレードを振りかぶるアニエスがいた。

目は見開き、以前は感じられなかった明らかな殺気がゼフィルスのパイロットを貫く。

そのせいか、ゼフィルスのパイロットはワントempo遅れて防御の姿勢を取った。

鏑迫り合いながら、アヴニールの出力で地面へと押し付けられる。

「織斑マドカだ」

「はっ?」

「亡国企業の織斑マドカ。織斑一夏を殺し、織斑千冬を越える者の名前だ。覚えておけ!」

「——っ!」

ゼフィルスのパイロット『マドカ』の名乗りの直後、アニエスはラストターを逆方向に使ってその場から逃げる。

その瞬間、弧を描いたレーザーがマドカの目の前——アニエスがいた場所を通過した。

「織斑、マドカだと?」

「お前の名前を今一度聞きたい」

「アニエス・アロンだ」

「(では……こいつが?)」

アニエスの名前を聞いて、マドカは小声でブツブツと一人問答をし始める。

「アロンさん。下がってくださいいな!」

突然、セシリアの声が響く。

一夏と箒は避難誘導に行っているらしく、それ以外の全員がアニエスとマドカの所へやってくる。

「サイレント・ゼフィルス、逃がしませんわ!」

アニエスが離れると、四機による多角攻撃がマドカを襲う。

が、マドカはそれを軽々と避けて見せた。

「皆、オレも——っ!」

自分も加勢に入ろうとした直後、アヴニールのセンサーが新手を捉える。

「もう、オレたちを放って置いてくれ……」

喉の奥から発せられた悲しい響きを持ったその声は誰にも届かなかった。

アニエスはマドカを睨み付けてから、新手の方向へ向かっていく。

新手は四機。その中の二機は大型であるとの反応あり。

残りの二機は重なるように移動しているため、片方は支援機かそれに準ずるものだろう。

「見えた。また新型か……」

まず目についたのは、やはり大型の二機。

六本の脚と人型の上半身がくつついた、アグリツサと表示が出るもの。

もうひとつは甲殻類のような概観のザザムザー。

残りの二機にはどちらも『unknown』と表示が出ているが、望遠機能が捉えた様子は黄色のIS二機だった。

「アニエス、援護は——」

楯無からの通信に対し、アニエスは重い口調で先回りした。

「いらん。お前の方にも敵がいる筈だ。そっちに行け」

「わ、わかったわ」

気圧されなから通信を切られ、アニエスは少しだけ罪悪感を覚えたが、すぐに目の前の敵に意識を向ける。

先攻はアグリツサとザザムザー。

プラズマキャノンとエネルギー砲がアニエスに襲い掛かり、アニエスがそれを避けると、ザザムザーがバルカンで応える。

アニエスはロックキャノンでザザムザーへと向け、カートリッジをチャージショットにして放つ。

ところが、ザザムザーの上面にエネルギーシールドが張られ、弾が弾かれてしまう。

「エネルギー質のシールドか。遠距離攻撃じゃ効果は無さそうだならっ」

遠距離がダメならゼロ距離で直接攻撃を。とアニエスはブレードで斬りかかる。

するとアグリツサが六本の脚でそれを遮り、プラズマフィールドを展開する。

アニエスは一瞬だけフィールドに囚われ、即座に脱出するがかなりのシールドエネルギーを失ってしまった。

それにしても、とアニエスは小さな二機を見た。

ザザムザーとアグリツサの攻撃の隙をフォローするくらいならできそうなものを、その二機は全く動こうとしない。

「この二機のデータ採取という訳か……」

ザザムザーはクローがついているものの、やはり本領を發揮するのは遠距離戦闘。

対してアグリツサは近から中距離戦闘を想定されているようだ。

「手こずらせてくれるっ」

ア二エスに向けて、大型二機による一斉砲火が行われる。

それをブレードだけを持ち、ビームや弾丸の間を塗って接近し、アグリツサの下半身を切りつける。

今度はダメージを負おうが構わない。

次にザムザーにブレードを突き刺し、その巨体を蹴ってアグリツサの上半身を切り飛ばす。

更にスラスターを吹かし、黄色い二機に急迫してブレードを振るうが、相手はわかっていたかのように避けた。

(見たことのない機体だ。しかもデカイ方は全身装甲ときた)

色は同じでも見た目が対照的なア二エスの知らないIS。

小さい方は王冠のような黒い頭飾りをつけていて髪は黄色くポニーテールのように後ろで1 つに束ねているが、バイザーのせいで顔は見えない。

また三本のロングソードを携え、黒のロングコートの上に黄色い西洋甲冑に似た鎧を着たような外見をしていて、どこかアヴニールと似た雰囲気を持っている。

もう片方は巨体と地面に簡単に接触してしまうほどの長い腕、イカを連想させる流線型の黄色い鎧に身を包んだような姿だが全身装甲のため、例によって顔は見えない。

小さい方は鎖を大きい方に巻き付けて手綱のようにして扱っている。

回避や突進などの動きは大きい方が担当していて、その巨躯のわりに機敏に動くため、高い素早さと防御力を合わせて持っている。

その上に小さい方が乗っているため死角が少ない上に、ロングソードによる連撃が可能だ。

連携がものを言うだろうが、目の前の二人はさきほどのアグリツサとザムザーなど比べ物にならない程のコンビネーション能力を持っている。

(亡国企業に新型を開発する技術も資金も、ましてやISのコアがあるとは思えないな。なら、バックにどこかの企業がついている可能性

もある……いや。だとしても、コアごと提供する所があるのか？)

ISのコアはどの国も喉から手が出るほど欲しい代物だ。

いくら金を積んでもコアを拝借できるとは考えにくい。

そうになると、亡国企業はどこかの国の回し者ということだ。

(なるほど、そう考えれば戦争が起こっても不思議ではないか)

ある国が他の国にISで侵攻したとなれば、世界中の国々を敵に回したこととなり、その国は報復の対象となる。

奪われたコアやISはもとの国へ戻されるか、行方不明という建前のもとで別の国がネコババするのだろう。

亡国企業は首謀者となる国を悟らせないために作った、もしくは取り込んだか。

どちらにしろ、亡国企業の壊滅はアニエスの目的に必要であると判断できた。

すると、アニエスの動きが止まる。

「オレは……どうしたいんだ？」

その場から動かないのが好機と見たのか、黄色い二機はアニエスに突撃してきた。

ロングソードがアニエスの頬を掠め、お返しと言わんばかりにアニエスは小さいISを大きいISから引きずり下ろし、代わりに自分が乗る。

当然大きいISは振り払おうと無茶苦茶に動き回るが、アニエスは相手の装甲を掴んで離さず、その隙間にブレードを滑り込ませた。

ビリビリと紫電が走り、更に大きく動くことでようやくアニエスを降り下ろすことができたが、大きいISの方はかなりのダメージを受けてしまった。

仲間を心配して再び二機が寄り添うようにして集まるが、そこに現れた隙をアニエスは見逃さず、ロックキャノンに向けた。

「ロック……」

キュウウン…… という音とともにロックキャノン内部のエネルギーが溜まる。

「ファイア!!」

引き金を引くと、収束したが一気に放出され黄色い二機を襲う。

位置の関係で小さい方が的になっていたのだが、それを大きい方が身を呈して小さい方を守り、真つ正面からロックキャノンのチャージショットを受けてしまう。

するとエネルギーが危険値に入ったのか、大きいISは重力に従って地面へ真つ逆さまに落ちていった。

それを追う小さいISをアニエスは逃すまいと砲口を向けるが、それに気付いた相手は煙幕を放出し始めた。

アニエスは苛立ちを覚え、やたら目つたらにロックキャノンを撃ちまくる。

やがて煙幕が晴れるがそこに敵の姿はなく、アニエスは仕留められなかった事に舌打ちをしてから踵を返して帰って行った。

織斑一夏の誕生日は本人の自宅で行われていた。

アニエスは皆が楽しんでいる片隅でその様子を見ていたが、今の彼女は心から楽しんでいるとはお世辞にも言えず、そんな様を一夏が見付ける。

「オレンジジュースよりも、アップルジュースの方が良かったか？」

「そういう訳じゃない」

「じゃあ何なんだよ。アニエス、最近元気ないぞ？」

「女にはそんな時期もあるさ」

「どういうことだ？」

「何でもない」

「とてもそういう風には見えねえんだよ」

一夏はアニエスの事を心配しているというのに、本人はそれを拒んでいる。

その癖何かと世話焼きなのが、どうも何かを隠しているのがバレバレだった。

「あんな事件のあとでよく騒ごうと思うな」

アニエスは遠い目をしながらそう言った。

「むしろ、あんな事件のあとだからこそ、みんな騒ぎたいんじゃないか？」

結局、今回も亡国機業の目的は不明ということで一応の決着を見た。

目立った問題があるとすればセシリアだ。

アニエスが新手の迎撃に向かったあとセシリアは右腕を負傷。今も包帯を巻いてパーティーに参加している。

傷は浅くなかったものの、活性化再生治療を受けることで一週間ほどで元に戻るらしい。

「ところで、誕生日プレゼントをやろう」

「ん？ クッキーか」

アニエスが簪に手伝って貰いながら作った物で、一口サイズのチョコチップクッキーだ。

「誕生日プレゼントという物は初めてなんだな。不格好だが……」

「いや、すごく嬉しいよ。ありがとう」

「あ、あ、あのっ、一夏さん！ け、ケーキ焼いてきましたから！」

と、五反田蘭がケーキを持ってきたので、アニエスは邪魔をしないようにとその場を去る。

そして誰にも見つからないようにして織斑宅を出て、自動販売機の前でポケットに手をつ突っ込んだ。

「まったく……心の休まる時間もない」

さっと振り返り様にポケットから拳銃を抜き取り、背後に立つ人物の眉間に突き付けた。

「織斑マドカ、だったか？」

織斑千冬と瓜二つの顔を持つ人物。

彼女もまたアニエスの眉間に銃を突き付けていた。

「こうしてみると、本当にそっくりだなお前たちは」

「貴様こそ……」

「オレがか？ 誰と？」

しかしマドカは答えず、二人の間に静寂が流れる。

「なら、何をしに来た？」

「ふんっ。知っているだろうに」

「織斑は殺させない。絶対にな」

そう言つて自然と手に力が入るアニエス。

しかしそんな状況にも関わらず、マドカは笑つて見せた。

「いや、織斑一夏は私が殺す。私が私であるために」

「どういう——っ！」

パンッ！ と乾いた音が響く。

アニエスは殺気を感じ取り、咄嗟に避けたがマドカは既に走り去つていった。

暗い夜道だけに、黒い服装をしていたマドカの姿はすぐに消えてしまふ。

「また逃がしたか……。しかし——」

——織斑一夏は私が殺す。私が私であるためにマドカは確かにそう言ったが、アニエスには何のことかさっぱり分からない。

織斑の末女、織斑マドカ。彼女が家族である一夏を殺す理由が見えてこない。

言葉通りに取るとすれば、織斑マドカという存在証明。

一夏の席は、元々マドカが座るべきだった。

(そう言えば、織斑姉弟には両親がいなかったな)

織斑一夏が小学一年の頃には既にいなかったが、果たして本当にそうだったのだろうか。

一夏が持っている最も古い写真は『一夏が小学一年の時の千冬のツーショット』でも、もし織斑マドカが存在していたとすると、いなかったのは両親だけでなくマドカもということになる。

織斑マドカという存在について一夏は何も知らないだろう。

織斑一夏にとって、家族は姉の千冬だけなのだから。

(本当に二人は捨てられたのか？ なら何故マドカは一緒にではなかったんだ?)

「アニエス？」

「——!?!」

どれくらいその場にいたのか、一夏が背後に来たのも気付かなかった。

「どこに行ったのか心配したぜ。こんな所で何してんだ？」

「織斑……」

「ん、なんだ？」

「お前に妹はいるか？」

「はっ？ 俺には千冬姉しか家族はいないぞ？」

「そうか……」

やはり、知らないらしい。

「アニエス？」

「いや、なんでもない。ただ織斑先生に似た人がいたような気がした

だけだ。オレは用事が出来たから一足先に帰る。ではな」
「えっ、ああ。じゃあな、アニエス」

一夏と分かれた後で、先に外に出ていて正解だったと安堵するアニエス。

でなければ、マドカと会っていたのは一夏だったからだ。

アニエスは一夏が見えなくなったのを確認してから、携帯を取り出す。

『もしもし?』

電話の相手は、織斑千冬。

「すみません。少し聞きたいのですが」

『何だ?』

「織斑マドカという人物を、知っていますか?」

『……会ったのか?』

「サイレント・ゼフィルスのパイロットです」

『まさかな……いや』

「貴女とそっくりの顔でした。で、知ってるんですね」

『ああ。だが、一夏には絶対に教えないと約束してくれ』

「わかりました」

『織斑マドカは、義理の妹だ』

「義理?」

『いいか? マドカは……』

アニエスは、千冬の口から『織斑』の過去を知った。

それはアニエスでも言葉を失う程の事実であり、同時に千冬が一夏に教えたくないと言うことに納得のいくものであった。

最近、打鉄式式の進行状況が芳しくない。

アニエスがアヴニールの件で会社の方から用事を言いつけられて、忙しくしているらしい。

それを私に止めさせる権利も道理もない。

元々、打鉄式式は私が作ろうとしていたのだから、最終的な詰めはどのみち私自身の手でやらなければならないと思っていたし。

でも、どうしてだろう。

アニエスはいつも通りの筈なのに、そのはずなのに、彼女の表情はいつもの覇気が感じられない。

まるで目標としていたものが分からなくなったような、志半ばで潰えてしまったような。

要約すると、アニエスは元気がない。

今日も私は教室で打鉄式式の調整画面と睨めっこ。

そんな時、私の嫌いなアイツが教室に入ってきた。

「えっと、イス借りていいか？」

「……………」

私は何も答えなかったが、そいつ——織斑一夏はイスを借りて私の前の席に座ってきた。

しかし、私は無視する。

「初めまして。織斑一夏です」

指を止めて相手を睨む。

「……………知ってる」

私は今まで専用機を使った行事に参加していないのを、織斑一夏が知らない筈はない。

1 発殴ってやろうかと思っただけ、右腕を少し上げただけで留めておき、作業を再開する。

「？」

案の定、私の動きに戸惑う織斑一夏。

「えつと……」

自分に対して敵意があるのに、まだ話し掛けてくるのか。

「……私には、あなたを……殴る権利がある……。けど、疲れるから……やらない」

私は精一杯に織斑一夏を威嚇してみせたが、今までそんな事をしたこともない為、微妙なものになってしまった。

「……用件は？」

「おお、そうだった。今度のタッグマッチ、俺と組んでくれないか？」
「イヤ……」

即答。織斑一夏とタッグを組むなんてイヤなの決まっている。

こいつのせいで私の専用機は完成が遅れている。

半ば我が儘で専用機を一人で組む事を始めたけど、最近まではアニエスと本音が手伝ってくれている。

「そんなこと言わずに、頼むよ」

「……イヤよ。それにあなた、組む相手には……困っていない……」

「あー、いや……」

織斑一夏が言い淀む。ここは諦めさせるためにも、ルームメイトの名前を借りよう。

「私はアニエスと組むから」

「えつ、アニエスと？」

打鉄式式が完成すればの話だけだ。

もしかしたらギリギリ間に合うかもしれない。

それにタッグマッチをするにしても専用機持ちの人数が奇数の為、どうしても一人余ってしまう。

それをどう解決するのは知らないけど、そんな事よりも織斑一夏と組むのは御免だ。

せつかくあと少いで三人の努力の結晶が完成するというのに、そこに土足で踏み込もうとするその愚かさ。

やっぱり1発は殴っておいた方が良いのかもしれない。

「見付けたわよ、一夏！」

突然、四組の扉を開け放ち、中国の代表候補生が現れた。

パートナーの勧誘だろう。これで織斑一夏が彼女と組んでくれればこの話は終わりだ。

放課後、織斑一夏にしつこく纏わり付かれて最終的にアイツの頬を引っぱたいてきた。

何でそこまで私と組みたいのかと訊ねた所「専用機が見たいから」などとほざいたから。

専用機が出来ていないんだって、貴方のせいなんだって言ってやりたかったけど、言葉よりも先に手が出てしまい私はその場から逃げ出してきた。

「そんな事があつたのか」

と、ルームメイトのアニエスは溜息交じりにそう言った。

「で、アニエスは誰と組むのか決めた？」

「いや、今回オレはお前の代わりになった」

「代わり？」

「学園側に打鉄式式がタッグマッチに間に合うかどうか分からないと報告した所、オレは簪が組む相手と、簪がやっぱり出場できないという時の代役として参加するように言われた」

「どう、して……？」

「簪のためだ」

「もしかしたら織斑一夏と組むかもしれない。でも、そうなったら試合中に後ろから撃つっちゃうかも」

「それでも良いんじゃないか？ もとよりアイツはそうされても文句は言えない。この際だ。アイツに向かって溜まっている文句を全てぶちまけて来るといいうのもいいかもしれないぞ」

「私はアニエスと組みたかった」

私と本音とアニエスで組み上げた打鉄式式で、機会があればタツグマッチで因縁の相手を倒してやりたいと思っていた。

「またいつか、機会があった時にな。オレは簪と織斑が組んでもいいと思っっているんだが」

「どういうこと？」

「白式は知っでの通り、近接格闘特化型だ。最近では荷電粒子砲が付いて遠距離射撃ができる様になったが、一番の特徴は高威力と高防御だ。オレとしては打鉄式式でミサイルをばらまいて相手の動きを制限して、白式が雪片式型で仕留めるっていう戦法が良いと思っ
る」

「それは……」

「オレでは織斑の援護は余力できそうもないからな。アヴニールは兎に角速いが売りだし。そうだつ、打鉄式式のまだ完成してない部分に荷電粒子砲があったよな。白式の物では構造が違うだろうが、サンプルとして役に立つだろう。それに今度、アヴニール用に送られてくる『トレイサーガン』にもマルチロックオンシステムが搭載されていて――」

「ちよ、ちよつ、ちよつと……待って……」

「ん？ どうした、簪？」

「ずっと聞きたかった。最近のアニエスの事……」

「オレの事？」

「最近、いつものアニエスじゃないって言うか。空元氣って言うか」
「……………」

「何かあった？」

「簪には隠し事は出来ないな。実は最近アヴニールの件でダダリオ・ネクスト社から色々来ていて寝不足でな」

「そうじゃ、なくて」

「……………」

「アニエスなら、相談に乗るから」

「オレの事は良いんだ。それよりも打鉄式式だろうか？ 織斑が組んで

くれと言ってくるなら組んでやればいいじゃないか」

話が戻ってきた。

まったく、アニエスの本心が見えない。

なんでそこまで織斑を押すのか。

落ち着いて考えれば、私の専用機の完成が遅れている事に、彼に悪気があった訳じゃない。

男でISが使えるという特別な存在ならば、ただの代表候補生である私とどっち優先順位が高いかなど言うまでもなく。

更にその中に織斑一夏が存在はあっても、彼の意見はない。

既に白式は実戦投入してあるのだから、今度は打鉄式式。

しかし私は、姉への対抗心から自らその作業を遅れさせていたのだ。

私の我が儘のせいだ。つい最近まで、誰かに頼る事は甘えだと思い込んでいた私の我が儘だ。

そう思うと、私は非の無い彼を殴ってしまったことになる。

すると心の中で申し訳なさが溢れてくると同時に、彼の人懐っこそうな笑顔を思い出し、二重の意味で顔が熱くなった。

ようやく、簪が織斑とパートナーを組んだ。
何やら事故があったらしいが、それが原因で整備科の協力を仰ぐことを決心したらしい。

これでオレのやる事はなくなった。

後は歴史通りに打鉄式式が完成して、簪が織斑に惚れて、タツグマッチ戦にやって来る無人機を撃退する。

オレの役目はイレギュラーの排除。

絶対にこの学園を、織斑達を守ってみせる。

「しかし、なんとかなったな」

「うん……。みんなのおかげ……」

整備科の先輩たちに手伝って貰い、打鉄式式はようやく形になった。

ただ、マルチロックオンシステムだけではどうにもならず、タツグマッチ戦には通常のロックオンシステムで挑むことになった。

稼働テストを終え、着替えに戻ろうと二人で歩いている。

そこで、この数日間でだいぶ仲が改善された織斑くんは、私はルムメイトの事を相談してみた。

「アニエスカ。確かに、なんか元気ないんだよな」

訊ねても誤魔化されると付け加える織斑くん。

私が聞いても同じだと教えると、二人してどうにかアニエスを元気付けられないかという話になった。

「そもそも、なんでそうなったか、だよな」

「心当たりは？」

「うーん、キャノンボールファストの時にはもう何か変だった気がする」

「確かに……」

確か打鉄式式がキャノンボールファストに間に合わないという話をした日だ。

私服を買って帰ってきたときには、何か思い詰めていたような気がする。

何かがあったとすれば、その時。

そう言えば、その時に織斑くんも一緒だったのでは？

その事を織斑くんに訊ねてみた。

「あの時かあ。確かにあの日が境だったかもな。そう言えば、アニエスが途中でどっかに行っちゃまったんだよ」

「……なんで？」

「わからない。でも、俺たちと別れた後に何かがあったのは間違いないな」

原因を探るのはほぼ不可能だとして。

やっぱり元気付ける方が良いのかな。

「……どうする？」

「アニエスの好きな物って何かかな？」

「……ポツキーかな」

アニエスと初めて会った時の事。

部屋の扉が開かなくて本音の部屋に行ってたのを思い出す。

その時に生まれて初めて食べて食べて気に入ったのがポツキーらしい。

「なんか、普段のアニエスからは余り想像できないな」

「アニエスだって女の子」

「女子って皆お菓子は好きだよな、うん」

私もちよつと意外だと思っうけど。

「後は、アニメ……？」

「アニメ？」

「私が教えた。戦隊モノとかヒーロー系のもの」

最近もアニメとよく見てた。

更に見た後はお互いにどこが良かったとか話し合ったりもした。

世間一般的なガールズトークという物とは違うかもしれないけど、アニメスも楽しそうに話してくれるから、多分それで良いんだと思う。

「へえ、簪はアニメが好きなのか」

「う、うん……」

アニメもお菓子も、私と本音の影響だと思う。

もし寮の部屋が私とじゃなかったら、アニメスは今頃どんな物が好きになっていたのだろうか。

「アニメとお菓子か……。アニメスも結構可愛い趣味してるんだな」

「か、可愛い？」

言われているのはアニメスなのに、アニメを教えた私にも間接的に言われているような気がして照れる。

「なら映画、かな」

「アニメとお菓子？」

ポップキーというよりポップコーンとかのイメージが強いけど、何もポップコーンだけとか、ポップキーだけって訳じゃないし、確かに良い案かもしれない。

「アニメ鑑賞会だと近場で住むだろ？ だから少し出掛けた方が良かなって思ったんだけど」

「うん、良いと思う」

「何が良いんだ？」

「うおっ!? なんだ、アニメスか」

廊下を曲がった所でアニメスと鉢合わせた。

「すまない。邪魔をするわけじゃ無かったんだ」

「邪魔だなんて、そんな……。そうだ、アニメス。明日は予定空いてるか？」

「どうした、突然？」

「よかつたら映画を見に行かないか？」

「映画？」

「アニエスってアニメやお菓子が好きって聞いたんだ。最近、アニエス元気が無いだろ？ だから気分転換にでもって思ってたな」

「気分転換か。良いだろう、明日の予定は無いしな」

「ほっ」

アニエスが了承してくれて何故かホッとする私たちだった。

そしてその直後、彼女がニヤリと笑った。

「だが、余裕だな。他の専用機持ち達はタッグマッチ戦に息巻いているというのに、呑気に映画鑑賞とは」

「うっ」

翌日、アニエスと簪と俺との三人で映画館にやってきた。

昨日の内に調べておいた映画の中から、アニエスと簪が好きそうなヒーローモノのを選ぶ。

天の道に行く主人公が変身して、めっちゃ速くなるヒーローになる映画だ。

上映中、アニエスの事を見ると、登場人物のヒーローに同情のような眼差しを向けていた。

よく分からないけど、あまり効果があったとは言えないかもしれない。

だけど、少しだけアニエスが笑っていた。

そして学園に帰ってきてからアニエス先生のタッグマッチ戦における講義を受け、部屋に戻ろうとした所に、アニエスがついてきた。

「織斑……」

「アニエス、どうした？」

「織斑は、今日見たヒーローをどう思う？」

「どうって……」

あのヒーローは確か過去を帰るために時を遡る奴だった。

「時を遡るといのはな、とても危険な事だと思うんだ」

「うん？」

まるで自分の身近にあったような話し方だ。

「前に、ある人が言っていた。過去を変えてしまうと、その先の未来も変わると」

「そりゃ、そうだな」

「いい方向に変わるならそれでいい、オレはそう思っていた。だが、それによって自分が消えるとしたら、どう思う？」

何か、アニエスの言っていることがおかしい気がする。

映画の話だよな？

「消える？ いや、あの映画は別にそういうのじゃなかった——」

「いや、あの映画の話は本の少しの時間を遡っただけだ。そうだな、青い猫型ロボットなんかは、過去を変えるといふ点では一緒だが、下手をすれば、過去を変えるようにロボットを送った、主人公の身内は生まれなかつた事になってしまうだろう」

「う、うん？」

たしかあのアニメは、歴史を変えても結局主人公の孫は生まれてくることになってるんだけど。

「しかし、時間遡行は出来たとしても、本当に歴史を変えられるのかどうかという話だ」

「変えられるんじゃないのか？」

「例え話をしようか。未来から来た人間が、誰かを殺すとする」

「いきなり殺人かよ」

「なら、誰かを助けるとしようか。未来人は過去にやってきて一人の女を死から救い出した。しかし、その女は自分の父親と結婚する運命を辿る人物だった。そうになると、未来でその未来人は生まれなくなり、同時に過去にやって来るといふ事実も消える。そうになると未来人

が女を救うというのも消えて、その結果未来人が生まれる未来が出来る……。そんなイタチごつこのような考えに至る」

「タイムパラドックスってやつか」

「そこでここで幾つかの考えが生まれる。一つは決して変えられないという考えだ。女を助けようとしてもすぐに別の要因で死んでしまう、もしくはどうしても助けられない。運命からは逃れられないという考え方だ」

「……………」

「オレはこれが凄く正しい気がする。歴史を変えようとしても、人間の力ではない修正力が働いて、結局は同じ結果になってしまう。そう考えると、歴史を変える為に努力するなんてバカバカしく思えないか？」

「うーん、話が難しくなってきたな」

「そもそも、なんで映画を見てそこまで考えるのだろうか。」

映画の中の話は結局はフィクションで、現実では有り得ない話だというのに。

「やり直しはきかない。それが時間だとしたら、オレは……」

「アニエス。よく分からないけど」

俺はアニエスの顔が沈んでいくのを見て、勝手に口が動いていた。

「歴史を変えるっていう話でアニエスが何を悩んでいるのか知らないけど、過去にその未来の人間がやってきた事で、もう歴史は変わってるんじゃないのか？」

「もう、変わってる？」

「いる筈のなかった場所にそいつが立っているんだから、それはその時点でもう変わってる。変えられないって話は何かで読んだことがあるけど、俺が読んだのはそれだけじゃない。石を蹴っただけの筈が、それがきっかけで連鎖的に何か起きて、結果未来が変わるって話もあっただろ？ なら、そいつがそこに立っているだけで、未来は変わってるんじゃないのか？」

「なるほどな。既に石は転がっているという訳か」

石を蹴っただけにな。

「つて言うか、アニエスが元気が無かったのはその事だったのか？」
「ああ、まあそんな所だ」

変な奴だ。と思うと、アニエスにも勘付かれそうだ。

俺の周りの女子は皆、簡単に俺の考えを読んでくるからな。

何でなんだろう。顔に出てるのか？

「少し考えてみる。訳の分からない話をして悪かった。ありがとう、
織斑」

「おう……つと、着いたな」

女子に部屋まで送られてしまった。

男として送る側であるべきなのに。

「じゃあ、お休み」

「また明日なー」

去って行くアニエスの背中の前よりも元気になったように見えるが、やはりまだ何か引つかかっているように見えた。

「簪？ どうした、気分が優れないか？」

そう小声で簪に訊ねた。

タッグマツチトーナメント当日の朝、簪は姉の楯無が壇上に出た所で、何かを思い出したように表情を曇らせていた。

きつく下唇を噛みしめて、その目尻にはじわりと涙が浮かんでい

る。織斑に限って簪にここまで表情をさせることはないだろう。

となると、やはり楯無か。

「アニエス」

生徒会役員として前にいる織斑に気付かれないように涙を拭う簪。

「私、やっぱり……」

「落ち着け。……な？」

俯く簪の頭を軽く叩いてやる。

簪は最近、織斑に好意を寄せ始めていたようだったし、この間も嬉しそうにケーキを焼いていた。

その後には何かあったとすれば、楯無と会ったとか。

簪は楯無に対して劣等感からコンプレックスを抱いていた。

そうなると思織斑と親しそうに話す楯無に嫉妬、やはり自分では姉には叶わないという劣等感再び。

なるほど、それならこの表情もうなずける。

「勝てるさ。その為に訓練を積んできたんだ。そうだろう？」

「そう、だよ。ありがとう」

それで少しは気が紛れたのか、簪は楯無を真っ直ぐに見た。

楯無は箒と組むと言っていた。

IS学園の生徒の中で最強の生徒会長と、人類最高の天才が手掛けた第四世代型ISを持つその妹。

相変わらずパワーバランスを度外視したタッグの組み方だ。

他にも『セシリアと鈴』『シャルロットとラウラ』というタッグがあ

り、箒を含め、その全員が織斑が簪と組んだ事にお怒りの様子。トーナメントの当たり方では、真つ先に織斑がボコボコにされかねない。

と、そんな事を考えていても恐らくは意味がないことだろう。なぜならこのトーナメントは無人ISによって中止にさせられるからだ。

無人機が篠ノ之束の物で間違いは無いが、本来の数ならオレが出る幕は無い。

襲撃してきた無人機は全機破壊したとの情報だったはず。

オレはあくまでバックアップをするだけでいい。

「では対戦表を発表しますー！」

楯無の合図と共に、大型の空中投影ディスプレイが開かれる。

そして第1試合を見たとき、これはもう運命だと思えなかった。

第1試合：更識楯無&篠ノ之箒 VS 更識簪&織斑一夏

213

「簪の所にいなくていいのか、織斑」

「アニエス。いや、いきなり楯無さんとの試合だから、簪に何を言おうか迷っちゃって」

「お前なら迷うことは無いだろう。いつも通り誑かしてこい」

「別に誑かしてなんかねえよ」

「あつ、織斑くん。アロンサーン」

新聞部、黛薫子が走ってきた。

「どうしたんですか？ 俺、ISスーツに着替えに第四アリーナまで行かなきゃいけないんですけど」

「これこれ、オッズなんだけど」

「はあ」

見せられた紙には楯無&箒ペアが圧倒的な人気を誇っていた。学園最強と第四世代はやはり優勝候補だろう。

「ちなみに俺は——げっ。最下位……」

織斑&箒ペアは数人しか人気が無い。

試合中に邪魔が入らなければ、大穴と言えただろうに。

一応、楯無対策はしていた。

楯無のISの性能は織斑も箒も知っているし、付け入る隙はあった。

「まあ、更識さんのデータも未知数だからでしょうけどね。一年最強と言われるアロンさんが出場してたら、多分そっちも人気だったんじゃないかな」

「アニエスってそんな風に呼ばれてたのか」

「そう言えば以前、楯無がオレのことをそう呼んでいたな」

三年と一緒に楯無に挑んだあの時が懐かしい。

なお、二番人気は二年&三年ペア、次にシャルロットとラウラで、すぐ下にセシリアと鈴がいる。

「五組……専用機持ちって現在十人——いや、アニエスも居るから十人なんですか」

「そう。うち一年が八人。今年は異常よ、異常。三年生は一人しかないし、二年はたちちゃん含めて二人しかないんだから」

今すぐ戦争が起きても、IS学園が間違いなく最強だろう。

その十一人だけでなく、この学園の教職員用、さらに訓練機用の物も用意されているのだから。

オレの知るIS二個小隊程の戦力だ。

「なんか、とんでもないですね」

「あなたのせいでしょ、あなたの。しかもほとんどが第三世代型で、篠ノ之さんに限っては第四世代相当らしいじゃない」

代表候補では無いのに専用のISを所持している箒、そして織斑。

この二人が異常な事態の中心だ。

一年の代表候補生達は、それぞれの国がこぞって第三世代型の稼働

データとやはり織斑一夏との接触が目的だ。

それに何が異常かといえば、やはり織斑がISを動かせる事が既にそうなのだが。

「ともかくね、試合前にコメントちょうだい！ 今から全員分行かないといけないから、私忙しのよ！ はい、ポーズ！」

言うなり、カシヤツ！ とシヤッターを切る。

「写真オーケー！ それじゃあコメント！」

「えっと、じゃあ——」

——ズドオオオオン！！

爆音と共に建物が揺れた。

「きゃあつ……!!？」

「危ない！」

連続して続く振動に黛先輩が姿勢を崩し、壁にぶつかりそうになるのを織斑が抱き寄せた。

「大丈夫ですか？」

「う、うん。それより……なにが起きているの……？」

バシヤンツ！ と派手な音を立てて、廊下の電灯がすべて赤に変わる。

続けてあちこちに浮かんだディスプレイが『非常事態警報発令』の文字を告げていた。

『全生徒は地下シエルターへ避難！ 繰り返す、全生徒は——きゃあああつ!!』

緊急放送をしていた先生の声が突然途切れる。

続けて、また大きな衝撃が校舎を揺らした。

「な、何が起きているんだ……!!？」

衝撃は爆発によるもの。

始まったのだ。第二次無人機襲撃が。

連続して起こる衝撃の数だけ、無人機がやってきたという事だ。

「とにかく先輩はシエルターへ！ 織斑、お前は簪の所へ行け！」

「分かった！」

織斑を走らせ、オレは先輩をシエルターへ促してから、出口を探し

て走り出す。

更にポケットから端末を取り出し、織斑先生へと繋げた。

「織斑先生、状況は」

『アニエスカ。無人機が十機、うち五機がそれぞれのペアのピットに侵入していて、更に二機が上空で停滞している。残りの三機は教師陣が対処している』

オレは以前の無人機撃破の功績から、織斑千冬の緊急時の補佐をするように打ち合わせをしていた。

教師陣と専用機持ちの全戦力で自分たちの学校を守ろうというのだ。

「二機が停滞……。くそっ、足止めのももりか！」

五機の無人機と五組の専用機持ちでようやく破壊することができたという筈だったが、そこに更に二機が投入されると危ない。

なら、オレが二機同時に相手をしなければならぬという訳だ。

『更識簪がひとりだ。織斑はどこにいる！』

「今、織斑が簪の所へ向かっている。多分間に合うだろう。それよりも停滞している二機の位置を教えてください」

『二機とも第四アリーナの上だ』

恐らく教職員が準備しているのだろうが、待っていたら攻撃を開始してしまうだろう。

ピットに侵入した無人機は各ペアで対処できる筈だ。

『例の如くセキュリティがハッキングされている。出られるか？』

「またあいつか。本当に面倒な相手だ」

前回、オレにハッキング用の無人機を破壊されてから、護衛用に追加したのか。

篠ノ之束。あんたはいつたい、何をしようとしているんだ。

Episode. 40

今回の無人機は、前回と比べて全ての面に置いて強化されている。しかし一番の特徴はISの絶対防御システムを阻害するジャミング機能だ。

こればかりは、ISの弱点と言っても良い。

ISは大抵、絶対防御システムがある事前提に作られているため、生身が剥き出しの所が生まれる。

そこにシールドが展開できないなどという異常が起これば、操縦者の安全面は大幅に下がってしまう。

攻撃をまともに受ければ命の危険がある。

だが、まだこの時点では未完成なのか、あえてそうしてあるのか、完全にシールドを張れなくするようにはなっていない。

『やつほー、アミちゃん』

「博士……」

オレが上空に迫り着くと二機の無人機うち一機が、篠ノ之束の声で話し掛けてきた。

『やっぱり邪魔しに来てくれちゃったねー』

「当たり前だ。まったく……こんな事をするから、オレは最初アンタが戦争を起こしたんじゃないかと思っただぞ」

『それは違うよ、断じてね。寧ろ私は戦争には反対だよー』

「なら何故、こんな事をする？」

『束さんのひみ、つ♪ とにかくアミちゃんは私の邪魔だから、この子と戦って貰いまーす♪』

「――！」

次の瞬間、斬りかかってくる無人機。

よく見ると両方とも他の無人機とは形状が異なっていた。

下の方にいるのは右腕に巨大ブレード、左腕にエネルギー砲を携えた物だが、オレの相手は片方がよりコンパクトになっていた。

ハッキング機能が付いているのはさほど変わっていない。

しかしもう片方と言うと、ジャミング装置は取り外され、両腕とも

細く、肩と腰と腕に計八本のブレードを携えている。

『この子是对アミちゃんのように改造した無人機、ゴーレムⅢa。この前みたいに甘くはないからね♪』

ジャミング装置が付いている方は防御の姿勢のまま動かず、八剣の無人機は素早く斬りかかってくる。

機械仕掛けとは思えないほど滑らかな動きで繰り出される斬撃は、的確にオレの急所を突いてくる。

オレと戦うように設計されたと言うことは、アヴニールの性能を調べ尽くしてあるのだろう。

あの天才が作り出した物だ。目的が何なのか気になる所ではあるが、それを気にしていられるほど甘い敵では無いだろう。

それに戦っている間は、それに集中しているお陰で嫌な事が忘れられ――

『そうそう。アミちゃん、最近元気が無いらしいね』

――いや、忘れられそうもない。

『私がアミちゃんが消えちゃうなんて言ったからかな？』

「……………」

オレは無人機の攻撃を凌ぎながら、いつか博士に言われた言葉を思い出した。

――タイムスリップの技術は作ったことないからまだ分かんないけど。

――例えば、未来が変わったときにアミちゃんが消えたり、

――もしくは決して未来は変えられないんじゃないかな♪

その言葉の後に、天才なりの理論を聞いて思ったのだ。

もし未来が決して変わることが無いのなら、オレのやっている事は無意味なのだ。

そしてもし未来が変わった時、オレという存在が消えるかもしれない

いと。

どちらもオレには受け入れがたい未来だった。

決して変わらないのは自分が否定されたようで嫌だし、消えるのが嫌だと思うのは、オレが自分で思ってた以上にここの生活が気に入っていたのだと知った。

オレの頭の中はぐちゃぐちゃだ。

『そもそも、この束さんの邪魔をしようというのが間違いだよ』

ぶんぶん。と付け加えてぶりっ子前回の声が、無機質なISから聞こえてくる。

『アミちゃんの話聞いて、それから束さんなり考えたんだ。変えられないのなら、IS戦争を即終わらしてしまえば良いじゃないと』

それは違う。IS戦争は、何者かの手によってコアの製造法が明かされ、ISの製造技術が急速に発展したが故に起こった物だ。

オレが使っていた愛機は第三世代型だったが、オレの知るISは既に第四世代型が量産されていたんだ。

絶対数を増やした保有ISで、ひとつの企業がテロを起こしたのが戦争の始まり。

オレはその企業が、コアの製造法を暴いたのではないかと思ってる。

その企業さえ突き止めれば良いんだと、あの時天才にも相談したというのに。

その天才はどういう思考回路を持っただか、戦争を即座に終結させてしまえと思っただけらしい。

『もしかしたら君のせいかもね。アミちゃん』

「オレの……せい……?」

『もしかしたら、アミちゃんがきっかけで戦争が起こるかもしれないねって言ったんだよ』

「馬鹿な」

『あれれ、そうかい? でも、アミちゃんの意見で束さんはISの開発を急ごうかと思ってるんだけどな?』

「それが戦争に繋がると思うなら、今すぐ止めれば良いだろう!」

『天才の考えは凡人には理解できないんだよ』

「ふざけたことを——っ！」

その瞬間、八剣の無人機が、背中から新たに六本の腕を伸ばし、剣を取って斬りかかってきた。

八本の剣を同時に扱うのは、人間には難しい。

複数のビット兵器を扱うセシリアでさえ、空中で停滞しなければならぬのに、それを激しく動く近接戦闘中に使おうというのは至難の業だ。

天才が手掛けたシステムによる制御がもたらす、人間には出来ない動き。それが無人機の利点でもある。

「ぐっ——」

次第に劣勢となり、ついには上空からアリーナのシールドに叩き付けられ、更にそこへレーザーによってアリーナの中に押し込められた。

それとほぼ同時に、複数のビットから爆発と共に織斑、簪、楯無、箒の四人と、まだ稼働中の無人機が現れた。

『アミちゃん。私は何故ISを作ったか分かる？』

他の人間に聞かせないためか、プライベートチャンネルを通して束が話す。

『力の無いものに力を。救われないものに救いを。不条理ですら吹き飛ばしてしまうほどの力を、そんな人たちに与えるため。とりわけ、自分が自分であるために戦おうとする子には胸を打たれるよ』

「……………」

『分からなくて結構。でも、IS戦争に関してはアミちゃんに一任します。頑張ってね♪』

「なん、で…………」

『アミちゃんがいなかったら、私はずっと目的のために行動すると思う。で、その結果戦争が起きちゃったとしても、私は目的の方を優先するかな。でも、戦争には反対だから、アミちゃんに任せるの』

何て人任せな。

いや、そうだった。篠ノ之束という人物は家族と織斑姉弟以外は殆

どうでもいい、取るに足らない存在だと思っている。

例えばそれが何億人だったとしても、自分の興味の外であれば見向きもしないのだ。

『そもそもなんでアミちゃんはこんな所にいるの？ 戦争を起こした引き金となる人を探すなら、寧ろ裏側から探した方がいいんじゃない？』

確かにそうだ。

ISのコアの製造法を暴くのなら、公の組織ではない。

篠ノ之束に見付からないような所でなくてはならない。

『何回も言うけど、ハッキリ言って邪魔だよ。君』

「……………」

『前はゴーレムのテストだから良かったけど、今回はダメだよ。それでも邪魔をすると言うのなら、この子を倒してから行くんだね！』

ビシイイイ！ と無人機がポーズを取った。

遠隔操作もできるのか、この無人機は。

「邪魔、か……」

『さっさと間違いに気付いた方がいいよ。今なら、その筋の企業に入れてあげるから』

そんな中、凄まじい爆発が起こった。

視線を向けると、さきほどの四人が無人機を破壊したところのようだった。

お互いの健闘に、親指を立てる四人。

オレはあの輪の中にいたかった。

死を確信した時、来世は普通の人間として生きたいと夢見た。

そうだ。これは夢（来世）じゃない。現実（今）だ。

何も成し得なかったオレが、四十年という時を遡り、そして今何を成すか成さないかで迷っている。

「アニエス？」

織斑がこつちに気づき、エネルギーが殆どないまま、装甲もぼろぼろのまま、オレと無人機の間立ちふさがる。

「大丈夫か、アニエス！」

「そんなんで戦う奴があるか、逃げろ。この馬鹿」

「アニエスだってボロボロじゃないか」

篠ノ之束からの通信はない。

織斑が来た事で一度通信を切ったらしい。

「一夏！」

織斑を追って、箒までもがやってきた。

簪は戦闘で負傷した楯無を運んでいる。

簪が正解だ。織斑も箒も間違い。

こんな身勝手な事で戦争を止めるべきか否かを悩んでる奴なんか放って置けば良い物を。

あつ、こいつらはオレの事は知らないんだったな。

「箒、織斑を連れて逃げろ」

「俺は逃げないぞ、アニエス」

織斑が敵に向いたまま言った。

「アニエスはいつも、何かがあると一人で片付けようとするだろ」

「そんな事はない」

「いや、あるね。夏の時だってそうだった。そして今もだ。アニエスは何かに悩んでいるけど、俺に相談したのはあの意味の分からない問答だけだった」

あれその物がオレの悩みでもあるんだが。

「この戦いが終わったら、それが何なのか聞くからな」

「オレが言わなかったら？」

「言うまで聞き続ける」

「勝手にしろ。オレは絶対に言わないからな」

「ほら、そうやって抱え込む」

「……………」

「俺には千冬姉や楯無さんみたいな強さも無ければ、束さんみたいな天才でもない。男でISを動かせるっていうだけの俺かもしれないけど、友達が目の前で苦しんでたら、力になりたいって思う」

「馬鹿め。そんなんじゃないや早死にするのがオチだ」

「セコく長生きするくらいなら、その方がいい」

ああ、そうか。

「俺は俺を誤魔化したくない」

こんな馬鹿がいたんだったな。

見ていたら、大抵の悩みなどどうでも良くなるくらいの馬鹿が。

俺は俺を誤魔化したくない。

オレはこの学園の生活が好きだ。

未来を変えることも、学園生活を満喫することも、両方ともしたいと思いつながら、どちらかが危うくなっただけでどちらを選ぶべきか迷って。

世界と自分、どちらかで迷っている自分が嫌で、誤魔化して。

「アヴニールの、状況は……?」

シールドエネルギーはまだある。

が、ウイングスラスターにダメージがあるせいで機動性に難あり。

だが、瀕死の状態の白式よりはマシだ。

「箒、もう一度言う。織斑を連れて逃げろ」

「えっ、私は……」

「アニエス、いい加減に——」

「オレも!」

直後、ふわっとオレの頬を風が撫でる。

その一瞬の間で、首についたプレートから声が聞こえた気がした。

——まだ、戦うの？

勿論だ。オレにできるのは、戦うことだけだから。

——それがどんな結末を招く事になっても？

未来の事なんて誰にも分からない。

だから人は、ただ己の信じる道を突き進むのだ。

その結果、何も変わらなかったとしても、その過程で己を突き通せたのなら。

だが、オレは違う。変えるのだ。絶対に。それ以外は許さない。

「オレも、オレを誤魔化しなくなかった」

「アニエス?」

スラスターへの負荷を承知で、瞬時加速を使用。

バンツ！ と鋭い加速と、剣の突きを繰り出す。
ゴーレムはそれをシールドで防ぎ、間髪を入れずに八本の剣がオレを襲う。

「……………ない」

オレはこの学園を、織斑たちを守ると決めた。

オレがいたふざけた未来から。そうであったクソツタレな運命から。

なら、オレは叫ぶ。

「……………じゃない」

その行為が、己を消し去るような事であっても。

オレがここに居ることは、絶対に――

「間違いなんかじゃない！」

ぱつと光の粒子が、オレの体を集まる。

固い決意を胸に、相棒の新しくなった名前を呼ぶ。

「来いっ――

――ブラック★ロックシューター！」

Episode. 41★

「来いっ。ブラック★ロックシューター!」

アヴニール・ルー、第二移行。

刹那の間に相棒の新しい情報が流れてくる。

全パラメータが1.5倍に上昇。

新システム追加。

機体名を含む数項目の名称変更。

『アヴニール・ルー』↓『ブラック★ロックシューター(以降、BRS)』

『ルミエール』↓『ブラックブレード』

『ロックキャノン』↓『ハイペリオン』

……etc.

「デیفエンサーモード!」

視界が一瞬だけ青くなる。

次の瞬間、ゴーレムの八剣をシールドエネルギーが防ぐ。

しかし、減ったシールドエネルギーはほんの僅か。

「はああああ!」

オレは名前が変わった新たな剣『ブラックブレード』で、ゴーレムをシールドごと斬りつける。

迷いを断ち切るが如く。

そうだ。オレはもう迷わない。どちらも諦めはしない。

未来も変えるし、夢の学園生活も満喫してやるさ。

「まだだ!」

シールドを失い、再び八剣を振り回すゴーレム。

それをブレードでいなし、腹部に向けてハイペリオンと名と姿を変えた左腕部装備を突き付ける。

「バーストショット!」

チャージショットよりも高威力のエネルギー弾がゴーレムのコアを剥き出しにする。

これだけでは無人機が止まらないのは、先程織斑たち四人がやってきたのが見えていた

ISのコアは頑丈にできている。

ゴーレムは己の接近戦での劣勢を判断したのか、上空に飛翔する。逃がすか。

「カートリッジ、トレイサーガン」

誘導弾を発射するカートリッジ。

もっと早く発現していれば、打鉄式式にも使えただろうに。

四つの誘導弾がゴーレムのスラスタを破壊し、姿勢を崩したゴーレムが落下してくる。

オレは瞬時加速で飛び上がり、ブレードを構える。

「これで、トドメだー！」

ブレードが光を放ち、たちまちエネルギー状の刃を作り出す。

BBジェノサイド。ブラックブレードに発現した高威力の斬撃。

それは広範囲に攻撃することが出来る近中距離のものだが、それを圧縮して単体への攻撃用にしたのが、イクサ・ブレードというシステムらしい。

確かな手応えと共にゴーレムⅢaの動きが止まり、スラスタを吹かして更に上空へ。

「次はお前だあー！」

アリーナのシールドを突き破り、上でハッキング機能を有していたゴーレムをも貫く。

二機のゴーレムは空中で爆散し、BRSも残量エネルギーを警告してきた。

やっと終わったと地上に戻ってくると、そこには口をぽっかりと開けた織斑と箒がいた。

「お前、アニエスか？」

「何を言ってるんだ、お前は？」

「では、その姿はISによるものなのだな」

「??？」

「かつ……」

「か？」

「髪が黒くて長くなってる！」

それは筈の事じゃ無いのか？

と訊ねてみるが、そうではないらしい。

二人はオレの頭を指して言った。

オレの髪は赤だし、長くなんかない。

と、視線の先にちらつと黒い物が見えた。

……髪だ。

オレの頭から出てる髪だ。

黒くて、左右非対称に結ばれたツインテール。

「はっ？」

「本当だ。黒くなってる」

部屋に帰ってから、鏡の前でBRSを纏ってみる。

狭いところでも動きやすいというのは、このISの利点だな。

とまあ、そんな事よりも……

「誰かさんに似てるな。これ」

黒髪の左右非対称のツインテールの知人などオレにはいない。

だが、髪の色を真っ白にしたらどうか。

あの仮面社長め。このISに何をしたんだ。

腰部のウイングスラスターが少し大きい物になった以外は、アヴ

ニールとBRS本体に殆ど差異はない。

髪が伸びた意味があるとは思えないが――

「――だ、誰？」

鏡と睨めっこしている間に、簪が帰ってきた。

やはり赤髪が黒髪になると誰だか分からなくなるようだ。

「オレだ、アニエスだ」

「こんな所で I S 展開して……、しかもウィッグ？」

「いや、アヴニールが第二移行してからこうなった」

「I S を装着って言うよりも、変身みたい」

「劇的なビフォーアフターだ」

「でも似合ってる」

「そうなんだよなあ……」

今まで真っ黒なコートに真っ赤な髪だったから、頭だけ少し浮いていると思っていた事もある。

I S がオレのそんな思いを組んでこうなったと思えば、確かにあり得るかもしれない。

何であの社長なのかは知らないが、もの凄く余計な変身だったんじゃないだろうか。

ちなみに視界が稀に青くなるのは、システム発動のエフェクトで左目に青い火が灯るようになっていたからのようだ。

なんでここはオレの目に合わせて赤じゃなかったんだろう。

I S の考えてる事がわからん。

「取りあえず、会社の方に連絡はしておくか」

「あ、アニエス……」

簪が改まって訊ねてきた。

オレは B R S を待機状態に戻して向き直る。

「うん、どうした？」

「アニエスって、好きな人とかできたことある？」

「何だいきなり……ああ、なるほどな。織斑か」

「ち、ちがつ……くない」

顔を真っ赤にさせて俯く簪。

ほら織斑、やっぱり誑かしてるじゃないか。

「織斑の事で相談か？ オレは特定の誰かを好きだと思った事は無いが、相談なら乗るぞ」

「その……好きな人と仲良くする為には、どうしたら良いかな」

「仲良くって言うか、目的は恋愛に発展するかどうかなんだよな」

「そんなにハッキリ言われると、恥ずかしい」

「誰かを好きになるのは、人として当然の感情だろ。しかし織斑相手は強敵だぞ。あいつの周囲にいる奴らもそうだが、一番の敵は織斑自身だ」

「それは、知ってる」

「キスにしても、相手の感情に気付かないくらいなの、いつそわざとなんじやないかと思うくらいなの唐変木だ」

「キスだけじゃダメって事？」

「キスよりも凄いことしなきゃならないのか。あいつを墮とすのは」
「———!?!」

ぼふっ、と爆発したかのように、簪は耳まで顔を赤くした。

何を考えているんだ、おませさんめ。

「まあ、それは今の所誰にも無理そうだし……。そうだな、まずはアイツの近くに寄る事を考えるか」

「他の人たちみたいにな？」

「それでは有象無象に埋もれるだけだ。お前だけのやり方がある筈だ」

簪はファースト幼馴染み、鈴はセカンド幼馴染みとして織斑の近くにいるのはおかしくない。

セシリアは同じクラスとしてクラス代表の補佐をするという名目がある。

シャルロットは同室で寝泊まりしていたり、織斑がここにいろと言われて、織斑の近くにいる事ができる。

ラウラはおそらく、どんな状況であつても織斑の傍にしようとする度胸があるが、これはラウラ以外にはない真っ直ぐな本人の特権か。

そこに簪が入るとすると……

「簪は、アニメ好きだよな？」

「えっ、うん」

「なら、趣味の共有なんてどうだ？」

「趣味？」

「織斑の趣味の話はあまりした事はないし、あいつも特に何かをやっているようにも見えない。最近は訓練ばかりだったからな。そこ

で簪、お前が織斑に興味というものを教えてやれ」

「でも、どうやって……」

「例えば、一緒に映画を見ようとか……。あ、いや。一緒に部屋でアニメを見ようなんてどうだ？」

「一緒に、部屋で……」

かあーっ、と簪の顔が再び赤くなる。

「が、頑張ってみる……。かも……」

「おう、気張れよ。青春女子高生」

とある真つ暗な部屋で、一人の女性が映像を何度も何度も繰り返して見ていた。

「ふふふっ。やはりそうだったのか」

その人物はディスプレイに映る赤髪の少女を見て、嬉しそうに口元を吊り上げた。

戦いの中で燃えるような赤い短髪が、長い黒い髪へと変わっていった様子を、その人物は黒くなつた赤髪の少女の画像をスクリーンショットして保存する。

そうしてもう一度、進化の瞬間を再生してから、呟いた。

「……さあ、ゲームを始めよう」

『アハハハハッ！ 本当にそっくりだあ！』

連絡としてBRSを纏った写真と一緒に報告した。

するとナフェが大爆笑。画面の前にはいない社長と副社長を除いて他の社員も全員が笑いをこらえていた。

「で、どういう事なんだ。これは」

『総督と瓜二つなのは……まあ、偶然だろう』とマズマ。

『それよりも、ブラック★ロックシューター……装備の名前だけでなく、機体の名前まで変わるとはねえ』とミー。

『ねえねえ、アニエス。今度、この姿で総督の歌を歌ってみてよー』

アハハハハ！ とナフェはまだ笑いが止まらない様子。

いい加減ムカついてきた。

「断る」

『ああ、待て。アニエス』

通信を切ろうとすると、マズマが引き留めた。

「何だ？」

『一応、アヴニール用に用意して置いた新装備だが。来週送る予定だったが、第二移行をして調整が必要になった。だから遅れる。もしかしたら、一度こっちに戻って貰うことになるかもしれないから覚え
ておけ』

「分かった」

『ねえ、アニエス——』

通信終了。

終始ナフェが五月蠅かったな。

社員の中で一番幼い容姿だが、あれで社員の中では開発員としても優秀らしい。

自由奔放な様は、どこかの天才と被る。

……コンコン

部屋をノックされた。

「誰だ？」

「私、そろそろ身体測定」

簪に指摘されて、立ち上がる。

「む、もうそんな時間か」

一緒に行こうと言うことで指定された場所に向かっていく。

「そう言えば、今日は織斑が体位を測るらしいぞ？」

体位、つまりスリーサイズ。

女性ならそう簡単に男には教えない大変貴重な情報を、織斑は腐るほど入手することが出来るというわけだ。

更にこれはISスーツの為の測定でもあるため、下着姿で測る。

ただでさえ男一人に女大勢の中にいるだけでなく、それも加わって世の男たちが織斑を羨ましがるのが更に倍。

「たい……え？」

おそらく楯無の仕業だろう。

楯無のしてやったり顔と、織斑の狼狽する様子が容易に想像できた。

と、保健室の前に向かってくるとなにやら騒がしくなっていた。

「どうした？」

「専用機持ちが、織斑君を……ね？」

「なるほど。把握した」

奥の方で一組の女子達が黄色いような桃色のような雰囲気醸し出して話し合っていた。

聞くところによると、測定の際に織斑が相川の胸を揉んだとか。

目隠しをしていたらしいから、織斑も男なりに配慮と無理をして、結果専用機持ちに成敗されたと。

「胸……」

「羨ましいか？」

「そんな事……ない」

頬を染める簪。

と、織斑の代役が決まったのか測定が再開された。

翌日。

俺は熱を出して倒れたらしい。

鈴に測定して貰ってその時に一度記憶が飛んで。

次に目が覚めた時は皆が揃っていた。

その時に色々あつて、今日はその翌日。

放課後、俺が自室で寝ていると、昨日は顔を出さなかった人物がやってきた。

「織斑、起きてるか？」

自室の扉の向こうから声が聞こえる。

「……アニエスか？」

「そうだ。入るぞ」

そう言つて、赤い短髪のアニエスが現れる。

すると同時に、前に見た黒髪のアニエスを思い出した。

「寝てたのか。起こして悪かった」

「いや、ちょうど起きた所だった」

「そうか。様子を見に来たんだが、何か食うか？」

「そう言えば腹減ったな」

「食欲があるなら大丈夫だな。オレが何か作つてやろう」

アニエスはニコリと笑つて、手に持っていた鞆を掲げた。

鞆の箸からネギが飛び出ている。

「おお、サンキューな。アニエス」

アニエスは台所に行き、調理を始めると、俺の方を見ずに訊ねてきた。

「そうだ、織斑」

「ん、何だ？」

「無人機の前に立ちふさがつて、オレが悩みを打ち明けるまで何度でも聞き続けるって言っていたのはどうなったんだ？」

「あつ。いろいろあつて聞いてなかったな」

取り調べがあつて、蘭の学校に行つて。

更に箸と食事をして、その時間違つて酒を飲んで酔ってしまった箸を部屋に送り届けて。

その時はもうクタクタだった。

「教えてくれるのか？」

「忘れていたのならいい。どちらにしろ、言う気は無い」

「無いのかよ……。まあ、あまりしつこく聞くのも嫌だよな。すまん」

「何だ。諦めるのか？」

と、アニエスは意外そうに言った。

あの時は俺も勢いで言つちまったけど、どうしても言いたくないなら、しつこく聞くと怒られるだろう。

だから……

「アニエスが教えてくれるように努力する」

「そうか」

トントントントン……。

静かな部屋の中に、包丁がまな板に当たる音が響く。

こんな静かな時間はいつぶりだろうか。

それに、今キッチンで料理をしているのは、あのアニエスだ。

「織斑？」

「ん？」

「何も言わなくなったから、寝たのかと思つたぞ」

「いや、アニエスが料理してる所つて初めて見たなと思つて」

学校で自分で料理をする生徒は稀だ。

でも俺は、箸、鈴、セシリア、シャル、ラウラが料理しているのは見た事がある。

千冬姉は忙しいし、簪はまだ知り合つて日が浅い。

楯無さんの料理も見たこと無いな。

「一人暮らしが長かつたからな。一応、仕事仲間はいたが……」

「仕事？ バイトか？」

「いや、傭兵だ」

「よ、傭兵?」

まさかの単語に、オウム返しになってしまった。

「驚くことは無いだろう。ラウラだって軍人なんだし、代表候補生も似たような物だ」

確かにまだ争いが絶えない世の中だけど、まだ高校生なのに傭兵とは意外を通り越して、普通なら信じられない。

「そうか。だからアニエスはあんなに強いのか」

普通なら信じられないが、アニエスの強さの秘訣がそうであるとすれば、すんなりと納得できた。

「強くなければ生き残れない世界だからな、特に傭兵は」

アニエスの背中に一瞬、影が差したように見えた。

傭兵だった頃の事を思い出したといった所か。

ただの小学生や中学生をやっていた俺に、そんな所の事情は聞くのは不味いかもしれない。

「……こんな事を聞くのは変だけどさ、アニエスって苦手な事は無いのか?」

「何だ、それは。唐突に」

「この間、簪に楯無さんが編み物が苦手なんだって聞いたんだ。完全無欠のヒーローなんていないって言っちゃまったにも関わらず、あの楯無さんに苦手な事があつた事に驚いたんだけど」

「オレの苦手な事、か……。傭兵として生きてきた中で色々やったが、苦手な無くすような事をしてきたから最近は苦手だと思つた事は無い。だが、やった事も無い事が多くて分からんな」

「やった事も無い事って?」

「……スポーツ、かなあ」

以外な答えだ。

アニエスは運動神経はかなり良いから、少なくともかじつた程度はあると思つた。

確かにIS学園で身体を動かすって言ったら、その殆どがISの訓練だ。

それにアニエスは元傭兵だと言っていたし、ISは最近ではスポー

ツとしての面が強くなってるけど、兵器には変わらない。

アニエスの中ではISはパワードスーツという兵器なのかもしれない。

「戦う事しかしなかったからな。学園生活も、友達も、オレにとっては夢だった」

「夢、か……。そうだ、今度の日曜に部活回らないか？」

「部活——はっ？」

「アニエスってどこの部活にも所属してなかったよな。だから見に行こうぜ？」

「でも、オレは……」

「苦手な事をさせようとかじゃなくて、やった事無いならやってみようって思ってたさ。夢だったんだろ？」

「むう……。わかった。だが、その前にお前の風邪を治してからだ。それから食え」

アニエスが照れ臭そうにお粥を手渡してくれた。美味い。

「アニエスって料理上手いんだな」

箸やシヤルのような家庭的な料理ではないが丁寧に作っており、鈴やラウラのように食わせるための料理って感じだ。

前に五人の代表候補生たちに料理をしてもらったけど、そのどれよりも何かが違う味がする。

風邪を引いてるから、ではないと思う。

「アニエスって、楯無さん以上にデキる女って感じがする」

「人としては嬉しい褒め言葉だな。なんだ？ 他の女のようにオレは誑かさないか」

「だから誑かしてないって」

「右を見ても、左を見ても女子だらけ。そこに男子は自分ひとりしかない。選り取り見取りも良いところだ」

「弾みみたいな事言うんだな、アニエスは」

赤い髪ってのは皆そうなのか？

いや、妹の蘭は違うか。

「織斑はどんな人が理想なんだ？」

「理想……つて」

「将来結婚するなら、どんな人が良いかと言う意味だ。もちろん理想であって、条件ではないのだから気軽に言えばいい。そうすればお前を想っている連中はそうなるうと努力するだろう」

「そう言うことなら……。うーん……。まずは暴力を振るわない事かな」

「……………ハア」

「な、何だ？ 何でそこで溜息をつくんだ？」

「いや、そこで大半の候補が失われたと思つてな」

「アニエスの言う候補が何なのかよく分からないが、暴力はいけな
よな。」

「家庭内暴力反対運動促進。」

「我々は家庭内暴力を否定します。」

「俺の周りにいる人間は結構暴力的で、弁明を聞いてくれない。」

「その点で言うと、簪や楯無さん、アニエスなんかからは一方的な暴力を振るわれたことはない。」

「千冬姉が出席簿で叩くのは俺が悪いのだし、実の姉であるから結婚は無理だろう。」

「あとは明るいといいな」

「……………ハア」

「アニエスが深い深い溜息をついた。」

「明るくて暴力を振るわない、か……。確かに何かとすぐにISを使うからな、あいつらは。で、お前の中で候補は残ったのか？」

「俺の知っている限りではまだ結構いる」

「その中で専用機持ちは何人だ？」

「専用機？ えっと、二人かな」

「ガタツ と扉の向こうから音が聞こえた。」

「何だろう。誰か来たかな？」

「それよりも、織斑。その二人とは誰だ？」

「ガタガタツ と扉の向こうからまた音が聞こえた。」

「やっぱ誰か来てるよな？」

「どうなんだ？」

「えっと、ひとりは——」

「ボタン！」

「一夏あ！ お見舞いに来てあげたわよ！」

「勢い良くドアを開けて鈴が入ってきた。」

「コホン。私も、お見舞いに来てやったぞ」

「一夏さん？ お加減は如何ですか？」

「一夏、大丈夫？」

「私が丹精込めて作ったウサギのリンゴだ。食べ」

「……い、いつの間に」

「続いて箒、セシリア、シャル、ラウラ、簪まで入ってきた。」

『で？』

「で、って？」

『残った専用機持ち二人とは？』

「六人が声を揃えて訊ねてくる。」

「っていうか、何で知っているんだお前達は。などと聞ける状態ではないのは、目の前の剣幕を見れば一目瞭然だった。」

「と、そこにパンツ、と乾いた音が鳴り響いた。」

「見るとアニエスが手を叩いたらしい。」

「病人に迫るな、お前達。それにお前達が看病するのは明日からだと言っていたが？」

『それは、その……』

「何の話なのか、とにかく六人はアニエスに頭が上がりたらしい。」

「まったく……。お前らは出る。オレも皿を洗ってから出るから」

「アニエスは本日三度目の溜息をついた。」

無骨な鉄の塊が衝突する。

二人の少女が鉄の鎧を纏い、模擬戦をしているのだ。

ISに似たそれは『EOS（イオス）』と呼ばれ、ISに次ぐ兵器を目指して作られた鉄の鎧。

と言ってもまだ発展途上で、稼働時間が極端に短く、反応も遅く、重量を軽減する為の反重力機構も搭載されていない粗悪品。

アニエスが知っているのは、40年後でも未だに研究が成されている兵器で、それでもISには敵わなかったもの。

戦闘よりも瓦礫の除去などに使われる事が多かったもの。

本日のIS学園の授業は、代表候補生によるイオスの運用実験。

その中でもラウラとアニエスは似た物を使った経験があるが、それ以外は真面に動かすこと叶わず、ラウラによってあっさりと地面に転がされてしまう。

「二人とも、そこまで!」

織斑先生の合図で二人の動きが止まる。

一通りのデータを取ってからイオスを片付ける間、アニエスはその完成度に不満を感じていた。

一番の不満点は稼働時間の短さだ。

ISがある以上、性能面で上回らない限り、戦闘には使われない。ならばその点を重視して性能強化しておくべきなのだ。

いくら建前上はISとの戦闘を考慮して開発されていないものとは言っても、イオスをIS学園に送り付けて来た国連の考えは丸わかりだ。

そんな事を考えながら、実習の時間が過ぎていった。

実習後の混み合う女子シャワー室で、鈴がアニエスに訊ねる。

「アニエスの機体って、ダダリオ・ネクスト社が第三世代のISとして作ったんだよね?」

「そうだが?」

操縦者のイメージ・インターフェイスを用いた特殊兵器の搭載を目標とした世代だが、BRSにはそれが無い。

どちらかと言うと第二世代に近いが、既存のISとは全く新しい構造から『別視点からアプローチした第三世代』として見られている。「第二と第三の中間のような機体だな。後は左腕部の可変式遠距離装備が特殊だ。大きくて取り回しが悪いが、他のISほどじゃないな」

BRSの話に食い付いたのは、アニエスの左にいた鈴の他に右のラウラだ。

「BRSの利点には、ISが展開できない狭い場所でも行動できるというものがある。大型のブースターも無いから他より静かだし速い。それに超軽量から来る燃費の良さも売りだ」

「特殊武装よりも、特異性能ということか」

「狭い場所での運用を想定しているダダリオ・ネクスト社の社長って何者なのかしら」

「さあな。天才というのは決まって変わり者が多いのさ」

この時、ただ敵の攻撃を避けやすいという位にしか考えていなかったアニエスだったが、後になって小ささの便利さを知る事になる。

「極超音速飛行用追加推進器？」

「そう。その名も『スコルニル』だ」

現在オレはダダリオ社の上空で、BRSの新装備の実験中。

最終調整にはマズマが担当することになった。

最大速度はマツハ20前後。

戦闘時にはミサイルとバルカンを武器に戦う為に減速する。

スコルニルを装備している間は両翼が剣の代わりになり、ハイペリオンに回すエネルギーをスコルニルの推進力に使うらしい。

高速航行、一対多戦闘を想定して作られたそれは、馬鹿みたいに速いBRSを更に加速させる装備なのだそうだ。

元々アヴニール用に作っていたのだが、二次移行してしまったせいで調整し直していた、アレだ。

「バカなんじゃないのか？」

熟々ダダリオの社長は突拍子も無いと思わされた。

だが実弾兵器があるのは良い。白式のようにエネルギーを無効化する武装に対抗する手になるし、ミサイルの爆発は攻撃と目眩ましの両方に使える。

「さっさと最終調整をしまおう。早く帰らなきゃならないんだ」

フランスに行く前日、オレは織斑先生に早く帰ってくるように言われていた。

理由は聞けなかったが、無人機の残骸と白式が狙われているらしい。

無人機は外には出せないので教師陣で守ることにして、白式は別の場所に一時的に送るようにしたらしい。

「ハイパーセンサーの拡張機能、良好。ちよつと不思議な感覚だな」

スコルニルに搭載された機能の内、その中でも特徴的なものがハイパーセンサーの拡張機能。

スコルニルの最大加速時に、ハイパーセンサーを強化させて状況把握能力を飛躍的に上昇させる。

周りの動きが重くなったように錯覚してしまうが、別に悪いことではないのだ。

他人の声が伸びて聞こえるのは鬱陶しいのだが。

「そんなに急がなくても、スコルニルなら日本までひとつ飛びだ」

「大陸を渡る事を前提として作ってないだろうな、コレ」

ISはこの時代ではスポーツだ。

アリーナという閉鎖空間の中で戦う以上、長距離飛行ユニットは要らない。

キャノンボールファストなどのレースなら、もはやスコルニルに追いつけるISはいないだろうが。

と、ちよつど調整が終わつた頃、オレの携帯端末がけたたましく鳴り出した。

『アロン、今どこだ!』

織斑先生が珍しく慌てた様子だ。

「まだフランスですが……」

『そうか、くそっ!』

「何かあつたんですね? すぐに戻る事もできないわけではないですが」

スコルニルの全速力なら、計算上30分ほどで日本に着く。

空港を通らないという事になるが。

『今、IS学園は何者かに外部からハッキングされ、システムがダウンしている状態だ。篠ノ之、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィツヒ、更識妹の六人がシステムの復帰に努めている。私と山田先生と更識姉で外部からの侵入者を排除する』

「わかりました。ちよつと強引ですが行かせて貰います」

『おい待て、今から戻つても——』

今、スコルニルの話を悠長にしている場合では無い。

織斑先生があれほど焦る事態になっているのなら、それはかなりヤバイという訳だ。

「マズマ、すまん。ちよつと法律犯す!」

「はっ? 待て、ア二——」

スコルニルのスラストを点火、一気に加速する。

音を置き去りにして更に加速。音の壁を何枚も超えていく。

IS学園に到着するまで、約30分。

日本に着くまで思考を巡らせながら、雲の上を通っていく。

(IS学園のセキュリティをハッキングするなど、並大抵の事じゃ出来ない。おそらくあの人……、だが侵入者? 実働部隊を持つ人とは思えんが——ん?)

遙か遠くで、空に舞い上がる物体をセンサーが捕らえる。

すぐ傍に日本列島が見える。

オレは一瞬身構えてしまいが、すぐに減速を始めた。

空中に飛び上がる陰、それは白式だったのだ。
どうやら学園の方へ行こうとしているらしい。

何故織斑が、という疑問は残るが丁度良い。

「織斑っ、行くぞー！」

「ア——ニエス!?!」

一度減速したのは織斑を回収するため。

織斑に後ろから抱き付くようにして捕まえ、文字通りあつという間に加速。

織斑の情けない声を聞きながら、IS学園へと飛んでいった。

Episode. 44

「織斑、見ろ！」

「えっ、アレは!?!」

IS学園が見えた所で減速し始めると、渡り廊下をスーツ姿の何者かに運ばれている更識楯無が見えた。

「行け！」

「ちよ——！」

問答無用で織斑をぶん投げる。

織斑は空中で姿勢を整え、楯無を助けに行った。

オレは学園の上空で滞空して織斑先生に連絡を取る。

「織斑先生、今大丈夫ですか?」

『アニエスか? こっちは大丈夫だ』

「今、IS学園の上に居ます。織斑が楯無を助けに行きました」

楯無を助けた織斑は、何があつたのか壁を壊し始めた。

『アニエス、お一度地下まで来い』

「わかりました」

通信を切り、織斑が開けた穴をオレも通る。

無茶苦茶に破壊していくものだから、後で修理が大変そうだ。

「織斑」

「アニエス。すまん、楯無さんを一緒に運んでくれ」

「わかった」

織斑から怪我をした楯無を受け取り、荷電粒子砲で地下へ進む織斑の後についていく。

「そう言えば、お前は何で此処に?」

「信じられないかも知れないけど、誰かの声が聞こえたんだ」

「連絡……って言い方じゃないな」

誰か、という事は織斑が知らない人の声だろうか。

「……か！」

パネルを操作してドアを開くと、中には織斑先生と山田先生、それに見知らぬ女性が拘束されていた。

「は……え？ 一体何が——」

「説明はあとだ！ 織斑、すぐに篠ノ之たちの救出に向かえ！」

織斑先生の表情から、事態は予想より深刻なのだと判断できた。

「えっ!？」

「位置データを転送する。急げ！」

「は、はいっ！」

織斑が廊下を進んでいくのを見送り、オレは山田先生に楯無を預けた。

その後、捕まっている女性の事を見る。

「織斑先生、彼女は？」

「侵入者の米国人だ。名前は忘れたと言ってるが……」

「それは間違いないと思います。彼女——いや、彼女たちは名前を忘れることを強要されます。例え敵に捕まり、自害することすら出来ない時、少しでも敵に情報を与えないように厳しく訓練された部隊です」

米国人に目を向けると、相手はオレから目を反らした。

「木っ端なテロリストにはISを所有する事なんて出来ない。恐らくは軍属。軍の識別上部隊章があるはずなのに、彼女の身体の見えるところにそれが無い。何故、彼女が米国人だど？」

「言葉の訛りだ」

「なるほど。彼女は『名も無き兵たち』の、隊長ですか」

「!？」

反応あり。正解だ。

ISは数を揃えられないのだから、隊長だという事はすぐに分かる。

アンネイムドには国籍も民族も宗教も無い。

歴史上に名を残せないが、強いて言うならアンネイムドこそが彼女達の名前だ。

「書類上にも記載されない無銘の部隊で、オレも一度だけ作戦に参加した事があります」

「? ……!？」

隊長は一度だけ首を傾げ、思い出したように目を見開いた。
オレの事が情報に無かったとは言い切れない。

軍の裏方役なら、オレの名前を知っていても不思議では無いか。

「彼女はこれからどうするんですか？」

「情報を聞き出してから、そうだな……」

「織斑先生、彼女をオレに説得させて貰えませんか？」

「どうする気だ？」

「オレでは名前が知られていて、どうしても手が回りません。だから裏で活躍してくれる奴が欲しいと思っていた所です。それにアンネイムドは失敗したら終わりの馬鹿げた部隊です。やりようは幾らでもありますよ」

「……分かった。任せよう」

「ありがとうございます。で、オレはこれからどうすれば？」

「まだ実働部隊が残っている。教師たちが迎撃に当たっているが、ア
ニエスも加われ」

「分かりました」

狭い通路も何のその。

またBRSは黒いたため、暗闇に溶け込みやすい。

こちらはISを装備しているため通常兵器は効かず、相手がISだとしても動けるこちらに分がある。

その利点を生かし、ものの数分で敵を片付けてしまった。

「狭い場所では動きやすい方が有利になる。普通のISは図体がデカくなる分、機動性を生かし辛くなるが、BRSにはそんな欠点は無い。
なるほど、これは確かに便利だ」

さて、IS学園のシステムにハッキングできた人物など1人しか思
い付かないが、問題はどこから仕掛けているかだ。

IS学園のシステムは独自のネットワークを持っていた筈、ならば
近くに居るはずだ。

捕虜となった奴らを教師に預け、周囲を探索する。

犯人の居場所を突き止めた後、織斑先生と共にその場所へ赴く。

場所はIS学園から少し離れた所にある臨海公園前のカフェで、銀

の長髪の少女がテーブルにひとりで座っていた。

「相席させて貰おうか」

急に何処かへ去ろうとする彼女を、織斑先生が呼び止める。

「織斑……千冬……。それに……アミちゃん」

「アニエスだ」

「まあ座れ。そら、お前らの分のコーヒーだ。ブラックで構わないな？」

銀髪の彼女は平穏を装っているが、恐怖の色は隠せないらしい。

「さて、結論から言おうか。——束ねに言っておけ、余計なことはするな」

今まで閉じられていた少女の、白目が黒色に、黒目が金色に染められた異色の双眸が開かれた。

刹那、オレと織斑先生は上下も左右も無い真つ白な世界に閉ざされた。

「生体同期型……初期型とするなら、それはIS『黒鍵』。つまりお前は、クロエ・クロニクルだな？」

「ふむ……。なるほど、脳世界では相手の精神に干渉し、現実世界では大気成分を変質させることで幻影を見せる能力か。大したものだ」

織斑先生は自分の首筋を狙ったナイフを手ではね除け、同時にテーブルに備え付けのスプーンで真つ白な空間を刺した。

「えぐりたいか」

ISの能力を生身で抵抗するとは流石世界最強と言ったところか。

織斑先生の言葉に敗北を悟ったのか、オレたちは元の世界に戻ってきた。

「それでいい。ではな」

織斑先生は自分のコーヒーをぐいっと飲み干すと、席を立った。

彼女に手を出す理由は無くなった。

それにクロエ・クロニクルに手を出せば誰かさんが只では済まずまい。

「そういえば、お前の妹には会わなくていいのか？」

「あれは私の妹じゃない……。なれなかった私……。完成形のラウラ。」

ボーデヴィツヒ。私はクロエ。クロエ・クロニクルなのだから」

クロエの言葉に満足したのか、織斑先生は「そうか」と言つて店を出て行った。

クロエの目は、白目が黒色でなければラウラの左目に似ていた。

つまり、そういう事なのだろうか。

「貴女は？」

クロエは織斑先生について行かず、自分を見詰めるオレに対して話し掛けてきた。

「情報では知っていても、実際に会ってみるとお前とは親近感が湧くのは何故なのだろうと考えていたんだが……」

「……………」

「いや、忘れてくれ」

Episode. 45

「訓練終了。お疲れ様、アニエス」

「はい、ありがとうございます。一夏さん」

スコアは大抵が断トツのオレだったが、今日は特にうまく出来ていたと思う。

織斑一夏は第一次IS戦争の英雄で、今はオレが所属している傭兵団で戦闘技術を指南してくれている。

彼だけが男でISを動かし、尚且つ数多のIS乗りを打ち負かしてきた人物だ。

彼の周りには多くの女性がいて、IS乗りの傭兵団であるオレたちも、彼に惹かれるものがある。

「一夏さんは、この後の予定はありますか？」

「この後？ 夕方までは暇だな」

「な、なら。オレと昼食でも……」

「別に良いけど。何だ？ アニエスはまだ自分の事を『オレ』だなんて言ってるのか？」

自分の事を『オレ』と呼ぶ女は、オレの他には誰もいない。

「これはオレの口癖みたいなものですから」

「ならちよつとだけ『私』って言うてみてくれよ。きつとの方が可愛いから」

「わ、私……が、可愛い、ですか？」

年相応に可愛いに反応してしまう。

ましてや相手はあの一夏さんだ

「おう、可愛いぞ、アニエス」

年の差があるのは知っている。

きつと、父親に大好きだと言うのと同じだろう。

「あ、あれ？」

織斑一夏——織斑は高校生で、女たらしで……英雄としての一夏さんは——

「アニエス、どうかしたか？」

オレは40年前にタイムスリップしてきた筈では？

「わた、私は……」

「おっ？ アニエスが自分を私って呼ぶのって珍しいな。そっちの方が可愛いぞ」

「——っ!? そんな。オレなんて」

ダメだ。一夏さんと織斑は同一人物だが、まったく違うと認識していた筈なのに。

織斑はオレの事を真っ直ぐに見てくる。

「アニエスってさ、いつもクールで頼りになって。ISの操縦も上手いし、何より可愛いし」

「オレ……私なんかが、可愛いか？」

気の迷いか、もう一度『可愛い』と言って欲しくて一人称を変えてみる。

すると織斑はオレの知っている一夏さんと同じような、優しい笑みを浮かべた。

「おう、可愛いぞ、アニエス」

「——?!?」

「取り乱したアニエスも、新鮮で可愛いな」

いつの間にか手を握られ、壁に追い込まれる。

「止めろ、織斑。お前は」

「アニエス。好きだ」

そして段々と織斑の顔が近付いてきて……

「……はっ！ 夢か」

オレの記憶の中の一夏さんが、いつの間にか今の織斑になって襲われる夢を見ていた。

恐らく簪から昨日の出来事を詳しく聞いたからだろう。

ワールドページという黒鍵による攻撃を受けた箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの5人。

彼女たちは仮想世界で織斑の姿をしたモノに、赤面ものの何かをしたらしい。

詳しくは教えて貰えなかったが、オレが夢で見たよりも凄いものだったのかも知れない。

「……まさかこのオレがあんな夢を見るとは」

少なくともオレは、一人称を『オレ』から変えた事はない。

ましてや一夏さんに可愛いと言われた事など無かった。

そもそも当時はそんな余裕すらなかったのだ。

「私、か……」

初めて会った時、織斑はオレの一人称に驚いていたな。

突然オレが自分の事を『私』などと呼ぶようになったら、それはそれで驚くだろう。

しかしあの天然女たらしの事だ。

やはり『可愛い』『似合ってる』などと言ってくるに違いない。

英雄としての織斑一夏はオレの憧れだが、女たらしの織斑一夏に言われたところでオレにはまったく響かない。

「アニエス？」

簪を起こしてしまったようだ。

「すまない、簪」

「ううん。それより、どうかした？」

「何でもないさ。ただの夢だ」

「そう？」

織斑に襲われる夢を見たと言えるはずが無い。

「おっと、もうこんな時間か。ちよつと出てくる」

「……うん？ 分かった」

時刻は夜。用事は昨日捕らえた捕虜の事だ。

捕虜はIS学園のとある場所に収容されている。

改めて捕虜の容姿について観察しておく、灰色がかった短髪でつり目がちなのは不機嫌だからだけではない。

そしてどこかシング・ラブに似た雰囲気があるような気がする。

「単刀直入に言うと、今のお前には3つの道がある。ひとつはこのまま一生捕虜として生きる。ふたつ目は逃げ出して本国に帰還する。だ。まあ、どちらにしるお前には『ただ死を待つのみ』という結末しか無いのは分かるな?」

捕虜として大人しくしていても、いずれは暗殺されるかもしれない。

何らかの対策をしなければ、彼女は間もなく死ぬ。

「……三つ目は?」

「オレに協力しろ。知つての通りオレは未来から来た傭兵だが。この後の事を聞けば、お前の選択肢は前の2つになる。どうだ?」

「聞くわ」

「良いだろう。ところで、未来ではISによる戦争が起きる。何者かがコアの製造法を解明し、それを各国にばらまいた事が原因だ」

「——!?!」

ISのコアの製造方法は今の時代では篠ノ之束しか知らない筈で、それを解明した人物がいると聞けば、確かに驚くだろう。

「それに加えお前たちのような次世代量産機計画を企む輩がいたお陰でIS同士による戦争が起こった。文字通り、地図が書き換えられる程の出来事だ」

次世代量産機計画は今進められている最中だろう。

1番始めに完成させたのは日本だが、ISの絶対防御を突破する技術、つまり白式の零落白夜の能力を模したものだった。

零落白夜の出力を下げ、エネルギー効率を向上させる物であったり、雪片や紅椿に使われている展開装甲の技術も取り入れられていた。

「……………」

「心当たりがあるようだな。まあ、そんな訳でオレはそんな未来を来させない為に、原因となった人物を探し出して阻止する事を目的にしている。だがオレは思ったより名が知れてしまった。そこで、オレの代わりに動いてくれる奴が欲しくなったんだ」

「……………」

捕虜は黙っている。

しかし聞く耳を持たないわけでは無いらしい。

何か悩んでいるような、そんな感じの顔をしている。

「甘いわね」

「飴と鞭と言ってな。どうせならあまり鞭を使わず、餌付けするのがオレのやり方だ」

「アニエス・アロン。貴女にひとつ聞きたいのだけど」

「何だ？」

「貴女の母親はどんな人だったか。主に見た目を知りたい」

……………？ 何故、オレの母親を気にするんだ？

「オレの母親は黒髪の女性だった。名前はステラだ。知ってるのか？」

「どこに居るのか。今何をしているかは知らない。だけど……………良いわ。協力してあげる」

「ふむ。ではお前の名前だが……………。お前はアンネイムドの何代目の隊長だ？」

「7代目よ」

「ならお前は今日から『ナナ』を名乗れ。日本の言葉で数字の七を意味する言葉だ」

「分かったわ。私はナナ・グレイ」

「グレイ？」

「苗字よ。それくらいは良いでしょう？」

「まあ、良いだろう。ではナナ、また会おう」